
新米パパ奮闘記！～親子の絆編～

紫水晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新米パパ奮闘記～親子の絆編～

【Zコード】

Z3327D

【作者名】

紫水晃

【あらすじ】

ある日突然、見知らぬ外人幼女に『パパ！』と抱きつかれたらどう感じるだろうか。どうもこうもない。もしも喜ぶなら変人で、悦ぶなら変態なだけだ。常人であればどうするべきかと困るぐらいなものだろう。そしてそれは、俺も例外ではなかつた。……まさかこの出会いが、俺の厄介な毎日が始まるきっかけになるとは夢にも思わなかつたからな。

プロローグ【パパと娘】

「……パパ、つて呼ばれたいなあ」

「…………は？」

夕暮れの下校時。

俺こと久津川時風くつかわトキカゼは、同じ帰宅部所属きたいぶであり生徒会に共に奴隸階級ぬれいき並の扱いを受けている友人・工藤荘介くどうそうすけの妙な発言に足を止める。こいつ、なにを口走りやがった？

「突然によお……外人口りに抱きつかれて『パパ！』なんて言われた日にやあ、俺……どうにかなっちゃうかもなあ……」

どうにかして（警察けいさつに通報つうほうして）やろうつか。

汚物を見るような目付きで真剣にそう思おもうも、相手は俺の友人なのだと一、三度深呼吸と共に言い聞かせ、引き攣ひきしりつった笑みを浮かべながら軽く聞いた。

「な、なんだよいきなり。お前つて、口リコンくろこんだったつけ？」

「ああ。真性まじやうなんだよ」

聞くんじゃなかつた。真剣な表情で頷く友人を見て本氣で後悔する。

「…………え、…………、それで、なんだつていきなり、それを俺にカミングアウトしたんだ？」

なんとこいつか、心当たりがありすぎて怖いんだが。

冷や汗を浮かべる俺に、工藤は真剣な表情のまま俺を真正面から見つめる。

「…………最近のお前は、俺と同じ二オイがするから」

「こいつ殺してやる」

強烈な殺意に意識が奪われそうになる。深呼吸を何度も繰り返して、なんとか着々と殺人計画を進行させようとする脳を抑えることができた。

「あ、あのなあ…………。言つておけば、俺はロリコンじやあ、」

「…………そこから先を、俺は口にすることができなかつた。

そのとき、太股あたりに軽い衝撃を受け少しよろめいた俺は、驚いて後ろを振り返つたのだ。

「…………？」

しかし、後ろには誰もいない。

まあかそんな漫画みたいな展開……と思いながらも視線を少しづつ下げていく。……もつこ(ひ)の時点で嫌な予感というのを感じていたのだが、ギリギリまで抵抗しようとするのが人間の性がである。

そして見事に嫌な予感が的中してしまったのは、これほむつお約束(運命)というのかも知れない。

「……えへへへ」

そうして俺は、「」お、と一輪の花が咲いたような可愛らしい笑顔をした少女と田^たが合^あわ^るとなる。

肩まで掛る長^{なが}さの美しい銀髪。顔立ちは幼いながらも整つていて、十年後の将来をかなり期待させてくれる。薄い青色のワンピースを着ていて、まるで少女のために存在しているんじゃないかと思つほど似合^あいす^きて^る。

そんな少女が、後ろから俺の足に抱きつこう^るのである。

(……ヤバイ)

いろいろな意味を込めてそう思つた。俺はゴクリと生睡を飲み込むと、おー、と横を向く。

今までの人生で見たこともないような表情をした工藤がそこにいた。

呆然依然啞然騷然愕然猛然律然毅然悠然激然憚然俄然已然茫然……。俺が考えうるそのいずれにも該当しないような未知な表情で、工藤はそこに突つ立つていた。

虚ろな目でなにか壊れたような声を出す工藤。震える指を少女に向けながら、俺を見てくる。

「どうすべきか、どうか、逃げるべきか？」と藤の様子を見て恐怖した俺はやつ思案していると、足元にいる少女が、……言つてしまつた。

「……ねえ
“パパ”
? どうしたの?」

少女は、俺を見上げて疑問を口にしただけのことだった。

だがその瞬間、工藤に変化が起きた。

突然、奇声を発して飛び跳ね始めたのだ。正直に言おう。俺は今、
こいつに恐怖している……！

「フオ、フオウオオ！　フオオオオオオオオオオ…！」

俺と少女の周りを飛び跳ねながら奇声を発し続ける工藤。おそらく、自分の願望そのものが目の前にあるというのに、そして、自分ではなく俺に願望が向けられていることに、彼の中のなにかが壊れてしまったのだろうと推察する。

なんで俺、こいつと友人やつていたのだろう。

こいつとのこれからとの距離を改めて考えつつ、工藤の奇行に脅える少女を守るために覚悟を決めて彼に近付くと、

「フオオオオオ、　ふぐおつー？」

股間を黄金の右足で蹴り上げた。なんの躊躇いも容赦もなく蹴つたので、工藤は一瞬で悶絶し、地に倒れて失神した。

悪は、滅びたのだ。

「……もう大丈夫だよ、クルル」

俺は腰を屈めると、脅えて田を瞑つている少女の頭を優しく撫でる。

「……ホント？」

少女は恐る恐る田を開けると、失神して倒れている工藤に田を向け、

「パパす」おーい！」

とキラキラした瞳を俺に向けてきた。

この少女の名前はクルル・ツェンゼ。パパ、なんて呼ばれているが、もちろん俺の娘ではない。とある事情で、俺はこの子の第一のパパとやらになつてているのだ。

(そ、う、こ、え、ば、…)

クルルの頭を撫でながらふと気付く。そういうえば、この子のパパとなつてからもう一ヶ月は過ぎるんだよなあ……。

自然、空を見上げてみる。何度も見上げた空がそこにはある。今、俺はここにいる”といつことを実感させてくれるこの空を、俺はこの一ヶ月で何度見上げたことだらう。下らないことがある度に、死にそうな想いをする度に、俺はこの空を見上げた。

「…………あ。 つてかクルル！ まーたお前は勝手に家を出でて…………あ
れ？」

回想に耽りかけ、ハツとしてなぜクルルが外に出ているのかとい
う疑問にようやく気付き、問い合わせようとしたが、すでにクルルはキ
ヤツキヤツと笑いながら逃げ出していた。

「パパが鬼だよお～！」

嬉しそうに笑いながら走るクルル。……仕方ない。 とりあえず工藤の顔を踏みつけてから追い掛けることにしよう。

……さて、このヤンチャなお姫様を捕まえるまでの間、少し回想に耽るところどうか。

「のまますぐに捕まえてしまつと、遊んでほしいオーラをこれまでかと発しているクルルがスネてしまつかも知れないからな。それまで、まあ、暇潰しだ。

「これは、この一ヶ月の間に起きたいらんな」と話をだけの、ただそれだけの物語。

プロローグ【パパと娘】（後書き）

その日、俺はいつも通り昨日とそれほど変わりない一日を終えるはずだった。そしてそれは、これからも続くはずだった。

……その少女と、出会つまでは。

次回、新米パパ奮闘記～親子の絆編～ 第1話。

【パパと呼ばれて】

……おやじくは、厄介な毎日が始まる。

そろそろ瞬間の明るさが夜の暗さへと移り変わろうとする夕暮れ時、俺はふらふらとした危なつかしい足取りで学校からの帰路を歩いていた。

別に部活帰りというわけではない。今の俺は帰宅部に絶賛入部中だ。

そこでの唯一の活動内容である『やつと帰宅しよう』を俺がこんな遅くまで実行できなかつたのには理由がある。現生徒会長であり、俺の幼馴染みでもある南条澄香にいざ帰ろうとしたところで捕まつてしまい、定時が過ぎるまで生徒会の仕事を無理矢理手伝わされていたのだ。

非人道的な扱いで散々こき使われ、やつと終わつたと思つたら生徒会長に『明日も手伝いに来てくれたら あなたの秘密をバラさなくていいから 嬉しいな』と 中があるかないかの違いで脅迫文に変わる素敵なお言葉を頂き、心身共に疲労してこうしてふらふらになつているわけだ。

俺は一生あいつの下僕なのかな……。紅く染め上がつた空を見上げて涙を堪える。この空のどこかにいるであろう神とやらに助けを求めるところだが、この国は八百万も神がいるふざけた国なので、どの神に助けを求めるかの云々前にありがたみもへつたくれもない。

軽く息を吐いて前方に視線を戻す。

この辺は住宅街なのでまだ歩道と車道の区別がされていない所が多々あり、一週間ほど前にこの近くで、小学生の女の子が車と衝突事故を起こして亡くなる痛ましい事件があつたばかりだ。自分はそうならないという保障はどこにも有りはしないのに、油断して注意散漫となつたところでうつかり事故でも起こしてもしたら間抜け以外のなものでもない。

そうしてある程度の注意を周囲に向けたとき、俺は間抜けにもすぐ事故を起こしてしまつことになる。

それはなんてこともない、人と人がぶつかっただけの軽い人身事故だった。

……まさかそれが、軽い人身事故どころではなく、これから訪れるであろう厄介な毎日の始まりを告げる“事故災害”だということに、このときの俺は気付くはずもなかつた。

「おつと」

太股辺りに軽い衝撃を受けた俺は、少しよろめいて後ろへ一步下がる。目の前の交差点からいきなり女の子が飛び出してきたと思ったら、後ろを向きながら走っていたので進行上にいる俺に気付かず、そのまま俺に突進してきてぶつかってしまったのだ。

俺には軽い衝撃だつたが女の子にはかなりの衝撃のようで、小さな悲鳴を上げて跳ね返るように後ろへ飛び、尻餅を付いた。そのとき女の子の身に付けているドレスのスカートがふわりと浮かび、白いものがちらりと見えてしまつたが、ドキリともしなかつた自分に正常さを確認しつつ女の子の顔に目を向ける。

……思わず、ハツ、として息を呑んだ。

肩までかかつた綿のよう滑らかな美しい銀髪。幼いながらも目鼻は恐ろしいほど端正に整つていて、将来の行く末を期待できる造形をしている。蒼く彩られた瞳には意思の強さを感じさせられ、まるでサファイアのような輝きを放つていて見えた。

そして蒼いきらびやかなドレスをその身に纏つていてるので、まるで精巧な西洋人形ではないかと錯覚してしまいそうなほどに、その女の子は人外離れした美貌をしていた。

俺が女の子に見惚れている一方、尻餅を付いたままの状態でいる女の子は呆然と俺を見上げると、一瞬固まり、やがて目に涙を溜め始める。

「う、うおっ！？ ゴメン！ 大丈夫っ？」

すぐに我に返り、謝りながら腰を屈めて女の子に手を差し出す。ぶつかってきたのは向こうだが、この場合はこちらが大人になるべきだ。肉体的にも、こちらが大人だしな。それに、子供の涙にや俺には勝てん。勝てるとしたら悪人ぐらいいなもんじやないか？

そんなことを思いながら女の子が立ち上がるのを待つていると、

やがて女の手はまくつと両手を前へ伸ばし、

「……へ？」

俺の手には掴まずそのまま立ち上がると、飛び寄へよつて俺の首に小さな腕を回して抱きついてきた。

「パパつー！」

そう呟んで。

「ええーー？」

俺は素つ頓驚な声を上げて体を固める。いつのまに俺は娘を持つ歳になつていたのだろうか。それに、そーなるようなことの身に覚えがまったくないのだが。……というかせ、戸籍違つだろキ!!。

見知らぬ外人幼女に抱きつかれて困惑する俺の耳元に、女の子の小さな泣き声が聞こえてくる。人違い、勘違いの類だとは思うのだが、それを示唆しようとも今は言つべき雰囲気ではないだろう。今の俺にできることと言つたら、差し出したのはいいが使いどころのなかつたこの手を、女の子の頭の上に乗せて所在無く撫でるだけだ。

さて、どうしたものがと軽く息を吐くのと同時。突如前方から車を急停止させる甲高い音が響いてきた。

「なんだなんだあ？」

俺はつるせいなあと顔をしかめて女の子から前方へ視線を移す。

そこには一台の高級そうな車があつた。ベンツだろうか。交差路のど真ん中に停めているので迷惑も甚だしい。どんな奴が乗っているのかと剣呑な視線で眺めていると、黒光りする車体の中から、……明らかに普通の人ではないヤクザのような強面のおっさん達がわらわらと出てきた。

その数、六人。

なぜか全員が全員、般若の面と見間違えそうなほどの嫉妬に狂つたような表情をしていて、殺意に満ちた血走った目で俺を睨んでくるのだが、……氣のせいだと信じたい。

「てんめエ……」

一人、痙攣しているのではないかと心配になるほど体を震わせている男が、一筋の涙を頬に伝わらせながら口を開いた。

「……ふ、ふツ殺すぞゴルアアアアアアツツーーーーー！」

「きなり殺人宣言をされる俺。ホワツツ？ 俺がなにをしたっていふんだ！？」

「ビニの組のもんじヤレフレエエエエツツーーーーー！」

「ビニの組だと言われましても……。

答えなければ殺されると強迫観念に襲われた俺は、なんとか答えようと試行錯誤し……。

「……に、……一年B組ですが？」

そうとしか答えられなかつた。

「ふざけてんのかガキイイイイイツツ！－！－？」

そんなに叫ぶと頭の血管切れちゃこますよと忠告したくなつたが
な血管を額に浮かび上がらせて、全員が“懐”に手を潜らせつつ俺
に近付いてくる。

…… オイオイ。そこになにがあのつてんだよ。

一気に背中が冷や汗でびっしょりと濡れる。相手は六人。なんとかしようと思えばできない数ではないが、銃なんか使われたらさすがにお手上げだ。いくらなんでも、銃弾を避けることなんて人間に不可能だ。

訳も分からぬままに窮地に陥つた俺は、自然と自分に抱きついでいる女の子に意識を向ける。タイミングからして、未だに俺の肩に顔を埋めているこの子となにか関係があるとしか思えない。

状況から考えると、この子はこいつらから逃げていたのだろ。後ろを向きながら走っている姿は、客観的に見れば逃げている姿に映つて見える。そしてそのあとに現れたこいつらは完全に逃げるべき対象だ。勝手な推論と解釈だが、概ね正しいはずだ。

だとしたらここは、この子をすぐに引き剥がして一人で逃げる」とが正しい選択だろうか。

……なわけねえだろ。

ふん、と息を吐き出すよつよその選択を瞬時に放棄する。

俺は自分さえ良ければそれでいいという考え方を持つような人間だ。他人の為になにかをするというのは嫌いだし、そのせいで面倒事や厄介事に巻き込まれるのも更々御免だ。

しかし、

だからといって、

子供を見捨てるまでに人間ができるでないわけではないし、落ちぶれてもいい……！

俺は両手を女の子の背中に回すと、自分に引き寄せるよつよびにギュッと優しく力を込める。

逃げるだけなら俺にだってできる。それに良くも悪くも、『ひと逃走』に関しては得意分野だ。三十六計逃げるが勝ち、だなんて使われる敗戦の計・第三十六計『走為上』のことを熟知するほどにな。情けなくて自慢にもなりはしないが、その情けないことがこうしてここで役立つのだから、自己満足ぐらいうしても構わないだろう。

俺は女の子の肩を優しく掴むと、やんわりと女の子を離す。涙に濡れ、一層の輝きを放つ蒼い瞳を見つめ、安心させるように笑顔を向けると、女の子の両耳を包み込むよつに押さえた。

そして、睨みつけるように田元の前にいるおつせん共を見据える。

静かに決意を込める俺になにかを感じ取ったのか、一人のおつせんが怪訝そうに眉をひそめる。その横で、スキンヘッドかハゲのど

ちらかだらうグラサンを掛けたおつさんか口を歪めるのが見えた。

だが、もう遅い。俺はすでに行動に移っている。

俺は、深く、深く息を肺の許容供給量限界まで大きく吸い込むと、

まるで怒声を絶叫するよつて、轟音を吐き出した。

「…………シ……」

その耳をつんざくような大声により、おっさん共の中には耳を塞ぐ者や、どこで火事がと辺りを見回す者が現れる。しかし、顔をしかめるだけでなんの反応も見せないおっさんも何人かは残っていた。

まあ、それは別にどうでもいい。さっきのはこのおっさん共の意識を反らすためにやつたことではないからな。

俺の目的は、むしろ逆。意識を向けても、ひたすらアーティストとしてある。

もちろん、それは「おひさん共」ではなく、

「火事だつて！？」

「火事い！？」

「どうだ！？」

この辺りは住宅街だから、“一人ぐらいはいるだろ”家の住人達”に対し叫んだのだ。俺の叫びに応えるように、続々と辺りの民家から窓や扉が開き、人が身を乗り出したり飛び出したりしてくれる。

それこそが俺の狙い。人間の心理を利用して衆人觀衆を作り出すこと。

俺が『火事だ』と叫んだ理由はそこにある。人の目を増やしたいときにはこれが一番簡単で確実な方法なのだ。

対岸の火事ならまだしも、隣の火事だつたら自分の家にまで燃え移る危険性がある。人間というのは私利私欲で動いているようなもんだ。自分に損のなることじゃないのかと心配になつて、こうして安全なのかどうかを確かめるために多くの人が出てくるというわけだ。

「久津川流逃走術その一・『対岸と隣の火事』ってか？」

こうも多くの衆人を目前にしては、さすがにおっさん共も銃を使用するという迂闊な行動をするわけにはいかないだろう。警察を呼ばれて困るのはこいつらなんだからな。案の定、どうするべきかと逡巡するように視線をさ迷わせているのが分かる。

その一瞬の隙を俺が見逃すはずもない。

俺は女の子を抱き抱えると、俗に言つお姫様ダッコをするように持ち上げる。そして女の子の軽さに驚きながらも、脱兎の如く駆け

出した。

怒声が後ろから追い掛けてきたが、それを振り切るように更に加速し、すぐに横道に逃げ込んだ。地の利は長年この街で過ごしている俺に分がある。狭い通路や入り組んだ路地、けもの道などは網羅しているので逃げるのは容易だつた。

全力で走り続けること数分。ここまで来ればもう大丈夫だろうと俺は判断すると、女の子を降ろして荒い息を整えるように何度も深呼吸を繰り返した。心臓の鼓動が縦横無尽に飛び跳ねているようだつたが、なんとか落ち着きを取り戻すと辺りを見回す。

「…………おー、…………ハハ…………だ…………?」

近くの警察署まで向かっているつもりだつたが、見慣れない場所に来てしまつたようだ。すぐ側にマンションが見えるが、どこの住宅街だろうか。見覚えがあるんだが思い出せない。住所が分かればなんとかなるんだが……とにかく、今後について考えてみよう。

「うあえがせ！」のまま警察署まで指すのを第一とする。あのうさん共は金田の誘拐が目的そうに見えたし、例えそうでないにしても警察署に逃げ込んでいた方が安全なのは変わりない。

警察自体は信用できないが、警察署の中にさえ入ってしまえば堅牢鉄壁の要塞に守られているみたいなもんだ。そこに関しては信用どころか信頼してもいい。あとは親なりなんなりに女の子の身元が預けられるのを最後まで見届けてから、俺はおさらばすることにしておつ。

問題なのはその後だ。

あのヤクザのやつなおつせん共に顔を覚えられていろと申つので、なんとかして自身の安全の確保に努めなければならぬ。そこんとこには警察に頑張つてもらわないと困る。……面倒くさくなりそうだ。

「……パパ？」

少し後悔の念を抱いて溜め息を吐く俺の顔を、女の子が心配そうに首を傾げて覗き込んでくる。

「……う」

それを間近に見て思わずつめこてしまつ。

なんとこゝか……反則今までの可愛さだった。ロリコンでもない俺がドキッとしてしまうのだから、世のロリコン共がこの女の子を見たらどうなるだらうか。卒倒はしないはずだ。犯罪に手を染めようするだらうな、さつと。

それほどの美貌をこの女の子は持つてゐるのだ。ホント、将来が楽しみだ……つて。

「……な、なあキリ」

俺は今更ながらに声を掛ける。女の子は口元に笑みを綻ばせて『なーに?』と先を促した。それに再度つめきりになりながらも、俺は当然至極当たり前のことを口にする。

「俺、キミのパパじゃないからね?」

「はつかり言い切る。

そして次の瞬間、

「ふ、ふえ……」

女の子は泣き出すといつローサル・ウエポン（最終兵器）を発動した！ 俺に のダメージ！

「……わ、わあー泣くな泣かないでーっ……」

俺は腰を屈めて慌ててあせりながら、そのままの勢いで共に泣き声で居場所がバレるという心配は不思議と想い付かなかつた。ただ純粋に泣き止んでほしこと願つ。

「わ、わかつたつ！ 俺はキミのパパだお父さんだ！ だから、ね？ 泣かないでっ！」

女の子を抱き締めてヤケクソのよつてパパだと呟んで肯定する。

「……本当？」

女の子は鼻をすすりながら俺の目を見つめると、日本語でさう聞いてきた。俺は顔に笑みを張り付かせて何度も頷いた。

「……えへへ～

女の子は嬉しそうに笑うと首元に両腕を回してギュッと抱きついてきた。小さく、弱々しい優しい力でしつかりと。すると温かい感覚が心に芽生えてくる。自然と優しくなるようなほんわかとした気持ち。

「まあ……今のところは、いいかな」

俺はそう感想、せれやれと頭を振るがしかし微笑みを抑えられずにいた。そんな表情をしたまま顔を上げようとして……、

「…………」

「…………」

目が合つた。

買い物帰りだらうか。幼馴染みの南条澄香が、買い物袋を取り落としていた。今日の夕食はカレーなのか、ジャガイモやタマネギやニンジンが地面をこりこりと転がっている。

……ああ。どうりでこの辺りに少し見覚えがあるはずだ。確かこのマンションに一人暮らししてるんだよなこいつ。高校生になつたと同時に実家から引っ越し、荷物を運ぶ手伝いをもさせられた記憶があるのを今頃思い出す。

「……パパ？」

「のびみょーな雰囲気に幼いながらの感性で気付いたのか、女の子は俺から離れると、澄香と俺、固まつて微動だにしない俺達を交互に見る。

「……パパ？」

女の子ではなく、澄香が口にする。俺は冷や汗とも脂汗ともつかない汗を頬に感じた。

澄香はなにやらショックを受けたような顔をして俺を見つめていた。当然だ。この歳にして娘がいる男を見たのだから驚くのも無理はない。セミロングの黒髪が動搖に揺れ、均等のとれた顔立ちはいつもより若干引きつるようになんでいて、少し青やめしていた。……え？ まさか『ロツロン発見』だとか思ってないだろ？ お前？

「…………その子、あなたの……娘、……なの？」

じつやうひきの言葉を聞かれていたようだ。なぜか今にも泣き出しそうな表情をしているのかが不可解だが、澄香のその確認するような口調に胃が痛くなつてくる。

「え、ええーと……娘というかな？」「…………」

しかし俺も面を切つて否定することもできない。否定したらしたでこの子が泣き出しそうなならしないで澄香に変な誤解を生んでしまつ。

俺にびびる？

今すぐ家に帰つて寝たいという欲望に駆られていると、俺と澄香が見つめあって固まつたこの状態になにか勘違いしたのか、少女がおもむろに口を開いた。

「……ママ？」

澄香を指差して言ひ。『ううう、人に指を差したら……つて！

「「ま、ママあッ！？」

俺と澄香は同時に女の子を見つめて言葉を発する。先に断つてお
くが、俺達はなにもやましいことなんてしてないからな！ ほ、ほ
ら！ この子も最後ハテナつけてたし！ 疑問系だつただろ！？

俺は誰に向かって言い訳しているのだ？ 俺のその内心の激動
する動搖をよそに、澄香は淡々とした口調で、だが顔は真っ赤にし
て、俺に聞いてくる。

「そ、その子、私達の子供なの？」

なわけねえだろ！

そう否定したいがこの子が泣くかも知れないので怖くてできない。

「う、産んだ覚えはないんだけど……」

そうに決まつてゐだろ！ ってか俺達、産むようなことなんてし
てないし！

「……でも、信じるわー！」

「つて信じるのかよー！？」

だから明らかに戸籍が違うだろ！ 俺達は純粋な日本人！ この

子は外人！

「じょ、[冗談よ]……」

「じょ、[冗談つて]……」

俺と澄香は気まずそうに視線を反らしあつ。子供の作り方を知識として頭に入つているだけあって、微妙な年頃にいるのだ。

「…………？」

そんな俺達を、女の子は首を傾げて不思議そうに見つめていた。

第1話【パパと呼ばれて】 1 1『邂逅』（後書き）

備考：

久津川流逃走術とは？

主人公・久津川時風が、面倒事や厄介事から逃げるために編み出した逃走術のこと。もっぱら対南条澄香用に使われがちだが、極めて実用的である。本編に登場した久津川流逃走術その一『対岸と隣の火事』は、実際に住宅街のど真ん中で使つても十中八九同様の効果が得られるはずだ。想像してみるといい。対岸の火事であればどうでもいいことだが、隣の火事ならば自分の家に火が燃え移るかも知れないから心配になつて様子を見に行かないだろうか？

一刻も早く警察署に向かいたかつた俺は、余計な心配をさせたくなかつたので澄香にヤクザのような人達に追われていることを説明せず、ここから警察署までの道のりを簡潔に尋ねた。

しかし、くう、と女の子が可愛らしくお腹を鳴らしたのを聞いて珍しく良心が芽生えたのか、『夕飯でも食べてく?』と案を提示され、なぜか澄香の住んでいる部屋に招待されることになつていた。

澄香に煎れてもらつたお茶をすすりながら一息を吐く。

警察署に行きたかつたが、俺の携帯から電話をかけて警察にここまで来てもらうのも一つの手だ。もう外は暗くなつていて、出歩くには少し心もとない。視界が不明瞭だと咄嗟の判断も機転もしにくくなるからな。

それに俺の身元は学生服と顔からすぐにバレるとは思うが、どこのいるかなんて分かるはずがない。だったら外を出歩いて見付かるリスクを負うより、ここで警察が来るまで待つている方が利口だろう。

都合が良いことこのマンションは認証システム式なので、この住人以外は入れない仕組みになっている。入るためにには住人と一緒に入るか、管理人に頼むしかない。……まあ、万が一やつて来た

としても、俺の逃走術で見事逃げ切つてみせてやるがな。

もう一度お茶をすすつてテーブルにコップを置く。それから視線だけを動かしてさりげなく辺りを見回してみる。

久し振りに澄香の部屋に来たが、なんともファンシーな彩りになつたもんだ。辺り一面に埋め尽さんばかりの数のぬいぐるみが沢山あることに少し面食らいつつも可愛らしいとは思う。学校では偉そうな（実際偉いんだが）こいつもやはり女の子なんだなと再確認する貴重な瞬間だ。

「パパ、見て！ 猫ひゃんだよ猫ひゃん！」

俺の真横では、とても気に入ったのか白猫のぬいぐるみを抱えて向日葵のような笑顔を咲かせる女の子がはしゃいでいた。ニヤア、ニヤア、と声真似する女の子を微笑ましげに眺めていると、キッチンで料理を作つていた澄香が声を掛けてきた。

「ねえ、時風。児ポ法つて知つてる？」

「……知つてゐるけど、なぜ今こことそんなことを聞かれるのかが分からない」

「こいつは俺をどんな目で見ていたのだろうか。

それから料理が出来たみたいなので運ぶよつにと命令される。俺はそれぐらいならと立ち上がると、予想通りに今日はカレーだったよつすでに盛り付けられた皿とスプーンを持っていく。

テーブルに三人分並べ終えると女の子の隣に座り、向かい側に水

を持ってきてくれた澄香が座ると、俺と澄香は両手を合わせていた
だきますと口にした。

女の子の声がない」とに気付き隣を見ると、皿を閉じ、額の前で
祈るように両手を来んで瞑想している女の子の姿が見えた。

「 父よ、あなたの慈しみに感謝してこの食事をいただきます。
ここに用意されたものを祝福し、私達の心と体を支える糧としてく
ださい。私達の主イエス・キリストによつて。アーメン」

女の子が淀みなく紡いだそれがカトリック教会の食前の祈りな
は知つていたが、なかなかに様になつていて澄香と一人で感心する
ほどだった。

やがて女の子は皿を開けると、スプーンを手に持つてカレーを食
べ始めた。それを見て、俺と澄香もよつやく女の子から皿を離し、
食事を始める。

澄香の料理を食べるのはこれまで度々あるが、カレーを食べる
のはこれが初めてだつた。女の子のことを考慮して甘口にしている
ようだが、辛口好きの俺でも美味しく感じじる。

「これなら毎日でも食いたいな」

「…………っ！」

気道に入ったのか澄香が激しくむせた。水を一気に流し込んで荒
くなつた息を落ち着かせながら少し赤くなつた顔で俺を睨み付けて
くる。

「あ、あんた、なにを言つて……！？」

「ん？ あ、いや、同じものを毎日食べると毎日で飽きたって聞くけど、このカレーなら毎日でも食えそうだな、なんて思つて言つただけなんだが……」

なにか変なことを言つたか俺？

「ん、ん？……」

一つ咳をしてバツが悪そうに顔を背ける。それから少し取り繕うに女の子に向かつて質問した。

「ねえキミ、お名前は？」

俺も今更ながらに女の子の名前をまだ知らないことに気付き、耳を傾ける。女の子は甘口カレーの美味しさに感激して食べていたのを中断して、礼儀正しく答えてくれた。

「クルル・ツェンゼです」

クルルちゃんか……。可愛らしげな名前だな。

「私は南条澄香よ。よろしくねクルルちゃん

「澄香おばさんって呼んであげてね」

「澄香“お姉ちゃん”ね？」

表情こそは笑顔だが目は暗く濁つていて殺意を彷彿とさせる。な

せだかスプレーを逆手に持ち変えた意図が分からなかつたが、俺は引きつった笑みを浮かべて頭を下げる。

「すみません澄香お姉ちゃん」

「すみません澄香お姉ちゃん」

俺の行動を真似するようにクルルちゃんも頭を下げる。

「クルルちゃんは謝らなくていいのよ。あと、あんたはお姉ちゃんを付けなくていいの！」

頭を軽くペシリと叩かれる。イテツ、と少し頭を擦りながら今度は俺が自己紹介をしようとするとい、

「パパは久津川時風くつかわトキカゼだよね」

と、クルルちゃんの口から自分を紹介され啞然となる。

「え、な、なんで俺の名前を知ってるんだっ？」

驚いて詰め寄るも『だつてパパだもん』としか言わず要領を得ない。まさか本当に俺の子供？と自分に疑惑を持つも、そういえば一度は名字と名前を女の子の前で聞かせていることを思い出し、そのせいだと自分を納得させる。

「歳はいくつ？」

「七歳…」

澄香の質問に元気よく答えるクルルちゃんを見て完璧に自分への疑惑が晴れた。だつてそうだろう? クルルちゃんがいま七歳なら、クルルちゃんが「この世に生まれたのは俺が九歳のときになるのだから」。

内心胸を撫で下ろしていると、再び澄香がクルルちゃんに質問するものが聞こえた。

「へえ、七歳かあ。どこの住んでるの?」

「××市××町88 2です」

「へえー、そこ住んでるんだ… ってそこ俺の家の住所じやん!?」

相槌を打とうとしてシッ ハハをあげる。なんで知っているんだろう? その子は。

真剣に悩み始める俺を見かねたのか、クルルちゃんは寝に手を入れると、そこから封筒を取り出した。

「読んで」

俺はそれを戸惑いつつも受け取り、封を切つて中身を取り出す。

そこにあつたのは手紙だった。俺は折り畳まれた手紙を開くと、それに目を通した。

我が親愛 なる息子へ

この手紙をお前が読んでこるとこ「」とは、お前の元にはクルルちゃんがいるということだわ。

それならば私は安心して向こへ行ける。唯一の心残りがあるとすればお前のことだが…………でもお前なら、一人でも生きていけると私は信じている。

本当なら向こに行く前に一度だけでもお前と顔を合わせたかったのだが……それはもはや叶わぬ夢だわ。この手紙が届いている頃には、私はすでに……

海外で豪遊生活をしていることだからな！

というわけで、お前の側にクルルちゃんがいると思うが、彼女は私の親友の娘でね。可愛いだろ？ だが襲うなよ。襲うなら十六歳になつてからだ。それまでは調教するなり自分好みに開発するなりして我慢しなさい。

おお～っと… お前はこまこの時点で、『この手紙を今すぐ破り捨てて燃やしたい』と本気で思つてしかも実行しようとして澄香ち

やんにでも止められてこるとは思つが最後まで読んでくれ。」これが本題だ。

実はその子は超絶お金持ちの娘さんでね、それが原因で世界各国の要人から狙われているのだよ。そのため、何度も誘拐されかけたことがある。

私の親友はそれに心を痛めていてね。なんとかしてくれる人物を探しているようなんだが、世界中から狙われることになるなんて誰だつて嫌だろ？ 無論、私もお断りだ！

や二でつ！ お前の出番とこつわけだ！

ストップ！ お前のことだから『ふ・れ・け・る・なあ…』
と手紙を破ろ？として澄香ちゃんにでも羽交い締めされていのちよ
つと羨ましいショーナークションを築いていのこりだと思つがもう
遅いぞ？ なにせ私はすでに親友から金をぼったくり……もと
い、交渉成立金を頂いていのからね。

私はその金でちょっとくら『世界豪遊の旅』とこつのをしてくるか
ら、全てお前に任せたぞ！

それからその子にはお前のことを第一のパパだと強力な洗脳をしてあるから、ちょっとやそつとじや解けないからな。私つてすげえ

！ 最高つ！ 完璧つ！ 用意周到ツ！

んじやあ、あとはアロペク。バイバイ

ああ、言い忘れていた。その子は最近まで知り合いのヤクザの親分さんに預けていたんだが、その愛くるしい容姿のおかげで、その組の方々達のアイドル的存在になってしまったんだよ。

なにをするにしても必ず誰かが一人付いてくるから、クルルちゃんその過保護過ぎが嫌になつて何度も逃げ出したりしているんで、組の方々達は誘拐されないか心配でピリピリしているからキヨツケテネ？

一応、お前が第一のパパだということお前の家に住むことは周知していると思うし、協力してあげるよう頼んであるけど、つい力ツとなられて殺されないようにキヨツケテネ？

大丈夫だ！ お前ならこの困難を……………あ、無理だわ。

……………

「最後のなんだよーー！」

いろいろと憤慨するところ満載だったが、一番最後のがかなりムカついた。あのクソ親父、また厄介事を俺に押し付けてトンズラしやがった。というか、なに幼い子供に洗脳してんだアイツはアツ！

あまりもの怒りで体がわなわなと震える。怒髪天衝する勢いだ。

ということはなんだ。クルルちゃんはただ単に過保護に嫌気が差して逃げ出していただけで、しかも追い掛けていた奴らは本当にヤクザで、金目当ての誘拐が目的でもなくクルルちゃんの身を案じて追い掛けてくれた優しいおじさん達だつたつてわけか？

「ハハ、ハ……ハハハ、ハハハハハ……」

もう乾いた笑いしか出でこない。いつもそうだ。なにかを覚悟する度に、俺は空回りするだけで結局のところ意味のないことをしているだけに過ぎないんだ。

「ね、ねえ……だ、大丈夫なの？」

澄香がそんな俺を見て心配そうに聞いてくる。一緒に手紙を読んでいたので、俺が世界各国から狙われるかも知れないことを知つたからだ。

「知るか！」

俺は激情に任せてそう吐き捨てる。そんなもん、俺は承諾した覚えはない。

「え……」

するとクルルちゃんの目から大粒の涙がぽろりと溢れ落ちそうになり……、

「はいウソウソウソだよークルルちゃん！ 賴むから泣かないで
イイコイイコだからー！」

さつ きまでの怒りはビビへやう。瞬時に霧散し、顔に笑みを張り
付かせてクルルちゃんを抱き締めて頭や背中を撫でてあやす。そん
な俺を、なぜか澄香が冷めた目で見つめていた。

そのとき、俺の携帯が鳴った。制服のポケットから取り出して見
てみると、ただ番号だけが表示されている。誰からだろ？ 俺は携
帯を耳に押し当てる。

「……もしもし？」

『クルルちゃんを泣かしたら殺す』

それだけで通話は一方的に途切れた。

「…………」

俺が泣きそうだよ。

「時風もいろいろ大変そうね…………」

澄香が人事のように…………実際に人事だが…………そう言つて俺の手を
引いて立ち上がりさせる。

「え、なに？」

澄香はそのまま困惑する俺を玄関まで引っ張っていくと、

「帰れ」

その一言と共に俺を外に追い出した。

「……え？ え？」

意味が分からぬ。呆然と閉められた扉を眺める。

「ど、ど、ど、ど、？」

よつやく絞り出すよつて声を発すると、扉の向こうから澄香が簡潔に教えてくれた。

「面倒に巻き込むな」

薄情者……

そう叫びたかったが、澄香がそうであることは分かりきっていたことなので口にはしない。後日酷い目に合ひつからといつ理由では、決してない。

「あ、まだ帰らないでね。クルルちゃんが食べ終わるまでそこで待つてなれ」

俺もまだ食べてないのに……。それに待つぐらいなら中で待つてもいいんじや……？

雰囲気からして澄香が怒っているのは分かるが、いつみたいなにが澄香の不興を買ったのかが分からない。まさか泣いているクルルちゃんをあやす時に抱き締めていたのがいけなかつたわけでもあるま

いし。

はあ、と息を吐く。

この理不尽な仕打ちに對しての溜め息ではなく、これから先のことを憂いての溜め息だった。

さつきの手紙が間違いなく俺のクソ親父からの手紙だというは分かる。筆跡も、あのふざけた文章を書けるのもあいつぐらいなんだ。ちやりんぽらんでどうじょうもないあいつだが、嘘だけは吐かないので手紙の内容も信じてもいい。……しかしだ。

世界各国の要人から狙われている女の子が、こんなとこにいるれるはずがないだろ？

それに関しては嘘だとしか思えない。仮にそうだとしても、なぜ俺なんかに任せられるのかが分からぬ。ヤクザの親分に預けている方がよっぽど安全で安心だ。どうして俺のような一般人に任せれる？ その必要はなんだ？

……アホらし。

思考をすぐさま放棄する。あいつの考えなど、俺が分かるはずもない。

おそらくどこかで誰かが俺とクルルちゃんの様子を逐一監視しているだろう。一緒にいるよりも、遠くから監視している方が視野が広がり、危険をより早く察知しやすいからだ。だが、咄嗟の事態の

ときに対応が遅れるところ短所がある。

つまつは、 “それ” が俺の役目なのだ。

咄嗟の事態のときに対応する役目として、 俺が選ばれた。

ただそれだけの」とだ。

「……なりませひせりや」

あ、 やつてやるとか。 やるしかないのなら、 やつてやる。 やりせられればならないのなら、 やつてやる。

虚空を睨み付け、 憎絶な笑みを称える。

あいつの手の内で踊らされるのは慣れている。 せいぜい狂いに狂つて、 亂れに乱れて、 踊つてやる。 成功しても失敗しても笑われる、 道化のよくな。

1 2 『親父からの手紙』（後書き）

備考：

祈り

祈りに関しては様々な解釈がなされていますが、本作品では『祈りとは感謝すること』だと受け取っています。

食前の祈りもその一つです。作ってくれた人に感謝し、料理を食せることに感謝し、犠牲となつた命に感謝し、自分の糧となることに感謝し、それによりこれから先を生きられることに感謝するということです。

そして祈りの言葉によって救われる人も実際にいるのだそうです。それはやはり、その言葉をどう受け取るかの次第なのかも知れませんが。

【平和を願う祈り】

神よ、私をあなたの平和の使いにしてください。

憎しみのあるところに、愛をもたらすことができますように

いさかいのあるところに、

赦しを

分裂のあるところへ、
一致を

迷いのあるところへ、
信仰を

誤りのあるところへ、
真理を

絶望のあるところへ、
希望を

悲しみのあるところへ、
喜びを

闇のあるところへ、
光を

もたらすことができますように、助け、導いてください。

神よ、私に

慰められることがよつも、
慰めることを

理解されることとよつも、
理解することを

愛されることよりも、
愛することを

望ませてください。

自分を捨てて初めて

自分を見出し

赦してこそ許され

死ぬことによつてのみ

永遠の生命に蘇ることを深く悟らせてください。

……そして主人公の彼もまた、祈りによつて救われた一人。この平和を願う祈りのどこで救われたかは、やはり受け取り方次第で分かつたり分からなかつたりするのでしょうか。

クルルちゃんを待つこと十数分。ドアノブが回る音に気付き振り向くと、中からクルルちゃんと澄香が出てくるのが見えた。

「澄香お姉ちゃん、またねー」

「うん。またね、クルルちゃん」

「」の十数分の間に余程仲良くなつたのか、互いに上り下りだけではない心からの笑顔を浮かべて手を振り合つている。「」数年は見たことのなかつた優しさと慈愛に満ちた澄香の笑顔に、「」いつもこんな表情を浮かべられたんだなあ、と感慨深く思つた。

そして澄香は俺に「」愁傷をまと哀れむような目で一瞥をくれると、なにも言わずにドアを閉めた。……あ、しかも鍵も閉めやがつた。

「……はあ」

やれやれと首を振つて、傍らで俺を見上げるクルルちゃんに視線を落とす。不安と心配とが入り混じりながらも真っ直ぐ俺を見つめてくるその目に微かな笑みを映し出し、何気なく他愛のないことを聞いた。

「……カレー、おいしかった?」

「うん。 とってもおいしかった」

「そうか。 ……うん。 それは良かつた」

綺麗で可愛らしく愛くるしい笑顔を浮かべて答えるクルルちゃんの頭を優しく撫でて、俺は歩き出した。クルルちゃんの歩く速度に合わせるよう心掛けてゆっくりと。

そして一階にいる管理人さんに言つて外へと出してもうつた。

外はもうすっかり真っ暗で、夜空に大きくそびえる満月が夜道を淡く照らし出してくれている。

「綺麗だねー」

いつもより一段と美しい光を発する月を見上げて、夜空に輝く星々のようにクルルちゃんが瞳をキラキラと瞬かせた。

「ああ、綺麗だね……」

俺も頷いてそれに同意する。見過ぎると目を悪くすると聞くが、それでも目を奪わずにいられない不思議な美しさが月にはある。それはもしかしたら月に見せられているのかも知れないし、魅せられているのかも知れない。

「……ねえ、パパ」

無言で歩くこと数分。なにか話題がないかと悩んでいると、不意に俺の耳にポツリとクルルちゃんの声が入ってきた。

「パパは、……パパのパパのことが嫌いなの？」

「……パパのパパ？」

首を傾げ、すぐにその意味に気が付く。俺に親父のことが嫌いなのかどうかを聞いているようだ。わっきの手紙の件のときの俺の反応からそう感じたのだろう。

「そう、だなあ……」

腕を組んで暫し考え込んでみる。これはなかなかに難しい問題だ。

「うーん……。嫌い……ではないかなあ……」

それが悩みに悩んで結論として出した、現時点での俺の答えだつた。死んでしまえと恨んだことや、殺してやると憎んだこともあるが、それでも関わりを持ちたくないと避けようと思つたことはない。あんな奴でも、俺の唯一の家族なんだからな。

俺と親父は言動と行動からして仲が悪いと思われがちだが、実際はそうでもない。そりやあ喧嘩も数え切れないほどしてはいるが、その度に悪かつた方が先に謝つて丸く収まつてこる。

喧嘩するほど仲が良いといつ言葉の意味もあるように、互いのことを良く熟知しているからこそ喧嘩というのは生まれるのだ。嫌いだつたら相手のことを理解しようとしていないわけなんだから、そもそも喧嘩なんてしない。

だから嫌いではないという結論を下したわけだ。俺のはただ単に、

親父の思い通りに動かされることに對して憤つてゐるだけで、恨み骨髄に徹すまでには至つてゐない。まあ、俺もまだまだ反抗期から脱け出せない、生意氣なクソガキだつてことだな。

……それはともかくとして。

満月を見上げ、これからのこととに想いを馳せる。

俺はどひやら、今日からクルルちゃんと暮らしていかないとけないようだ。クソ親父はどつかに豪遊しに行つていなし、母親は早くに亡くしていない。ということは、これからはこの子と一人であの家で過ごすことになるわけだ。

「パパ」

俺が不安半分心配半分でそつと溜め息を吐いていたと、クルルちゃんが俺の横から飛び出し、真正面から俺と向き合つよつて立ち止まつた。

「ちょっと遅れちゃつたけど……」

クルルちゃんは両手でドレスのスカートの端を摘むと、気品を漂わせる優雅な動作でお辞儀をした。

「これから先……どうかよろしくお願ひします」

……それは、満月の月明かりに照らされ少女が蒼く輝き、まるで妖精のようだと錯覚さえした幻想的な夜の出来事。

「…………ああ」

それにしづらへ見惚れていた俺は、ようやく絞り出すよつて言葉を発する。

「」の瞬間に決意し決断した、俺の答えを。

「…………ううう、ようじくね」

そして「」の瞬間から、俺の厄介な毎日は始まりを告げたのだつた。

備考：

キャラクター紹介・1

【クルル・ツェンゼ】

銀髪に蒼眼の生糸のフランス人。文化と歴史の中心であり、歴史的建造物と最先端の文化が共存する街・パリに在住していた。

数多くの悪人から幾度となく狙われているにも関わらず、心は廢れず、未だに奇跡的な純糸さを失わずに済んでいる。

それでもやはり警戒心は強いらしく、初対面の相手に対してもはにかと近付こうとしない。ただ、一度懐けば仔猫のようにじやれついてくるので、かなり愛らしいそうだ。

食べ物は基本的に好き嫌いはないが、肉類は少し苦手らしい。ベジタリアンというわけではなく、ただ単に噛み切れないから苦手なだけのようだ。

家族構成は、祖父・祖母・父・自分の四人だけだが、親戚は数多くいる。それに家政婦が十人以上もいるのだそうだ。その中でも一際若いリンネとはよく遊び相手になってくれるので、一番仲が良いようだ。

ちなみに、クルルを漢字にすると枢となる。

音読みでスウ、訓読みでトボソ、クルル。

意味は、物事の要となるところ。

実はこの名前、とある人物が間違って名付けてしまったそうだ。

「ふう……なにも起きなくてよかつた……」

俺は自分の家の前で安堵の溜め息を吐いていた。そんな俺の姿をクルルちゃんが不思議そうに見ている。

この帰路の途中、もし万が一いきなり誰かに襲われてもすぐに対応できるようにかなり神経を張り詰めて歩いていたで、なんのトラブルもなく家に無事着くことができ、安堵していたのだ。……実際に襲われたら助けられる自信なんてないしな。俺は一般市民なんですね。

「ただいまー」

「ただいまー」

俺が玄関の鍵を外しながら言つと、続けてクルルも同じように言った。え？ と振り返りクルルちゃんと目が合つと、えへへへ、とはにかんだ笑顔とじ対面。……つわあなんだろコレ。すげえ不思議な気持ちになる。

その妙な感覚に戸惑つている間に、俺より先に家中へと入ったクルルちゃんが脱いだ靴をきちんと綺麗に並べているのが見えた。

(ほお……、偉いな)

素直に感心する。俺なんて靴はいつも脱ぎ散らかしているの……。靴の脱ぎ方一つでその人の家庭が分かるというが、まさにこれは如実に物語つているなと俺は少し苦笑した。それと同時に、当たり前のことができるいない自分に、子供以下だなと少し自分が恥ずかしくなった。

俺もクルルちゃんを見習つて靴を並べてから家に上がる、まずは広間へクルルちゃんを案内しようとする。

「ねえ、パパ」

しかし、そのクルルちゃんの声に振り返ると、俺の後ろをトロトロと付いてきていたクルルちゃんが、ある一点を見つめて凝視しているのに気付いた。

「これ、なに?」

クルルの視線を追つて見てみれば、そこには俺が中学生の頃、剣道の全国大会で優勝したときに貰つたトロフィーがあった。ただ置いてあるだけなので、埃がかぶつて薄汚れている。

「……ああ、それは俺が日本一だつていう証だよ

俺がまだ部活に熱中していたときの、努力の成果である。そのことを簡単に説明すると、クルルの顔がぱあと明るくなつた。

「へえ~! パパ、日本一なんだ! すばらしい!」

「うぐひ……。その尊敬するよつたな眼差しに俺は顔を背ける。……
うわ……」この子、可愛いなあ……！

特殊なダメージに身悶えしていると、更にクルルちゃんは質問してきた。

「ねえねえパパ。じゃあこれはなに？」

壁に飾つてある大きな額縁に目を留めていた。確か、これはクソ親父が釣り上げた大物の……。

「えーと、それは魚拓つて言うんだよ。お魚さんを真つ黒にさせり、その上に紙を押し付けたらそんな感じになるんだ」

詳しく述べないが、大体は合つてているだろ？。見栄の象徴というフレーズが頭をよぎつたが、なんとなく口にはしなかった。

「へえ？。じゃあこれはこれは？」

「うん？ それはね……」

やはり子供は好奇心が旺盛だ。疑問に思つたことはすぐには聞いてくる。それを親切丁寧に説明するのが年長者の務めなので、間違つたことや嘘を教えないよう注意しなければならない。間違つた知識は、将来間違つた方向へと向かわすことになる要因となるからな。

「パパ～、これは？」

クルルが廊下の隅に落ちていたソレを拾つと、俺の側まで寄つてきて、両手を突き出して見せてきた。

「ああ、それは親父がいつも読んでもる工口雑、 ぬおオオツ！？」

何氣無く答へようとしてソレに気付いた瞬間、俺は瞬きをする刹
那よりも早くソレに向かつて手を伸ばしていた。おそらく、光より
も早かつたと思ひ。クルルちゃんからソレを奪い取るよりこ掴むと、
すぐに後ろ手に隠した。

「ハ、これはねえ……！ ええーと……！」

なんと詰つべきかパニクる俺に、クルルちゃんは更に質問をして
くる。

「それから、それに書いてあつた『きんだんのせ～きょうこ～』つ
てな～に？ 男の子も女の子も、みんな裸だつたよ？」

しかもあんのクソ親父の野郎……！ ひらがなでルビをふつてあ
る口リモノの雑誌を置いてやがったのかア……！ つてか俺のじや
ないのになんで俺が焦らないといけないのだろうと理不尽な想いを
抱きつつも、俺はこの場を切り抜けるための言葉を必死に脳裏から
探し始める。

この純粹な好奇心で尋ねてくるクルルちゃんに、俺はなんと答へ
るべきなのか……！

「……あー、そ、それはだねえ……その……お、大きくな
つたらねつ！ さ、最低でもクルルちゃんが十一歳ぐらいになつた
ら誰かが教えてくれるよつ！ うん！ たぶん学校の先生にねつ！」

苦惱した結果、最低五年後の未来まで「まかすこと」にした。性に

関する正しい知識を教えることは俺には無理だ。だからあとはよろしく頼む。まだ見ぬ（見る）ことはないだろ？が）性教育の先生よ。

「ん~……」

だがしかし、なぜかクルルちゃんは難しい顔をしている。ふ、不満なのかな？

「ど、どつかした？」

「……私、パパがいい」

クルルちゃんは俺の手をその小さな手でギュッと握ると、真摯な瞳で俺を正面から真っ直ぐ見つめ、……言つた。

「お願い、パパ……。私が大きくなつたら、パパが私に『せ~きよういく』を教えてね……？」

……死ぬ。

そう思つた。この少女に俺は殺されるとも思つた。それほどの衝撃が俺の脳髄を貫いたのだ。俺は心臓を押さえ、妙に高鳴つているのをなんとか落ち着かせると、この瞬間にタイミング良くく鳴つて、いる携帯へと手を伸ばした。

「……もしもし」

『…………よく耐えたな。見直したぞ小僧』

そして通話は一方的に切られる。

……お誓めの言葉、誠にありがとうござます。あなたがこれから見てるんだよ、ところが疑問はこの際無視するところだ。

少し時間が掛つたが、ようやくクルルちゃんを広間へ案内することができた。

広間の角の近くにはテレビが置いてあり、その手前に机と椅子が並べてある。すぐ隣にはキッチンがあるので、作った料理はここに並べて食べるのだ。

俺の部屋は広間の北側にある扉がそれだ。東側に空き部屋があり、そこをクルルちゃんの部屋にしようと思つてゐる。……だがそこは物置として使つていたので、片付けるのに結構時間が掛るな……と思つていたのだが。

「……え？」

「どうだけじゅうじゅしてたかなど様子を見るために扉を開けると、そこには立派な女の子の部屋があった。

「あ、私の部屋だ！」

クルルちゃんが喜んで部屋へと入つていいく。綺麗に整頓されていてこつちまでもが清々しくなるような部屋だ。俺はいつのまに……と愕然とする。

用意周到じやねえか。

もつ呆れて声もでなかつた。あのクソ親父、無駄に実行力がいい

なホント。

俺は溜め息を吐きながら、そついえは……と気になつていたことがあつたので、ベッドに腰掛けているクルルちゃんに尋ねた。

「ねえクルルちゃん。日本語かなり上手だけど、誰に教えてもらつたの？」

今今まで氣付かなかつたが、外人さんが日本語を喋るときは少し発音がおかしいはずなのだが、この子からは違和感を感じさせられないほどの流暢な日本語が聞けるのだ。それが不思議だつた。

その疑問に、クルルちゃんは元氣よく答えた。

「お父さんに教えてもらつたのー。」

え？ お父さん？

俺は一瞬混乱したがすぐになるほどと氣付く。……本当の父親のことか。

「……そつか。お父さんにか。クルルちゃんは、お父さんのこと好き？」

「嫌い」

その意外な言葉に俺は目を丸くする。さつき元氣よく答えたとき、まるで父親を自慢するような誇らしい表情をしていたの。

「…………だつて、お父さん。いつも私を一人にするんだもん……」

その寂しげな表情に俺はなにも言えなくなる。そして気付いた。
……たぶん、この子は俺と一緒に住むのだ、と。

父親がいないから一人になるということは……おそらく、母親はないのだろう。……この子はまだ七歳。まだまだ親に構つてほしい年頃なのだ。超絶お金持ちであるらしい父親は、なにかと忙しくて娘に構つていられないのだろうなと簡単に推察できた。

もしかしたら、クルルちゃんの父親はそこにも心を痛めていたのかも知れない。……なんとなくだが、あのクソ親父が俺を第一のパパとやらせた理由が分かつたような気がした。

「…………ねえ、パパ」

クルルちゃんは顔を上げると、瞳を潤ませて上田使いに聞いてきた。

「パパは、私を一人にしないよね…………？」

同じ境遇であるこの寂しげりな少女に答えられる言葉は、一つしか思い付かなかつた。

「うん。……約束する」

子供からすれば、それはこの世で最も重い言葉。それを破られたときの悲しみは、俺は誰よりも知つている。

だからこそ、答えた。

「……えへへ～」

まるで心底から沸き出るよつに嬉しそうな笑顔になると、クルルちゃんはベッドから降りて俺に向かって駆け寄ってきた。そしてそのままの勢いで腰の辺りにギュッと抱きついた。

これから、俺はこの子と一緒に暮らしていく。

その生活は、もしかしたらすぐには終わるのかも知れない。

「ひして出会ったのであれば、いつか必ず別れの時は訪れるのだ。それは、この世に生まれたと同時にいつか必ず死ぬと約束されるのと同じように。」

……だけど、ずっと続くかも知れない。

それがただの願望になるか、現実になるかは、……それは俺達次第で決まるのだろう。

なら、やってやるひじやないか。

「パパ、だい好き！」

決心する俺の顔を、見上げるよつにしてクルルちゃんが無邪気に覗き込んでくる。俺は顔を真上に上げて悶絶した。

……だ、だがまず第一に、俺が口リコンにならないよつ氣を付けなければならないな……！

なった瞬間にパパにはなれないし、もちろん一緒に暮らしていけないし、澄香には軽蔑されるし、……ヤクザの皆様には殺されかも知れない。

そういう諸々のリスクを含めて、俺はこの子のパパになると決めた。

だから改めて、今度は俺から言つことにする。

「クルルちゃん」

腰を屈めてクルルちゃんと田線を合わせると、軽く頭を撫でながら告げる。

「これから先……どうかよろしくお願いします」

それを聞いたクルルちゃんの反応は。

「うそー、うそーうそー、『パパ』！ー」

これはある日突然、新米パパとやらになってしまった俺こと久津川時風が最愛の娘と毎日を過ごす、ただそれだけの物語。

1 4 『パパと娘』（後書き）

俺にだつて友達の一人や二人はいる。

いい奴がいたら嫌な奴もいるし不思議な奴もいれば危険な奴もある。生きていれば様々な人と出会うことになるのだ。そして出会つていいくうちに、真の親友というのはやがて巡り会えるのだろう。

次回、新米パパ奮闘記――親子の絆編――第2話。

【類は変人達を呼ぶ】

そしてその親友が同性愛者だった日にはトラウマになるだろうな。

「え……？ もう……こんな時間か……」

小鳥の囀る声をBGMに、枕元に置いてある目覚まし時計を凝視しながら半ば呆然として呟いた。短針はすでに起床時刻である六時を悠然と示している。目を擦つてからゆっくりとした動作で体を起こすと、ぼさぼさになつた髪を搔きながらすぐ隣の布団の小さな膨らみに目を落とした。

「すう…………すう…………」

そこには、可愛らしい寝息を發てて眠る美少女がいた。横向きに丸まつて眠るその姿はまるで猫のようである。さらさらとした銀髪が、カーテンの隙間から漏れる太陽の光に照らされ輝いていた。

（……可愛いなあ）

その無垢で愛くるしい寝顔に寝不足の空虚感も失せ、穏やかな気持ちになる。邪まな気持ちにならなかつたことに自分の正常さを確認しつつ、俺は大きな欠伸をした。

なぜ俺がクルルちゃんと一緒に眠つていたのか、理由はもちろんある。昨夜、俺がさあ寝ようと電気を消して布団に横になると、ピンクの女の子らしいパジャマを着たクルルちゃんが部屋の扉を開け

て入ってきたのだ。

「ねえ、パパ。……一緒に寝よ?」

નુદીની

初めて来る家で部屋に一人きりだというのはなにかと不安なのだろうと心情を察して、俺はクルルちゃんと一緒に寝ることにしたのだ。……もちろん、クルルちゃんの言葉に、くらあ、ときてしまつたのも理由の一つとしてある。言い訳はしない。

それが俺がクルルちゃんと一緒に寝ていた理由だが、俺が寝不足になつてゐる理由はそれとは違う。というか、クルルちゃんと一緒に寝ていたから眠れないってどういうことだこの口リコン野郎、という話になつちまうから先に断固否定しておく。

クルルちゃんが布団に潜り込んできて隣に横になると、すぐ脇に置いてあつた携帯から着信音が鳴り始めたのだ。

卷之三

もつ嫌な予感しかしない。俺は少しどキドキしながら携帯を耳に押し当てる。

「…………もしもし？」

『クルルちゃんと……一緒に、寝るのか……。……そうか……。一緒に、……。……小僧、さつさと寝る。安心しろ。眠つたらそのまま“永眠”させようだなんて考えていない。だから、“安らかに眠れ”。いや、深い意味はない』

そして通話は一方的に切られる。

「…………」

疲れねえよ。

そんな訳があつて俺は寝つけなかつたのである。ときどき玄関の方から扉を叩く音がしたり、窓がガタガタ揺れたり、どこか遠くで銃声が聞こえたり……と、俺は恐怖で齧える夜を過ごしたのだつた。

「朝飯……作らないとな」

俺は立ち上がり、のろのろとした動作で部屋を出た。そのまま台所まで行き、料理を始める。クソ親父と二人暮らしだつたので、自然、料理はそこそこ作れるようになつてゐる。……あいつホントなにもしないからな。

まったく休めていい脳をどうにか働かせて作業を続け、朝食が出来上がる頃になると、ハツと俺が学校に行つている間クルルちゃんをどうするのかを考えていなきことに気が付いた。

「……あ、そういうやクルルちゃんはどうすればいいんだ?」

まさか一人きりにするわけにもいかない。世界各国の要人から狙われているのにそれは不用心過ぎる。一緒に連れていくにしてもまだ小学生ぐらいの女の子を高校に連れ込むわけにもいかない。学校を休んでもいいが……一日、二日凌ぎにしかならないだろう。

うーむ、と悩むこと十数秒。パツ、と早くも閃きの豆電球が点灯

した。

俺は名案だと一人納得し、携帯を手に持つと、ある番号へとリダイアルする。

そして十コール後、相手は俺の電話に出てくれた。

『……なんの用だ』

なぜか俺の電話番号を知つていて、昨日から俺を嚇す電話をかけてくるヤクザの人と思われる人物へと電話したのだ。俺だけの判断で決めるより、アツチの人に相談して決めてもらつたほうが安心だし。

「あー、その……」

慎重に言葉を選びながら尋ねる。

「えーと……俺は学校に行かないといけないのですが、その間、クルルちゃんはどうすればいいのでしょうか?」

『……』

しかし、返す答えはなかつた。互いに無言のままゆっくりと時間は過ぎ去つていく。

すみませんと謝つて通話を切ろうかな……と考え始めた頃、ようやく相手は答えてくれた。

『……一緒に、連れて行けばどうだ』

その答えに少し驚く。つづきり、『学校を休むか、死か、どちらか選べ』と一つしかない選択肢を提示して一蹴されるかと思つていたからだ。

「え……？ で、でも学校に子供を連れて行くわけには……」

『……校長にでも交渉したらいどうだ』

「……、交渉したからと書いて聞いてくれるわけが

『いいからやれ』

有無も言わせぬその口調に俺はなにも言えなくなつた。こじまではつきりとやれと言われたら、やるしかないだつた。

「……分かりました」

心の中で溜め息を吐きながらソラヒがつて……ふと、違和感を覚えた。

「あの……」

『切るぞ』

だが、俺がそれについて尋ねる前に一方的に通話を切られた。

……まあ、いいか。

些細なことだし、それに違うと思つて覚えた違和感を頭の片隅

へと追い払い、俺はクルルちゃんを起こしに行つた。

「……………クルルちゃん、起きてー」

扉を開け、そう言いながら中に入る。するともぞもぞと布団が動いたと思うと、中からクルルちゃんが目を擦りながら体を起こし、ふあ～、と大きな欠伸をして、蒼い瞳を俺に向けた。

「.....パパあ。おひやよ!」
「.....」

もう一挙一動が可愛すぎる。にへら、とだらしない笑みを浮かべ
そうになるのを堪えて挨拶を返した。

「おはようクルルちゃん。朝御飯できてるから手と顔を洗つて台所に来てね」

「ふう、い

まだぼんやりとした表情で洗面所に向かうクルルちゃん。昨日の夜、どこになにがあるかは一通り教えてあるので、迷つことはないと思つ。

そうして広間の席に座つて待つこと数分。 クルルちゃんがすつきりしたような表情で戻つきた。

「手と顔をちゃんと洗つてきた？」

「うん。それから歯も磨いたよ」

口を開けて歯を見せてくるクルルちゃん。純白で綺麗に並べられ

た歯をしている。

「うん、良い子だ。じゃあ、食べよっか？」

「うん」

白飯に味噌汁、玉子焼きにタクワーンと梅干し。これが久津川家の昔から変わつていらない朝の食卓の献立である。時たま玉子焼きが玉焼きになるが、そう変わりはない。

いただきますと口元で、昨日のよひに食前の祈りをするクルルちゃんを見て、俺も黙祷しながら待つ、それから一緒に食べ始める。

「あー……ねえ、クルルちゃん」

玉子焼きをモグモグと口を動かして食べるクルルちゃんに、俺は話を切り出した。

「？」

口の中にまだ入つてるので、首を傾げて疑問を表すクルルちゃん。

「えーとね……その……俺も、今日、学校があるんだよ、ね

歯切れ悪く説明する。

すると、ひどく裏切られたような表情をしたクルルちゃんが、傷心した面持ちで俺を見つめてきた。

「……私を、一人にするの……？」

そう呟いて、うつ向くクルルちゃん。俺は慌てて先を続けた。

「一人になんかしないよ！ ただ、一緒に学校に行きたいか聞こつ
としただけだから！」

その言葉が意外だったのか、クルルちゃん目をパチクリとさせ
と、すぐに顔を嬉しそうに輝かせた。

「私も学校に行つてもいいの？？」

「いいけど……ちやんとおとなしくできる？？」

「うん！」

「授業中は会えないけど、休み時間になつたら会いに行くから、そ
れまで良い子にしていられる？」

「うん！」

「……よし。分かった」

「うなりやことんやつてやれだ。どんな手段を使ってでも、ク
ルルちゃんを校長に預けさせてやる。

暗い覚悟と、その為の作戦を瞬時に立て、俺は一つ大きく頷いた。

…………

不死鳥県立高等学校。

そこが俺の通う学校の名称である。偏差値はそこそこなのに、なぜか文武両道の美少女が多く入学していくのがこの学校の七不思議の一つだと俺の友人の工藤が言っていたが、別に七不思議でもなんでもない。幼馴染みの澄香から聞くとすると、この学校の校長は、

「見た目で採用するクズなのがクズ。あのエロジジイ死ねばいいのに。てゆーか死ね。あなたも死ね」

と（なぜか俺にも）恨み言を吐き捨てたくなるほどの人なのだと。ちなみに、校長の名は南条条太郎。なんじょうじゅうじょうわタロウ学生の皆からは『ジョジヨ』と呼ばれている……という無駄知識はさて置き、つまりは澄香のじいちゃんである。

現在、時刻は八時二十五分。人気のあまりない遅刻ぎりぎりのこの時間に、俺はようやく校門前に姿を現した。

「あれえ、トキちゃんじゃーん。今日はいつもよりおっそいねえ

のんびりした口調で俺に近付いてくる女性にぺこりと頭を下げる。彼女は荒波静。あらなみしづか荒波なのに静かという矛盾は気にしないでもらいたい。

髪を五つに束ねているといつ奇抜な髪型だが、美人と称しても良い顔立ちだけで気にならないのだから不思議だ。三年生で俺の先輩であり、生徒会の先輩もある。なぜこの時間にまだここにいるのかといつと、彼女は風紀委員で遅刻の監視役だからだ。

「いや、ちょっと野暮用があつまつして……」

あははと渴いた笑いをする俺を見て怪しいと感じたのか、嫌らしい笑みを浮かべつつ両手の指をわきわきと動かす。

「おやおやあ？ もしかして、おねえさんに嘘吐いてる？ 嘘吐きにはハグしちゃうよおハグ」

とじりじり近付いてくる荒波先輩。……昔、荒波先輩が俺にふざけて抱きついてきたことがあるのだが、そのときの俺の慌てようこ味をしめたようで、いつもこいつ言つて脅しに使ってくるのだ。まあ、言つこと聞いても聞かなくて、結局は抱きつかれるのだが。

それに……荒波先輩の胸つて、その……豊満なんだよ。だから抱きつかれたらそのはち切れんばかりの胸が……当たるわけでして。……なぜか、先輩のいうこの『ハグ』という脅しは、俺にしか使わないのだそうだ。反応が面白いってのなら他にもいそうなに……ううーむ、どうしてだらうか。

そんなことを考えながら後退つて逃げる俺。その様子をニヤニヤしながら近付いてきた先輩が、ふと、気付いたように俺の隣に田を向ける。

「……わざから気になつてたんだけど、その子、だあれ？」

先輩の視線の先には、不思議そつに俺達のやりとりを見ていたクルルちゃんが立っていた。薄い水色のワンピースを着ていて、これがもうまた似合っているのだ。

「しかも、わあ。すつごい美少女じゃん。トキちゃん、どこから誘拐してきたの？」

「じひないですよー。」

「嘘だよー。絶対トキちゃんが誘拐したんだよー。そつ信じてるからあー。」

「勝手に信じなこでへださこよー。えーと、この子は……」

俺は言葉を選びつつ、荒波先輩に囁いた。

「…………この子は、”校長先生の愛人の娘さん”ですー。」

…………さて、この嘘でどう切り抜けていいつか。もつ後には引けないぞ俺…………！」

そして校長先生…………！」めぐなさー。

備考：

キャラクター紹介・2

【久津川時風】

言わずとも知れた本作品の主人公。不死鳥県立高等学校の一年生の十七歳で、無理矢理にだが生徒会の役員に携わっている。ちなみに、役職は 奴隸。主な仕事は皆のパシリである。

幼馴染みの南条澄香とは友達以上恋愛感情未満の関係。好意はあるのだが恋愛感情ではなく友達として好きなだけであって、それ以上に、関係には進展しそうになさそうだ。

普段はクールぶつっているが、実は熱血漢だつたりする。

剣道の実力はかなりのもので、将来を期待されていたが、^{しゃく}相に合わないとあっさり部活を中退する。顧問の先生に辞めないでくれと必死になつて止められたが『俺、剣道家じゃなくて剣術家ですので』と言つて聞き入れなかつたそうだ。

好きなものはあまりなく、嫌いなものは多くある。特にマスク^{マスク}ミは心底から毛嫌いしていて、誰でもいいから徹底的に破滅させてやろうかと本気で考えたことさえる。

家族構成は、父・自分、の二人のみ。母親は彼が十歳の頃に逝去している。死因は衰弱死。もともと身体が弱かつたのだが、無理な分娩をしたことで命を落とすことになる。……その日は、妹が産ま

れるはずであった。

「ふえー……。この子、校長の愛人の娘なんだ?」

全然信じてませんよという笑顔をこれでもかと俺に向ける荒波先輩。ヤバイ。まるで不死鳥が七色に輝く羽根を開き大空へと羽ばたこうとするかの如く、荒波先輩が厳かな動作で両手を広げようとしている……！

「ね、ねえクルルちゃん? 僕、嘘なんて吐いてないよね?」

目配せで必死に合図を送る。『なんこともあらうかと、クルルちゃんと事前に打ち合わせをしている俺はなんと用意周到なことか。優秀な自分を褒めつつ、クルルちゃんの言葉を待つ。打ち合わせ通りに頼むよ、クルルちゃん!』

「う、うん! “パパ”は嘘なんて吐いてないよ! “パパ”が言つてることは本当だもん! 本当なんだから!」

慣れない嘘に頬を上気させて何度も頷くクルルちゃん。俺は、あちやー、と額に手を置いて空を仰いだ。そういえば、パパって呼ばないようにしてね、なんてことは言つてなかつたなあ……。この時風、一生の不覚!

でも一生懸命のクルルちゃんつてめちゃくちゃ可愛いなー、とだ

らしくにやけてしまう俺はダメ人間なのだろうか。……いや違うはずだ！ これはただ微笑ましいからにやけているだけであつてそこそこやましい気持ちなんてものは抱いていない……はず……。

な、なんで断言ができないんだ？ そのことに自分自身が驚愕しながらも、ハツとして荒波先輩へと視線を向ける。その瞬間、両手を広げたまますでに獲物を定めて臨戦体勢へと入つていた荒波先輩が大地を蹴り、空へと舞い上がってこちらへ跳んできた！

「うわーー！」

数秒後に訪れるであつた衝撃に思わず目を瞑る俺。しかし、五秒過ぎても衝撃はこない。まさか本当に大空へ……？ とほんの少しだけ片目を開けて様子を見る。

「クルルちゃんかわいいいいー！」

すると、クルルちゃんを抱き締め頬擦りしながら頭を撫でている荒波先輩の姿が視界に飛び込んできた。

俺はそれを唖然として眺める。普段はのほほんとした表情をしている荒波先輩が、顔を恍惚と輝かせ、満面の笑みをそこに浮かばせているのだ。荒波先輩に頬擦りされているクルルちゃんは、拾われた仔猫のようにおとなしくされるがままになっている。

「この子かわいいよー 最高だよー つるペただよー ふにふにだよー！ ねえトキちゃんも触つてみなよー！」

「い、いやですがに……その、そこを触るのには抵抗あります」

「あれえ？ なにいけないと想像してるのかなあ」のムッシュへコへんは。私が言つてるのはほつぺたのことだけ？」

「ぐはあつー、な、なに言つてんだ俺はアー？ と頭を搔きむしる。常識的に考えてセイだら普通ー、なんで違つと」と勘違にしてんだよコハアー！」

「ほひ、見て見てトキちゃん。ふにゃにじてるよお、ふにゃにじ

類を軽く抓んではしゃぐ荒波先輩。そのとせ、それるがままになつていたクルルちゃんがようやく口を開いた。

「お姉ちゃんも、おっぱこふにこじてるよお、

お、おっぱ……。

俺は少し類を赤らめる。た、確かに子供は胸を……その、おっぱい、つて言つけど……。つてか、なんで聞いただけでこいつが恥ずかしくなるんだ？ それはまだ俺が純情である証拠なのか。それとも逆で汚れた証拠なのか。

「え、ほんとう？ 嬉しいなー」

と、そこになぜか荒波先輩がちらつと俺を見てきた。……「うわあ、悪ふざけを思い付いたよつな嫌らしい顔で「ヤーヤーしてこる。

「……トキちゃんも、触つてみる？」

「ツー？ ゲフッゴフッゴハッ！」

荒波先輩の問題発言にむせる俺。な、なに言ってんだこの人はっ！　この人こんなキャラだつたつけ！？

荒波先輩は自分のスイカのような胸を両手で持ち上げると、見せびらかすように強調した。

「いつもみたいにちゅーちゅーしてもいいんだよ？」

「んなツ！」？」「

なに誤解を招くような発言するんですか！！ と俺が猛抗議する前に、クルルちゃんが驚いたような口調で荒波先輩に聞いた。

「パパ、まだおっぱい吸つてるの？ 赤ちゃんじゃないのに？」

その疑問に対し、荒波先輩はフツと微笑した。

「……男の子はねえ、乳離れできても成長するにつれてまたおつぱいが恋しくなる」「しそうもない生き物なんだよ？」

「…なに子供相手に生々しい話
してんですか？…」

俺は荒波先輩からクルルちゃんを引き剥がすと、俺の背中へと回

した。

「それじゃ俺達、校舎に行へるのでいいで。」

それだけ言って去ろうとしたが、荒波先輩はそんなの関係ないと
クルルちゃんに話し掛ける。

「トキちゃんがパパなら、私はママだからね」

「お姉ちゃんがママなの？」

「変なこと吹き込みないでくださいよー」

子供はなんでも信じてしまうんだからやめてもらいたい。

「嘘じゃないよ」

そこで、荒波先輩はいつもほほんとした表情に戻ると、パチリとウインクした。

「もしかしたら将来、そうなるかも知れないでしょ?」

俺はなにも言わず、クルルちゃんの手を握ると無言で前を向くと歩き始めた。先輩もそれ以上口にせず黙つて見送ってくれた。……おそらく、ニヤニヤしながら。

荒波先輩の視線を背中に感じながらも、最後まで振り返ることなく校舎へと入つていく俺達。

……もし荒波先輩に今の顔を見られたら、またからかわれると困ったからだ。

「Jの学校は、一年生校舎、一年生校舎、三年生校舎、と分かれて
いるのだが、校長室は手前にある一年生校舎の一階にあるのに、職
員室はなぜか三年生校舎の一階にある。

今まで疑問にすら思つていなかつたが、どうしてなのだろう。まあ、
今の俺にとっては好都合なのでどうでもいいことだし、興味もない
が。

今はH.R.中なので人目につくことなく校長室前へと着いた俺達。
少し緊張しながらドアをノックしようとして、

(……澄香のじいちゃんなんだよな)

と、少しだけ思い悩んでから手を再度握り直し、手の甲を自分側
に向け、中指の第一関節で四回ほどゆっくりノックした。

「失礼します」

俺がドアを開けると、適温に保たれた生暖かい空気が側を流れて
くる。まず視界に入つたのは歴代の校長の肖像画や多数の表彰状。
来客用の高級そうなテーブルの前後にこれまた高級そうな椅子。

そして奥に目を向けると、立派な口髭を蓄えた白髪のじいさん、
……若い女教師がバツと離れた。

「そ、それでは私はこれで……」

その女教師は慌てた様子で呆然とする俺の脇をそそくさと通り過

ぎ、部屋から出でていく。着衣が少し乱れていたことは見なかつたことにしようつ。……校長室と職員室が離れている理由がよーく分かつたような気がした。

「仕事の相談をしていたのだよ」

前置きに言い訳をして、校長が先に口を開いた。こんな現場を見られてもなお余裕で堂々とした態度に、なんてふてぶてしさだと舌を巻く思いだつた。

「それで、なんの用かな？」

焦つた様子もなく爽やかな微笑を浮かべている。こんなハプニングは慣れているといつことだらうか。しかしその顔も、俺を真正面から見ると変化が生じた。

「おや、君は……孫の友達の久津川くんだつたね」

興味深そうにまじまじと見てくる。俺は面識はないはずなのになんて知つているんだらうと不思議に思つた。

「やうか……といひの日が来たか……」

今度は感慨深げにゆつくりと頷いている。なにが来たのだらうと疑問に思つてゐる俺に、校長はつかつかと近付いてくると、俺の肩にポンと軽く手を置いた。

「久津川くん。……孫をよろしく頼むよ

「はーー!？」

俺は校長のその突然の申し出に声が裏返った。いったいこの人の中でどんなストーリーができているのだろうか。

「な、なにを言つてるんですか！？」

そう動搖する俺に構わず、校長は続ける。

「いやいや否定しなくていいよ。もう全部分かっているからね。孫が高校生になると同時に一人暮らしを始めた理由も、君の後ろにいる女の子のことも、ね」

自信満々な校長。意味ありげに俺とクルルちゃんを交互に見てきたが、本当に分かっているのかを確かめるべく、校長に質問してみた。

「……では、澄香が一人暮らしを始めた理由は？」

その問いに、校長は不敵に笑つとほつきりと断言した。

「君と同棲するためだ！」

「違えよッ！」

なにを言つてんだこの人は！

「ん？ ああ、なるほど。君達はまだ若いからね。それを踏まると答えはこれか。……毎晩口にすることもはばかれるようなことをするためだ！」

「更に違うッ！」

「口にする」ともまさかれるよつな」とってなんだよー……いや分かってるけどさ、なんだよー……いや

「え？ じゃあそこの女の子は一人の愛の結晶ではないのかね？」

「全ツ然違うッ！」

つてか戸籍からして無理あるだろー！

「なんだ……違うのか」

あからさまにつまらない顔をする校長。なにを望んでたんだこの人は。

「では……その女の子はどうしてここにいるのかね？」

そして改めてクルルちゃんを不思議そうに見つめる校長。どうしてこんな小さな女の子がいるのか理解できないらしい。俺は本題だと氣を取り直して、……発言した。

「……この子の名前はクルルちゃん。……あなたの愛人の娘だ！」

まるで犯人を追い詰める探偵のような感じで、俺は指を校長に向けて言い切った。内心はかなりドキドキしている。当の校長は口髭に手を添えて悩み始めた。

「私の……愛人の、娘……だと……？」

身に覚えのないことに悩んでいるのか、難しい顔をして考え込む校長。やはり無理があつたかと計画の破綻を予感する。

……そして静かになつた部屋に、校長の弦きが聞こえてくる。

「ハーナ……いやアンジョーリーナか……まさかエレナの……キャサリンの可能性も……しかしレベッカの面影が……」

身に覚えありすぎて困つてやがる！？

俺は校長の女性遍歴にただただ呆れる。なるほど。澄香が自分の祖父をああもボロクソに言つていた理由がこれが。

「校長……。このことを学校中にバラされたくなかったら、俺がこれから言つ条件を実行するんだ」

「お、脅しか……！」

俺の悪役然とした口調に、校長が歯を食い縛る。良心がチクチク痛みながらも、俺は条件を提示した。

「この子を、校長室で預かれ！」

「ああ、それぐらになら」

「軽ツ！？」

即答にガクリと前のめりになる。そんな俺を見て、さつきまで悔

しゃうにしていた校長が朗らかな微笑を浮かべた。

「困った生徒を助けるのが教師の役目。それぐらい別に構わないよ。だから、その子が私の愛人の娘だという嘘はやめなさい」

どうやら見透かされていたようだ。まあかなり無理があったしな。

「……それにしても、まず最初に交渉ではなく脅しから始めるとは、なかなか思い切った行動をするね」

そう言つて苦笑する校長に、俺は「めんなさい」と頭を下げる。実は、脅してから交渉に入るか、交渉してから最後に脅しをしようか迷っていたのだが、スマーズに話を進ませることができた前者のほうが楽だと思つてそうしたのだ。……まさかいつも早く受け入れられるとは思わなかつたが。

「……ただし、私から条件がある

「だがそこで、こんなことなら普通に頼めば良かつたと溜め息を吐いている俺に、校長が真剣な顔をしてクルルちゃんを見つめてそんなことを言う。……条件？」

「その条件は、クルルちゃんにしかできないことだ」

「……なんだらう。校長のクルルちゃんを見る目が危ない。だからせ、と俺の中のなにかが言つてはいる。……まさか校長はロリコンなのか？ そうか、だから せと言つてはいるのか。分かつた。 るよ。

俺が自然と机の上に置いてある灰皿に目を向けると、校長がそ

の条件を口にしたのは同時だった。

「私の孫を“ママ”と呼んでくれないか?」

「……………」

「いや、こに深い意味はないよ」

ぽかんとする俺に校長がにやりとした笑みを向けてくる。

「構わないかな?」

それは別に構わないのだが、澄香をママと呼ぶことになんの意図があるのだろうか。

「このときの俺はそれが分からなかつたので、軽い気持ちで頷き、俺からもクルルちゃんにお願いした。

「昨日のお姉ちゃんを“ママ”と呼んでくれってさ。……いいかな?」

それだけで預かってくれるならお安いもんだ。クルルちゃんは笑顔でこくつと頷いてくれた。俺はホッと安堵して、校長に頭を下げる。

「それではクルルちゃんをお願いします。休み時間になつたらひょくちょく顔を見せにくるので。……失礼しました」

校長室を出る前に、クルルちゃんにまたねと手を振る。クルルちゃんは寂しい顔を一瞬覗かせたが、すぐに笑顔を見せて手を振つて

くれた。その健気さに胸を突かれつつ、俺は一年の校舎へと向かった。

「…………？」

その途中、なにかが俺の中で引っ掛かり足を止めたが、考えても答えを見出せなかつたので、首を振つて再び歩き始めた。

…………そして俺は思い知らざることになる。校長が本当にふざけたクソジジイだということに。

備考：

正しいノック

日本では一般的に扉を一回ノックすることが多いとは思つが、実はこれ、外国からすればかなりのマナー違反である。

トイレノックという名称があり、その名の通りトイレでのみ使用するノックなのです。日本では通用しますが、外国に出掛ける際はお気を付けください。

三回ノックすることをプライベートノックといい、恋人や親愛のある関係の人に対して使います。

四回ノックすることを正式ノックといつて、仕事先や人の家を訪ねるときに使用します。洋画を見ればこちらのノックが多いとは思いますが、もしもノックするような場面があれば聞いてみてください。

ちなみに、正しいノックのマナーは作中にもあつたように、『拳を作り、手の甲は自分側に向け、中指の第二間接を使ってゆっくり四回ノックする』です。

時風も普段は面倒なので一回しかノックをしていませんが、こういつこには厳しい澄香に対しては三回ノックをして使い分けています。今回の話では、澄香の祖父ということで正式ノックを使った

といつわけで
す。

授業が十分ほど経過した教室に遅れて入っていくのはなにかと気まずい。あの『遅刻かてめえ』の教師の視線もそうだが、学校では優等生で通っている澄香の『後で体育館裏来いや』という侮蔑を込めた視線は精神的にきついのだ。

どうせ遅刻なんだし俺の苦手な古文の授業なので、一時限目が終わるまでのこの時間を保健室で過ごすことにする。休み時間にさえなれば少なくとも教師に怒鳴られる心配はなくなるだろう。心配なのは、澄香や好奇心で遅刻した理由を聞いてくるだろう男友達二人にどう言い訳するかだ。

無難に寝坊ということにしたいが、それだと澄香に『それは生徒会の仕事に備えての休養ね。その熱意に応えてあなたを過労死させるわ』と意味不明なことを極上の笑顔で言われるのでダメだ。正的な理由ではないと真面目な澄香は許してくれない。まあ、澄香はクルルちゃんのことを知っているので後にでも本当のことを言えればいいだろう。

ただ問題なのは男友達の方だ。このクソッタレ共は俺になんの恨みがあるのか、些細なことを大袈裟に騒ぎ立てては話を大きくし、収集がつかなくなつたところで面倒を全て俺に押し付けちゃつかり逃げるのだ。俺は何度殺意が芽生えたことだろうか。一度や一度どころではないはずだ。

最悪だったのは、俺が風邪で休んだ次の日にマスクを付けて学校に登校したときのことだ。

「お前かつ！ 昨日の銀行強盗の犯人は！…！」

「警察に通報してやるー！」

戸を開けた瞬間に言われ、はあ？ と俺が眉をしかめている間にあいつら本当に警察に通報しやがった。

そのあとやつて来た警官に問答無用で捕まり、警察署にて『君が犯人だね？』『違う！』『では、なぜマスクをしているんだい？』『風邪だからだよ！』という感じで事情聴取や取り調べをされ、被害を受けた銀行の店員には『間違いない！ この人です！』『オイなんだよ！？』と濡衣を着せられそうになった。そして真犯人が捕まるまでの一日間、俺は留置所で過ごすはめになったのだ。

「ほんの冗談のつもりだったんだよ」

「そうそう。おちゃめなイタズラ」

それが拘束を解かれた俺が怒りに身を任せ学校に乗り込み、授業中の教室に乱入して男友達に詰め寄ったときに聞いた弁解の言葉だった。

「……ふざけんじやねえぞテメエら……」

まったく悪びれた様子もない男友達にぶちギレ暴れた記憶はまだ新しい。なにせつい一ヶ月前のことだからな。

あいつらの一件で俺に恐怖を抱いたらしく、それ以来あまり騒ぎ立てることはなくなつたが、一応の警戒はしておいたほうがいいだろ？俺はなんでそんなことに気を使わないといけないんだろ？とやれやれと頭を振り、保健室を田指した。

当然のことだが授業中なだけあって校内は静まりかえつている。聞こえてくるのは、教科書をただ読むだけの教師の声、チョークを黒板に突き付ける音、運動場から聞こえてくる喧騒、そして妙に廊下に響く俺の足音ぐらいなものだ。休み時間になるとおよそ五百人はいる全校生徒達の騒音が至るところから聞こえてくるとは思えない静けさだ。

それでもどこかの教室では、俺のように真面目ではない生徒が私語を慎まず騒いでいるところもあるだろうし、いわゆる不良という奴がいろいろと面倒事を起こしているはずだ。

幸いなことに、この学校では注意するだけで事足りるのだが、他の学校ではそもそもいかなくなつてている。生徒を怒らうにも注意しようにも、生徒に怒鳴るような恥辱、手を上げるような体罰、注意するようなモンスターペアレント共の餌食。教師にはどうしようもできない不憫な世の中になつてきているのだ。

今では教師も生徒の「機嫌とりしかできない。そんな教師を生徒が心から信頼できると、世のバカな大人共は本気で思つているのだろうか。

……ま、本気でそう思つてはいるからこんな世の中になつてているんだろうけど。

とまあ、そんなんくだらない思考をしている間に、俺は保健室前へと到着した。軽くノックしてから戸を開ける。

「失礼します」

微かに消毒液の匂いが残る部屋へ入り込む。しかし返事はなく、見回しても人の姿も見えないので誰もいないようだ。

じゃあ勝手に使わせてもらおう。俺は戸を開めると、三つあるベッドのうちの手前のベッドに向かい、そこに腰掛けた。手で触れてみると、柔らかく滑らかな質感をしている。これだと仮眠どころか本気で眠つてしまいそうだ。

ふと視線を下に向けると、ホウキやモップが散らばっているのが見えた。眉をしかめて訝しく思いながらも、すぐ近くにある掃除用具入れのロッカーに目を向け、片付けておこうかと思つたが、

「……やめておこう」

と思つて止まる。頭を搔き、とつあえず散らばつたホウキやらを集め、『ベッドの下に隠しておこう』と一人呟く。誰かが来て踏んだら危ないし。

そして仕切りのカーテンをして横にならうとしたといひで、戸をノックする音が聞こえ顔を上げた。

「失礼します！」

そのうるさい声に聞き覚えがあつた。思わずカーテンを開けて声の主を見る。

「あれ？ 時風じゃん」

すると、俺の親友の工藤荘介と目が合った。互いに目を丸くして相手を見る。

「お前、今日休みかと思つたら……こんなところでなにしてんだ？」

「……寝てたんだよ。それより、お前いそどつしたんだ？」

俺のことは適当にはぐらかし、工藤に保健室に来た理由を尋ねる。

「なんか頭が痛いからさ、先生に頭痛いって言つて抜け出させてもらつたんだ」

頭痛いと言いながら腹を押さえる仕草をする工藤。いつも分かりやすい奴は他にいないだろ？。

「……仮病か

「仮病だ」

ニヤリと笑う工藤に呆れて溜め息を吐く。

「いっは小学生の頃からの友人で、これまでずっと同じ学校、同じクラスになつている。言わば腐れ縁だな。なので、いっつがなぜ仮病を使って保健室に来た理由もだいたいは分かる。

「公卿先生ならいないで」

「なにー?」

俺の言葉にハツとしてキヨロキヨロと首を動かし、よつやく誰もいないことに気付くとガクリとつんだれた。

「そんなんー…………」

思つていた通り、目的は保健室の先生である公卿直実先生（こうきょう なおし）だつたようだ。美人でスタイル抜群な保険医だということで、男子生徒及び教師から絶大なる人氣がある。しかし本人は男性恐怖症。ある男性教諭曰く、『だからこそ燃える』らしいが。

「……お前つて昔からまったく変わらないよなあ

女性にちょっとかいをだす」この行動はもはや日常茶飯事。それは昔も今も変わっていない。

「そういつの前は、かなり変わったけどな」

「…………」

クククと笑う工藤に撫然とした表情を返す。……今では比較的おとなしくなった俺だが、昔は結構やさぐれていたもんだ。そりゃあ、あんなクソ親父と一緒に暮らしていたらグレるだろ普通。

「……それにしても公卿先生つていつもいらないんだよなあ。ビニールなんだろ」

意地悪い笑みを消し、残念そうな表情を浮かべてまたキヨロキヨロと首を動かしている。未練たらしい奴だ。

「いつもいないのか？」

男性恐怖症だから仕方ないとは思うが、それは保険医としてどうなのだろうか。なぜそんな人が高校の保険医として人選されたのかが不可解……あ、いや、待てよ。まさか『美人』といつことで採用されたんじゃないだろうな。

「ああ。なぜかいつもすれ違うんだよなあ。……これって運命？」

ああ、運命だな。出会えないほつの運命だが。

「ま、俺は公卿先生が戻ってくるまで」ソリで寝てるけど、……お前は今すぐ教室に行つた方がいいぞ」

「なんで？」

その友人の忠告に疑問に思い聞き返すと、工藤は重々しく口を開いた。

「…………南条が、怒つている」

…………。

「…………え…………？…………な、なんで…………？」

思い当たる節は数えきれないほどあるが、そのどれかによつては俺の命運は大きく変わつてくる。いつになにに怒つてゐるのだろう。俺は恐る恐る工藤の顔を見た。

……そして工藤は神妙に答えた。

「『時風が休んだら私が楽できない』……だつて

……。

は？

「な、なんだよソレ！ そんな理由かよつ！ 俺は澄香の奴隸じやないぞー。」

「それを本人の前で言つてみるよ」

「言えるかつ……」

澄香には借り（＆弱味）が数多くあるので、そんなことをしたらぬおおおおお……！ 考えただけで体の節々が痛む……！

「……じゃ、俺、寝つから、さつわと教室行けよ」

ふああー、と欠伸をして、工藤は奥のベッドに向かい、仕切りのカーテンを閉めた。

「…………

そして俺はふらふらとした足取りで保健室を出ると、どう言い訳すつかなあ、と憂鬱になつっていた。廊下を歩く足取りも自然と重くなるつてもんだ。

た十一段の階段が、まるで釈迦院の大石段を昇るよつた氣の重さを感じさせる。

「おー、そこのキ!!。こんなところでなにをしてーるのかね

俺が深い溜め息を吐くのと、その声が上から降り掛ってきたのは同時だつた。顔を上げ、階段を降りてくる人物へと目をやる。

(うー……キモラじやねえか)

吉良吉良。^{よしら よしら} 通称・キモラ。女物のバッグを何種類か所持しており、学校にも持参していくがオカマというわけではない。中背中肉の見るからにカツラと分かる頭をした四十過ぎの、もちろん独身である。

「あ、いや……調子が悪かつたので保健室で診てもううつてたんです。今はその帰りです」

性格は悪くねちつこい嫌味な奴で、学校中の誰からも嫌われている。そんな面倒な奴に見付かってしまった自らの不運を嘆いていると、

「あ、吉良先生。こんなとこにいたんですか」

その後ろからの声に振り向く。そこにいたのは、キモラとは正反対の爽やかそうな男性がいた。

詫摩鑑孝。^{たくまのりたか} 体育教師で少々イケメンなため生徒からもちろん人気がある教師だ。保険医の公卿先生を狙っているという噂があるが、男性恐怖症相手には苦戦しているようで進展したという話は聞かない。

「どうしたのかね」

「ちょっとお話をあります……」

顔を寄せ合ひ、一人して「じゃ」と話しながら連れだつてこの場から去つていいく。なぜ外面も内面も正反対な一人が仲良さうなのが興味はあつたが、キモラのねちつこに嫌味を聞かなくて済んだだけ良しとしよう。

そうしてできるだけ階段をぬつくつと昇り、すぐ手前にある教室の前まで辿り着くと、意を決して戸に手を掛けた。

「……おはよー……」¹それこます……」

戸を体一つなんとか入るぐらこの戸をに開け、体を縮みこませながら教室の中へと入つていいく。

「…………」

クラスメイト達の視線が俺に集中した。じつこいつとあつてなんかものすゞーく氣まずくなるよなあ。

そして古文の先生である田中邦昭先生たなかクニアキが生徒達に三秒遅れて俺を見ていた。

「……遅刻とは、どうこうことだ久津川？」

まだ若い先生なのに顔面を引きつかせている。余程苦労しているんだろう……ところわけではなく、怒りでそつなつてこるのだ。

「決められた時刻に遅れることを言います。先生」

「そんなことを聞いてんじゃねえ！ なんで遅刻したかと聞いてんだ！」

激昂する田中先生。俺は耳を押さえて顔を背けた。だから嫌だつたんだと顔をしかめる。こうなると説教は長いのだ。ちなみに、彼はこのクラスの担任でもある。

顔を背けた先に、男友達の『バーカ』といつ嘲りの視線とぶつかり、カチンときたが無視。更に背けた先に…… 澄香の、目が合つた。

「…………」

澄香の田は語る。

今日はこの世の地獄を見せてあげるわ。

「…………」

俺の涙田は語る。

マジで『めんなさいすみません許してください澄香様。

懇願するように見つめるも、ツン、と澄香に顔を背けられた。

俺がなにをしたっていうんだろう。そつ嘆きたくなる。……まあ確かに校長を脅すようなことはしたけど。これがその罰だとしても

重すぎやしないか？

授業が終わるまで俺の説教だということになりかねないので、俺は『車に牽かれそうになつたおじいさんを助けようとしたらビックリともなくやつて来たウジムシマンと自称する格好は普通の人間の中年の酔っ払いのおっさんが代わりに牽かれたので病院に連れていきましたがなんとそこはウジムシマンの生き別れの妹が殺人鬼になつたという過去を持つ忌まわしき場所で……』と長々としたふざけた言い訳をしようとしたが、その前に校内放送のメロディが流れてきた。

『 2年B組の久津川時風くん……』

え？ と俺はなんでこんな時間に自分の名前が出るのか不思議だつたので、言い訳しようとしたが開いた口を再び閉じた。それにこの声は……校長？

訳が分からず校長の声に耳を澄ませると、……とんでもない台詞が飛び込んできた。

『至急校長室へ来なさい。“あなたの娘”が校長室でお待ちしています』

……。
……。

は
?

備考：

キャラクター紹介・3

【南条澄香】

腰まで掛けた漆黒の艶やかな長髪に、キリッとした眉、瞳は麗しく澄み、凜々しさに満ちた物腰からは、女帝の貴祿を窺わせる。普段は滅多に笑顔を見せず、なにかと近寄り難い雰囲気をしているが、ある特定の人物といふときにだけ見せる表情の豊かさや微笑はギャップとも合間つて可愛らしく、彼女のファンとなる人物は後を絶たない。……それと同時に、ある特定の人物に対する羨望と嫉妬からの嫌がらせも後を絶たない。

久津川時風とは保育園の頃からの幼馴染みで、親鳥の背中に続いて歩く小鳥のように彼の背中をずっと見続けてきた。今では考えられないが、昔は時風に従順な女の子だったのである。

中学生に上がる頃、なんでもかんでも時風に意見を求めている自分が彼に諭され、そんな自分を変えようと一念発起するようになつてから今の彼女が形成される要因となつていて。……時風はたまに昔の澄香を思い出しては、溜め息が出るのを止められないそうだ。

家族構成は、祖父・父・母・自分・妹、の五人。祖母の哉子は条太郎の浮気癖に気苦労しながらも、最後まで条太郎を愛し続けて三年前に病気で逝去した。澄香は最期まで一人を愛し続けた祖母を尊敬しているが、浮気だけは絶対に許せない性格なので祖父は嫌いのようだ。

カナコ

「…………娘?」

その誰かの眩きを皮切りに、教室中にざわめきが波のように広がつていく。クラスの皆が教室の出入口の前に呆然と突つ立つていて、俺をチラチラと見ては、隣同士でヒンヒンと囁いている。

「…………なあ斎藤、どうこうことだと黙つ?」

「…………いやわからんねえッス。先生はどうこうことだと思つます?」

「俺はな…………」

先生までも生徒と一緒にになってお喋りしていた。おにコラ、先生が職務怠慢してんじやねえよ、と言つたことううだが、俺の心中はそれどころではなかつた。

なに言ひちやつてんのあのジジイ?

俺の体は怒りでワナワナと震え、渦巻くような激しい感情が心中を満たしていた。

…………確かに。確かに口上というのを俺はしていなかつた。ただ自分勝手に校長にクルルちゃんを押し付け、任せてきたぞ。だけどさ

…… なんでわざわざ誤解を生むよつた言い方で全校に放送して
んだあのクソジジイイイッ！

しかし、これは冷静にならなければならない。少しでも慌てた様子を見せたら、虎視眈々と騒ぎ立てるチャンスを狙つて注意深く俺の様子を見てくる男友達にバレ、更に厄介なことになつてしまつだろう。俺は一度深呼吸すると沸騰しかけていた脳を冷やし、この放送に対しどう言い訳するかをシミュレートした。

『ハハハ。南条のじさんって面白いこと言つたな。頭が爽やかになつた人でもこんなこと言わないよ。かなりコニークな人なんですね校長先生つて。……でも、授業中の校内にこんな冗談を放送されるのは迷惑なので、そのことを注意しに校長室へ行つてきます！』

…… よし、これだ。いつ言つて教室を抜け出し、校長を抹しよう。俺、人は初めてだけど、今ならなんの躊躇いなく れると思うんだ！

ウフフという不気味な笑いが自然と口から漏れ、それを近くにいたクラスメートが聞いてビクリと脅えたのに気付かず、俺はシミュレートした言葉を言おうと口を開いた。

「ハ、」

《それからその“妻”である南条澄香も至急校長室に来なさい》

俺の言葉を遮るように校長のとんでもない発言が全校に木靈した。

111

- 1 -

その放送に、俺と、訳が分からずとばつちりを受けた澄香が、愕然とした表情を浮かべた。俺は意識を失いそうになるほど憎悪に目眩がし、澄香は突然のことにつま先思考停止状態に陥っている。

周りでは『え、南条さんが妻……？』『まさかまさかとは思つたけどやはつこの一人……』『しかも娘がいるって……』『一人の愛の結晶か……』『なんだ、普段仲が悪いのかと思つてたけど、夜はよろしくやつてるんだな』『子供がいるつてことは……つまりそういうことだよね？』『ほほーう』『なるほどねえ』『なるほどなあ』『なるほどのう』『まあこの一人、なんだかんだでお似合いだし』『うん。私達で祝福しましょうよ』『ああ、一人ともお幸せに！』『結婚式には呼んでくれよな！』と段々と声高になり、最後には拍手までし始めた。

そこでよつやく、俺と澄香の意識は覚醒する。

俺と澄香は学校中に轟くような怒声を同時に発し、次の瞬間には教室から飛び出していた。後ろから『愛の逃避行だ!』といつ戯言が聞こえたが無視だ無視。

「歓風！ これがさざれうごうとなのー…？」

無人の廊下に慌ただしい足音を響かせながら、澄香が俺に人殺しの目を向けてくる。正直、その視線だけでも俺は死ねそうだ。

「……いやそんなことより、生徒会長ともあらうお方があんな口汚い言葉を吐いてもいいのか?」

「真面目な顔して話を反り返したりするなー。」

チツ、バレたか。

仕方ない。ここは一先ず澄香に真実を語ることにしよう。そうしなければ校長の前に俺からデリートされてしまつ。

「あー、その、実はさ、俺が遅刻した理由もあるんだが、昨日の女の子……クルルちゃんを校長に預けたんだよ」

「それでどうしてこんな状況になるのよー。」

「へ……?」

……あ、あれ? そういうばなせなんだろ? 俺、校長にクルルちゃんを預けただけだよな? ただそれだけなのに、なんでこんな目にあつてるんだ?

「……えーと……すまん。マジでわかんねえ」

「…………そう。まあ、いいわ。あいつを殺して吐かせば済むことよ」

殺したら死人に口なしぢやないか、と思つたが口にはしない。ち

よこと気分がハイになつてゐる生徒会長様に口出しする勇氣など俺の
よつた奴隸には持ち合わせていいない。

やがて一分も経たない内に校長室前まで迫り着く。なぜ校長室前
なのかといふと、鍵が掛つていて中に入れないからだ。

「おこづかー 来いつて言つたから来てやつたのに鍵を閉めてると
はどうこうア見だ！」

先に断つておくが、前記の口汚い言葉は俺が言つてるんじゃない
からな。澄香が扉をドンドンと激しく音を鳴らしながら蹴破りかね
ない勢いで言つてるんだからな。……實際、このドンドンといふ音
は扉を蹴つてゐる音だ。とても生徒会長のお姿とは思えない。

「な、なあ澄香。オンナノコがそんなことしない方がいいと思つぞ
？ どちらかといふと、それは俺の役だだし」

「じゃあこの怒りをどこでぶつけたらいいのよ！？ え、あなたに
ぶつけたらいいの？ よし分かったわ！」

「さてまずは落ち着こうか澄香ー さあ深呼吸してー 大丈夫。俺
達は分かりあえるはずだから……！」

なぜかムエタイ式キックボクシングのような構えを俺に向けてく
る澄香に、まるで暴れ馬を手なずけるような気持ちで落ち着かせる
ことに専念する。馬の脚で蹴られたら、入つて死ねるからね。

決死の覚悟で落ち着かせること数分。ようやく暴れ馬はおとなし
くなつてくれた。

「……私としたことが、ちょっと取り乱してしまったようね」

「ホン、と咳をし、何事もなかつたかのよつに清ました表情をしてこの場を取り繕つ澄香。あれがちょっとなら普通に取り乱したらどうなるんだろう。それに恐怖を感じずにはいられない、その“ちよつと”を体験した俺だった。

「では改めまして……」

生徒会長モードに切り替わつた澄香が再び校長室前の扉に向かい合つ。背筋を真つ直ぐに伸ばし、中にいるであらう校長に向かって凛とした響きのある声を送つた。

「条太郎お祖父様。中にいることは分かつてゐるのです。今すぐここを開けなさい。ともなればあなたの寿命はここで死きることになるでしょ。十秒だけ神に祈る時間をあげますので、その間にこれまでの人生を悔い改めなさい。ではカウントを始めます。1……10。ようなら」

……えーと、完全に扉を開けさせないよつとする交渉をしてるよねコレ。しかも本人は至つて大真面目。どうやら落ち着いてるよう見えるのは表面だけらしい。

もちろんこんな交渉で校長が開けるはずもない。開くことのない扉をただ見つめながら時間は無駄に過ぎていく。

……なにがしたいんだろう俺達。

微笑みを浮かべて扉を見つめたまま微動だにしない澄香に恐怖を感じ始めた頃、どうするつかな、と俺はどうやって中に入るか顎

に手を添えて思案する。

しかしあるとき、そんな俺の耳に微かな音が聞こえてきた。

「…………て……」

本当に微かな音だつた。いや……違う？ 音ではない。これは、
クルルちゃんの声……？

耳を済まして声に集中してみると、校長室からクルルちゃんの声
が段々とハッキリ聞こえてきた。

「…………いや、ダメ、……そんなの……！」

切羽詰まつたクルルちゃんの声に何事かと慌てて扉に耳を押し付
ける。

「…………クルルちゃん…………ここに君のだいい好きなパパはないんだ
よ？ もう、諦めて観念するんだ」

すると聞こえてきた校長の声に、背中に悪感が駆け巡つた。

い、いつみたいなにをしてるんだ……！ 俺が焦るよつて更に耳を
扉に押し付けると……その直後。俺は、クルルちゃんの助けを求める悲鳴を、確かに聞いた。

「…………ぱ、パパア！ 助けて……！」

「！」

俺は弾かれるように扉から飛び退くと、猛然と廊下を駆け始めた。ある場所へと向かつて一心不乱になつて俺は走る。

やがて中庭へ出る通路に差し掛かり、俺はそこからすぐさま中庭に降りると、少し大きめな手頃の石をすぐに見つけ、それを右手で掴んでそのまま中庭を突つ切る。そして校長室の……裏側の窓へと向かつて更に加速した。

そう。扉が無理なら、窓を割つて侵入しようと考えたわけだ。そこのなら鍵が掛つていようといまいと容易く侵入できるはずだ。

立派な錦鯉が優雅に泳ぐ池を迂回したちょうどの所、目的の窓が視界に入ると同時に俺は投球のモーションに入った。

「校長オオオオオオオオ！」

煮えくりまくつたハラワタから怨唆の叫びを轟せ、右足で大地を蹴ると、残つた左足は力を込めて大地を踏みしめ、続いて右足が再び大地を踏む前に、弧を描くようにして右手を前へ振り落とす。

「覚悟オオオオオオオオ！」

右足が勢い良く大地を踏むと同時に放たれた石は寸分も狂うことなく目標へと向かつて一直線に飛んでいく。目指すは窓。狙うはその先の校長の後頭部！

「なつ……ー？」

石が窓に当たり甲高い悲鳴を上げた瞬間、校長が驚愕した表情を

浮かべ後ろを振り返る。砕け散る硝子の破片と共に飛び込んだ石はそのまま校長の顔へと突っ込み

「甘いー！」

難無く払い落とされた。

「嘘オー！？」

俺は校長の動体視力と反射神経の良さに驚愕する。まさかこんなところまで未だ現役だとは。

「久津川くん！」

奇襲が失敗した俺は校長の叱咤する声にビクリと体を震わせた。校長の睨みつけるような視線に思わずつっ向き、恐縮する。

「君はなぜこんなことをしたのかね？」

年長者特有のあらがいがたい威圧感と清閑としたその口調に、しどりもどりになつながらも俺は答えた。

「あ、いや、……あの、その……。ぐ、クルルちゃんの悲鳴が聞こえたから……その……、助けなきやつて思つて、……つい

「悲鳴？」

「パパ？」

校長の疑問の声に重なるよつとしてクルルちゃんの声が耳に入り、

俺はすぐに顔を上げた。

「ぐ、クルルちゃん！ 大丈夫なのかい！？」

ヒューイと校長の背中から顔を覗かせるクルルちゃんに安否を尋ねる。……あ、あれ？ 見たところ怪我はなさそうだし、クルルちゃんからは齧えたような雰囲気が見られないのは氣のせいだろうか？

「……あー、久津川くんはなにか勘違いをしてるよ、だね」

せっかくまでの威圧感はどうやら、バツが悪そうな困ったような表情をして、校長は苦笑いのよつたなものを口元に浮かべている。

「か、……勘違い？」

俺もそうとしか思えなくなつたので、今更になつて自分がやつてしまつたことに冷や汗を浮かべて後悔し始める。

「うん。私とクルルちゃんは『誘拐犯と人質』をして遊んでいただけなんだからね」

は、はい？ なんだよその特殊な遊びは。そんなことしてるなんて知らないから勘違いするに決まつるじゃないか！

「……しかし、だ」

俺が真相に憤慨していると、校長は少し怒ったような表情で俺を諭すように叱責する。

「私が盾にならなければ、君の投げた石や硝子の破片がクルルちゃん

んに当たっていたかも知れないんだ。守りうとしての行動だというのは分かるが、後先を考えて行動しないと守るべき相手を傷付けることになってしまつよ」

その説教じみた言葉に、俺は返す言葉もなかつた。勢いに任せて行動してしまつた事実につなだれ、なにやつてんだと自分自身に腹を立てる。

「……でもまあ、父親役としては十分及第点を取られるから良しとしようかな。ね？ クルルちゃん」

「うんー。」

一転して笑顔へと変わつた校長がクルルちゃんを見ると、クルルちゃんもまた笑顔で校長を見、それから俺にどぎつくりの笑顔を向けてくれた。

「パパ、私を心配してくれてありがとー。」

とお礼を言つて。

「.....」

俺はそんなクルルちゃんに少し救われる。俺の軽率な行動でクルルちゃんは怪我をしそうになつたといつのこと、それでも俺に笑顔を向けてくれるなんて。

「..... ううううう、ありがとねクルルちゃん」

これからは軽はずみな行動は慎もうと心に誓いつつ、俺もまたク

ルルちゃんにお礼を言った。

「それから校長先生。本当にすみません」

そして校長に向かって頭を下げようとしたら……ふと思いつまる。

「……あれ？」

思わず声に出る。なぜ俺は思い止まつたのだろう。校長に石を投げ、しかも窓ガラスを割つてしまつたことを謝らないといけないのに。なぜだ？

「……いや、待てよ。

「……」

反省して殊勝だった俺の顔が少しづつ険しくなつてこゝのが分かる。

思い出せ久津川時風。

お前はなぜ、校長室へと来たんだつた？

「……あの、校長。一つ聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

「なにかね？」

首を傾げる校長に、俺は不自然な笑みを浮かべるけどじつしても聞きたかつたことを口にした。

「「わつきの放送は、なんなんだ」「うー」

俺と、もう一人。ゆっくりと中庭の池を迂回していく人物と俺の声が綺麗にダブる。

「おお、孫か。お前も来ていたのだな」

しつとした表情で校長が自分の孫……澄香と向き合つた。

どうやら澄香も少し遅れて俺と同じよつて窓ガラスを割つて侵入しようと思い付いたようだ。……ただ俺とは違うのは、俺の得物は石で、澄香は金属バットだつてことだろ。

「我が孫ながら……なぜいつも凶器（狂氣）が似合つのかねえ。まったく、嘆かわしい……」

それは俺も同感だつた。

「あなたのせいで私がどれほど恥ずかしい思いをしたのか、わかってるの？」

「もちろんわかっている。だからこそ、したのだ！」

「コイツまつたく悪びれてねえ！」

「死になさい」

もはやホラー映画の悪役然とした澄香に俺も少なからず恐怖するが、彼女が味方だという事実に内心ホッと安心する。

「まあ、待て孫よ。お前は相手を間違えている」

「なにを言つてゐんだ校長は？ 落ち着きはらつてゐるが、この状態の澄香を説得する秘策でもあるのだろうか？」

「間違えている？」

窓から校長室へ侵入しようとしていた澄香の動きが止まる。

「うむ。これからクルルちゃんが言つことによく聞いてほしい」

は？ クルルちゃん？ ビラじてここにクルルちゃんがでてくるんだ？ クルルちゃんを人質にするつもりではなさそうだし……。

そう疑問に思う俺の手の前で、校長はクルルちゃんと同じ目線になるように屈むと、あることを聞いた。

「ねえクルルちゃん。君は昨日、だいい好きなパパとなにか約束したよね？ それはなに？」

へ？ なんだそれ？ そんなことをクルルちゃんに聞いていつたいなにが……、

ああ！？

待つてクルルちゃん！！ と俺が制止の声を上げる前に、クルルちゃんは、……言つて、しまつた。

「……えつとね、パパは私に『せつきょういく』を教えてくれるつ

て約束してくれたの！」

その瞬間、澄香の標的は俺にロツク・オン。

「GO TO HELL! (地獄に逝きな!)」

金属バットを振り回しながら澄香が追い掛けてくる。俺はそんな澄香に背を向け、命からがらに必死に逃げ出した。

……リアル鬼ごっここの始まりだった。

2 4 『失態』（後書き）

備考：

新米パパ奮闘記——親子の絆編

なんともありきたりなこの作品の題名。作者である私もなんとか良い題名を付けたかったのですが、ボキヤブライーがなかつたので結局これにしました。

新米パパつてお前パパじやないじやん、とか、奮闘記つてなんに奮闘してんのだよ、とか、親子の絆編？　じゃあ他にもなんとか編とかあるのかよ、とかダメ出しそれでもこの題名でどこまでも行つてやると決めたので変えるつもりはありません。……本音は、思い付かないだけなのですが。

ジャンルはコメディですが、作者のもう一つの作品『山羅くんの不幸』と比べると全然コメディ分はありません。でも一応の一応はコメディに分類されるとは思います。山羅くんを読んでいる人には物足りないとは思いますが、この作品でも楽しんでください。

澄香とのリアル鬼」））から辛くも逃げ切れた俺は、未だに俺を探して校舎を徘徊しているであろう澄香の裏を搔くため、再び校長室に訪れていた。

少なくとも時間稼ぎにはなるだろ？と思つての選択だったが、ここに来た理由は他にある。

「失礼します」

礼儀としてノックをしてから中へと入る。俺が割った硝子の破片はそのままに、高そうな椅子に座つている校長は優雅に紅茶を口に含んでいた。

「おや、早かつたね」

紅茶をゅつくつと咽下した校長が、俺を見て口元を薄く歪ませた。

「私になにか聞きたいことがあるのかな？」

そして「コップを机の上に置いて俺を真っ直ぐに見てくる。どうやら、俺がここに訪れた理由を分かつているようだ。用件ではなく質問の有無を確認している」とからそれが伺える。

「聞きたいことがあるとこうよつ、確認したいことがありますかね。」

……その前に、クルルちゃんは？

クルルちゃんの姿がないことに気付いた俺は、辺りに視線をさ迷わして姿を探しながら校長に聞いた。

「あの子ならすぐ近くのトイレに行つてこるよ。安心なさい。『ちやんと見張りは付いてこる』から」

その校長の言葉を聞き、俺はやはりなど確信する。

「……校長。あんた、初めっから俺達の事情を知つてたでしょう？」

問い合わせのではなく決めつけようにして校長に尋ねた。

「まう、どうしてそう想つのかね？」

分かりきつているだけに、不思議そうな表情をする仕草がなんと
も白々しい。俺はやれやれと首を振り、腰に手を当てて疲れたよう
に言葉を発する。

「どうしてもなにも、単純に考えたら分かりますよ。校長がクルル
ちゃんをなんの躊躇いなく預かるなんておかしいじゃないですか」

校長は校長で忙しい職務なのだ。出張することが主な仕事みたいなもので、全国校長会やPTA関連会議、事件が起こったときのための警察との連絡会、学校の運営について勉強する研修会とやらも出ないといけない。しかもこれらはほんの一歩のことで、他にもいろいろひととやるべきことがあるのだ。

なにもしていいと思われがちな校長職だが、より良い教育のためになにをすればいいのか、どんな提案をすればいいのかを日々考えないといけないので、実は誰よりも教育について考えているのである。

……まあ最も、本気で考へている者がいるのなら、不祥事といつのは起きないものなんだが。

「それに、だ。思い返してみれば、放送で聞いたあなたの声ってどこかで聞いた覚えがあるんですよ。実際のあなたの声を聞いた後だつたんで、すぐに校長の声だと気が付いてしまいましたけど」

俺はおもむろに壊から携帯を取り出すと、ある番号へとログダイアルする。

すると、ちよつびタイミング良く「どうせ」ともなく携帯の着信音が鳴り響いてきた。

そしてそれは、間違いなく校長のいるところから聞こえてきている。

「やつぱりな……」

俺はパタンと携帯を閉じ、溜め息を吐いた。今朝の違和感と、クルルちゃんを校長に預けて部屋を出たときの引っ掛かりの正体にどうしてもっと早く気付かなかつたのかと自分を叱咤してやりたかったが、そんな気力も一気に脱力してしまつた。

「おやおや、バレてしまったようだね」

悪戯がバレた子供のよつたな憎たらじこ顔をして、校長は一ヤリと笑みを浮かべる。

つまりは、そういうことである。

昨日から俺を嚇す電話をしてくる犯人は校長だったといつわけだ。実際の声と電話の声とでは少しトーンの高さが低くなるので、マナーとして電話では少しトーンを高めにして応対するのが常識だが、この校長はどいつもわざと更にトーンを低くして電話をしていたようすで気付くのに遅れたのだ。

確かにヒントも結構あった。

今朝の電話では、なぜか真っ先に校長へ説得するよう促されたし、最初に校長室に来たときのやつとりでの『まず最初に交渉ではなく脅しから始める』とこう発言も、今思えば校長室に来た理由を事前に知っていたからじゃないかと思う。校長がすんなりクルルちゃんを預かってくれたのもまた大きなヒントだ。

「…………とこうことは、校長つてヤクザなのか？」

澄香からはそんな話を聞いたことがないが、そういうことになるよな。それにこの世の中、家族に秘密にしている奴なんてそう珍しくはない。

「いやいや、そういうわけではないよ

苦笑いを浮かべて首を振つて否定していくといふを見ると、なにやら事情がありそうな感じだ。

「私はただの“協力者”だからね。ちなみに、君の後ろにいる人達も同じだよ」

「へ？」

その言葉にサッと後ろを振り向くと、……いつのまに入ってきたのか、五人の男達が気配を悟られずにそこに立っていた。

しかも、

「な、なんつー格好だ……！」

その男達は、一様に同じ格好をしていた。

『クルルちゃん命』と赤文字で書かれたハチマキ。

『ロリコンでなにが悪い』と雄々しく筆字で刺繡された明らかに祭用のハッピ。そして筆字を囲むようにして到るところに『クルルちゃん激レ〇V E』『幼女と呼ぶな。よつじょと呼べ』『進んでみせようロリコン道』などと書かれている。そして下はフンドシ一丁のみ。……ていうか、なにがあめでたくてハッピなんか着ているのだろうか。頭がおめでたいからだろうか。

見ているこっちが恥ずかくなる格好に、いったいなんの集まりだと嫌そうな顔を隠しもせずに見ていると、男達の真ん中にいるパンチパーマの男が口を開いた。

「我々は、とつじつ 餐餐組から遣われし“クルルちゃん親衛隊”である！」

「…………クルルちゃん親衛隊？」

なんだ、ただの変人の集まりか。

「それじゃあ校長。俺、教室に戻るんで

「うむ」

『うおおいっ！ 待ちやがれえ！』

出会いなかつたことにして去ろうとする俺を、汚い五重奏クインテットを奏でられ止められた。

「えー……

仕方なく心底嫌々ながらも男達に向き直る。いい歳した恐面のいかついおっさん達が『親衛隊』を名乗つて恥ずかしい格好をしている姿は、あまりに見るに耐えないものがある。

「親衛隊……」といふのは置いといて紹介させてもらつよ。彼らは明日からこの学校の教師として働くことになつた饕餮組員の方達だ

校長の説明を受け、五人の姿を改めて一通り眺めてみる。どう見ても、ヤクザではなく変人の集まりにしか見えない。

「饕餮組……。つてことは、この組の親分さんがクルルちゃんを最近まで預かってくれていたのか

……この子分にして親分あり、といつよつなことはないだらうな。せめてまともじやないのはこつらだけにしてほしい。

「そりゃだ。お前さえいなければ、クルルちゃんはずつと我が組だけのアイドルだつたのに……！」

血の涙を流さんばかりの形相で五人が俺を睨み付けてくる。しかも一斉にグラインディング（臼歯運動）の歯軋りをしてくるので、ギシギシと鳴る歯の音の五重奏が非常に不愉快だ。

「いや、そんなことを言われても……。あんたらの元々の役目は俺の補助をすることだし、そう親父に頼まれているんだろ？」

五人の恥ずかしすぎる格好にドン引きしているので凄まれても恐怖なんか感じるはずもなく、代わりに冷静沈着な態度で俺がそう指摘すると、五人は渋々ながらも頷いて肯定した。意外に聞き分けの良かつた大人（推定三十歳前後）達であった。

「……にしても、なんでそんな格好してるんです？」

無視したかつたが、インパクトが強すぎてちらちらと視界の端に入ってくる度にどうしても意識がそっちに向いてしまう。だから尋ねたわけなんだが、興味も関心もないことを尋ねるのはかなりの苦痛だった。

「……知りたいか？」

「まあ……それなりには」

「そりゃどうか。知りたいのか。なら教えてやる。……だが、その前に。お前はどうしてこんな格好をしているんだと思う？」

おそらく正氣を失つてゐるんだと思う。でなければそんな見苦し

い格好をできるはずがないですよ。

あやうく激怒を大人買いするような言葉を吐きかけたが、なんとか喉奥で留め、少し時間を要してから当たり障りのないことを代わりに答えた。

「そんな恥晒しな格好をする理由なんて気が狂つてるとしか思えな
いですよ」

やつちました。

『てんめええツ、ぶつ殺すぞゴルアアアアツ！』

五人が色めき立つて俺に迸る殺意を向けてくる。俺はそれを真正面から甘んじて受け止めた。……これは、偽ることができなかつた俺の本心が招いた結果なのだから。

「それで、なんでそんな格好してるんです？」

毎秒一度は『殺』を使う罵詈雑言の嵐が通過中だったが、総スル一して改めて尋ねた。このままじゃまったく話が進まないんでね。

『……』

なにか言いたいような納得し難いような微妙な表情をして、五人はただ黙つて俺を睨み付けてきた。なにを言つても全然堪えていない俺の態度からある程度の人となりが理解でき、脅しも威しも嚇しも無駄だと悟つたのだろう。

「……八月十四日が、なんの日か知つているか

不承不承といった感じでそつとパンチパーマ。さつきから思つ
んだが、勿体ぶひづしさと教えてくれよ。

八月十四日がなんの日かだなんて言われても、調べれば数多くあ
るだらうし、俺がそれを熟知しているはずもない。知つていても、日本初の専売特許が交付された日だつていうぐらいなもんだ。
まさか聖マクシミリアン・コルベ神父の祝日が答えだつてことはな
いだらうし。……あー、そういえば誕生花がジャーマンダーで、花
言葉が確か『愛敬』だつたかな。

いろいろと頭ん中で知つてることを羅列させていつたが、答え
など出でるはずもなく。降参を表すように手首をひらひらと振つ
た。

そしてようやく、パンチパーマは八月十四日がなんの日なのかを
口にする。

「……答えは、『よつじょの日』だ」

「……Wha-?」

あまりのことに完璧な発音で『はあ?』を英語にしてしまつた。

「八月十四日。つまり、八十四だ」

正氣や狂氣云々よりも、それを本氣で言つているんだと思つて涙
が出た。

「……えつと……、それと、その格好に、なんの関係が……?」

もしかすると、その日は世の中のロココン共が集まって祭まつりでも始める特別な日なのかも知れない。なにを奉る祭だか知らんが、今のおうちに場所を聞き出して警察にリークしてやろうか。

「IJの格好と、八月十四日になんの関係があるかだつて？」

そんなことも分からんのかと言わんばかりの憎たらしい笑みを浮かべて、五人はなに得意気になつているのかふんぞり返つて俺を見下してくる。

「それは、」

……ここから先は、心底からバカバカしく、開いた口が塞がらなくなるほどにくだらなくて、常人には意味不明なふざけた理由が延々と続くので、理解することを放棄した俺の記憶から消え去つていてため割愛させていただぐ。

2 5『一線を大きく外れた変人達』（後書き）

備考：

贅賛組

今の世の中では廃れつつある仁義と任侠を根強く残している古風な組。どこかの余には所属しているはずなのだが、どこに所属しているのかはなぜか謎に包まれている。

主にしていることは暴力関係。借金取りもそれに含まれている。

……しかしこの世の中、テレビの影響もあるかも知れないが、借金取りのことを理不尽な暴力を振るう輩だという認識がある。金を貸しているのになかなか返そうとしない方が悪いとは思うんだが。そして金を貸したままなのに夜逃げなんてされたら堪ったもんじやない。

そもそも、金を借りる、というのは、金を返すアテがあるから借りれるわけだ。返すアテもないのに借りて、しかも夜逃げでもされたりしたら、貸した方が大損害だ。

だから借金取りというのも必要悪だとは思つ。もしもいなかつたら、絶対に金融機関など成り立たなかつただろ。

ちなみに、贅賛といつのは中国の化け物の名前である。

「 とこつわけだ

「 ……はあ、そうだったんですね」

その締めの言葉が耳に入り、よつやく俺の脳は活動を再開した。

まだ少しぼうっとしている頭を振り、適当に相槌を打つ。壁に掛けた時計をちらりと見ると、五、六分ほど無駄な時間を過ごしたことに気付き、内心溜め息を吐いた。そしてバレないよう欠伸を噛み締め、本題に移すのに適切な面持ちになるよう顔を引き締め、校長を合わせた六人が視界に入るよう場所を移動する。

校長室の出入口前には五人の変人共、その正反対の場所に校長が静かに紅茶を口に含んでいるので、俺は歴代の校長が描かれた肖像画のある壁際まで寄ると、軽く壁にもたれて腕を組んだ。

「 それじゃあ、そろそろあんたらがこの学校に赴任してきた理由でも聞かせてもらいますかね」

ヤクザが学校の教師を始めるなんて……まあ、有り得ない話ではないが、裏があるとしか思えない。もつともその理由も、話の流れから大体の見当は付けているのだが。

「……その大体の理由は察しているのに敢えて尋ねてくる憎たらしい顔は、確かにあの野郎と血が繋がっていることはあるな」

ヤクザからすれば格下でしかない俺に生意気な口を叩かれるのは屈辱だらう。パンチパーマの変人が苦虫を噛み潰すようなしかめつ面で俺を睨み付けてくる。

クソ親父と一緒にされたのは胸クソ悪い気分にしかならないが、あいつの鬱陶しさや憎たらしさやふてぶてしさや偉そうで苛立たしいムカつく態度は遺伝的に受け継がれていくようなんで俺にはどうしようもない。そしてそれを改善するつもりもない。面倒だし、それが俺の在り方でもあるからだ。

「その質問には私から説明するよ

コップを置き、校長は五人を制すように視線を向けると、指を組んで今度は俺に視線を向けてくる。パキッ、と俺が割ったガラスの破片が落ちる音が辺りに響き、ポツカリと空いた窓から流れてきた一陣の風が、微かに紅茶の匂いを運んできた。

「先程も言つたと思うが、私達は“協力者”でね。クルルちゃんが普通の日常生活を営めるように協力してくれと頼まれている

「…………？」

その校長の言葉に少なからず困惑する。俺の予想では、親父からクルルちゃんを守るように協力、または手伝いをしてくれるよう頼まれているとばかり思つていたからだ。昨日の手紙も、それを匂わせるような文面だつたし。

「……どういう意味です？ その言葉の含みだと、クルルちゃんを守るとそれとでは同義ではないように聞こえるんですが」

「賢しいね。その通りだ」

ハッキリと断言され、しばらく閉口する。なにを言ひべきなのか言葉が見付からなかつたからだ。

そんな俺を静かに見据えて、校長は更に続ける。

「クルルちゃんが普通の日常生活を営めるようにする協力ならば全力で取り組もう。……しかし、クルルちゃんを守るとでは話は別だ。なぜなら、」

この場にいる六人の鋭く尖つた視線が、真つ直ぐ俺に突き刺さつた。

「それは君の役目だからだ」

……なるほど。

今日何度もかになる溜め息を吐いて、目を閉じ、一人頷く。

つまりは、こういうことか。俺がクルルちゃんと一緒にいる間は自分で守れ、と言つているわけか。簡単に整理して解釈すればそういうことになる。……あの野郎、無責任に責任重大なことを俺に求めやがつて。

クルルちゃんは誘拐されてこそ価値がある子だ。身代金目的の誘拐は生け捕りが最重要項目。そして誘拐する手段は一つのみ。直接

捕まえに来るか、どこかに誘い込んで捕まえるかだ。

昨日、誰かが遠くからクルルちゃんの様子を逐一監視していると推察していたが、それは正解だろう。不審なことを感知したり危険が近付いていることを察知したら、クルルちゃんのすぐ近くにいる者に報告するための“協力者”がいるはずだ。

たぶんそいつから、クルルちゃんを守る役目のある俺のところに連絡があるのだろう。そして、自分一人の力でどうにかしてクルルちゃんを守れ、と。

「……わかったよ」

やれやれと首を振つて、肩をすくめる。なんの思惑があつて裏で陰謀はたまた策略でも回りくどく手回ししているのかは知らないが、どうやらクソ親父は俺にクルルちゃんを守れるもんなら守つてみせると喧嘩を売つていいらし。……ハツ。喧嘩は買って利息付きで売り返すのがモットーである俺になんとも命知らずな野郎だ。

「それが俺の役目だつていうなら、詭弁も反論も口にせずただ黙つて忠実に従つてやるわ」

どうせ自棄ヤケでやるつもりだつたんだし、いこまでもくるともはや意地もある。……それに、

パパは、私を一人にしないよね……？

深い哀しみに彩られた瞳を寂しげに潤ませ、たさやかな願いを口

にしたあの子に、俺はなんと答えた？

「うん。……約束する。

なら当然、約束は守らないといけないよな。

それにその役目を全うするということは、同時に約束を守ることにも繋がる。すぐにも破れそうな頼りない縄で束ねているそれを、“破られないように守る”ような感じだ。クルルちゃんを犯罪者から守るつてことは、イコールではクルルちゃんを一人にしないのと同じ意味になるからな。

「……ただその代わり」

自分の役目を再認識したところで、俺は一ヤリと口を歪めた。

「俺がやろうとすることのサポートだけはしつかりしてもらいますよ。“クルルちゃんが普通の日常生活を営めるため”に必要なんですからね」

「おや。それなら拒むわけにはいかないね」

校長からの鋭い視線が和らぎ、代わりに一ヤリとした、だけど嬉しそうな笑みを向けられる。

「そうだな！ それなら仕方ないよなー」

パンチパーゴの変人も頷き、同意を求めるように他の変人達を見

る。この場の雰囲気が少し柔らかくなつたような気がした。

……ま、つまりはなんだかんだ言つて、彼らもまたクルルちゃんを守りたいと思つてゐるというわけだ。要は言葉の使い用。結局のところ、彼らの名前である『クルルちゃん』が普通の日常生活を営めるための協力^要を、俺が言葉巧みに利用して結果的に『クルルちゃんを守る協力』に変えれば済むことなのだ。

……そのことに気が付いてほしさうに五人の変人共がギラギラして瞳を向けつつ、『クルルちゃん命』のハチマキを指で差していたのだから気が付かないはずもないんだけど。

「……それじゃあ、俺はこれにして失礼しますね」

他にも聞くべきことはあつたが、それはまた後日にするとしてよ。一日で詰め込み過ぎても理解が乏しくなるだけだ。今日得たことを頭の中でゆっくり整理整頓してから、またここに尋ねに来るとしき。……もしかしたら訪ねに行くかも知れないが。

それに、どうせここは何度も足を運ぶことになるのだ。少しざつ理解を深めていけば良い。

「……ああ、最後に一つ、君に訊きたいことがあるのだが

五人の変人共の脇を通り過ぎ、出入口の扉のドアノブを掴んだとこりで、

「もしもだ。……クルルちゃんが誘拐されたら、君はどうするつもりだい?」

そんな、漠然とした問いを掛けられた。

「…………決まってるじゃないですか」

もし万が一にもそんなことが起きた場合は、

「なんとしてでもクルルちゃんを奪い返し、犯罪者には然るべき報復を与えるだけだ」

相手が人であるのなら、夢も希望も喪失させ、絶望のどん底にまで突き落として破滅させることなど、俺には容易いことだ。

そう。容易なのだ。

人を破滅させるなんてことは。

少し考えれば判るほどに、分かりやすく、簡単だ。

「…………ほう。それはいったい、どんな風に？」

おそらく、校長からの最後となる問い掛けに、俺は顔を向けると、

「そりや勿論。ありとあらゆるどんな卑劣で卑怯な姑息な手段を使ってでもそいつの人生を徹底的にぶつ壊して

」

凄絶な笑みで、答えた。

「…………絶望の淵で、息絶えさせてやるぞ」

言つなれば、この俺の役田とこひこの適任過あらべて適任な
わけだ。だからクソ親父は俺を選んだのだ。ひつ。そん
なところだ。

そして俺は顔を前に向け、廊下に出るために、ドアノブを捻つて
扉を開いた。

「みーつけた」

「…………」

……俺が地獄の淵で息絶えることになつた
だった。

2 6 『俺がするべき役目』（後書き）

備考：

百万回生きたねこ

おはなし。

（公式からそのまま抜粋）

百万回も死んで、百万回も生きたねこがいました。

王様、船乗り、手品使い、どろぼう、おばあさん、女の子……百万人の人人がそのねこを可愛がり、百万人の人人がそのねこが死んだとき泣きました。

あるときねこは誰のねこでもない、のらねこになりました。

自分が大好きなねこは、めすねこたちにちやほやされて有頂天になりますが、一匹の白く美しいねこに魅せられます。やがて子どもが生まれ、自分よりも大切な家族を持つことになりました。

そして……。

百万回死んでも悲しくなかつたねこは、はじめて愛することを知り、愛する者を失つて涙を流すのです。

次話にちょいっと出てくれる『五万回生きたね』に対する備考
…というか補足です。気になるようなら読むことをお勧めします。

あらゆる言葉の暴力を残虐に呪された後に道徳と倫理を切々に諭され説教される生き地獄が終わったのは下校のチャイムが鳴る頃であつた。

「クルルちゃんに手を出したらタダじゃ済まないわよ」

最後に底辺の存在を見るような侮蔑を込めた瞳でそれだけを言い残して澄香は生徒会室へと向かい、後に残された俺は正座の体勢を崩して足の痺れに一人悶えた。

「少しは話ぐらい聞いてくれよな……」

有無も言わせてくれないので反論など無理だつた。無駄だつたのも確かだが。

やがて足の痺れがなくなり立ち上ると、げつそりとした面持ちで生徒指導室（お説教部屋）から出る。がやがやと帰宅途中の学生達で騒がしい廊下をふらふらと歩き、校長室へと足を運んだ。

「失礼します」

ノックをせずに中に入ると、椅子に座つて本を読んでいるクルルちゃんが視界に入った。

「あ、パパ！」

俺に気付いたクルルちゃんが顔を上げて嬉しそうな笑顔を浮かべる。花の咲く瞬間を見たような温かさを心に感じた俺は、疲れた表情も消え去り、自然に自分も笑みを浮かべて彼女に近付いた。

「良い子にしてた？」

「うんー。」

「なに読んできたの？」

「『『百万回生きたね』』を読んでたの」

「へえ」

それはまた懐かしいものを読んでるな。俺も子供の頃に読んだことがあるが、それ以来読んでいなくとも未だに記憶に残っているのだから確かに名作だろう。本当に素晴らしい作品といつのは、いつまでも心に残るものだからな。

「……校長先生は？」

周りを見渡し、校長がいないことに気付く。俺が砕いた窓ガラスの破片が綺麗に掃除され、もう新しい窓ガラスに代わっているのを確認しつつクルルちゃんに尋ねた。

「もうそろそろパパが来るだろ？から、って今さっき出ていったよ

……なぜ俺が来るから出ていくんだ？ 澄香と一緒に来るとでも思っていたのだろうか。

「……そつか。それじゃ、そろそろ帰らうつか？」

「……に長居しても仕方ない。俺は左手をクルルちゃんに差し出した。

「うん」

クルルちゃんは椅子から飛び降りるよつに立ち上がり、俺の手に小さな手を重ねる。すぐにも壊れてしまいそうな華奢な手を、俺はやんわりと包み込んだ。

御誂え向きといつか渡りに舟というか。校長室のすぐ近くに滅多に使われることのない西門がある。なので、誰にも見付かることもなく校外へ出るのは簡単だつた。……推測でしかないが、位置関係からしておそらく西門は校長の秘密の逢い引き場所なのだろう。

そうしてクルルちゃんと一緒に外へ出た俺がまず最初に目を向いたのは、……ここからでも良く見える、今やこの街のシンボルとも言える天高くそびえた巨大ビルだつた。

【草摩クリエイティブビル】

簡素で素朴な名称ではあるが、かの世界的にも有名な諏訪グループの傘下にあり、近年になって急成長した大企業である。三ヶ月ほど前に完成され、付近の住民からは日照権だかなんだかで争つているとよく耳にする。それに海辺の近くだけあって、排水の問題でも揉めているらしい。

それだけだと悪い噂でしかないが、ボランティア活動に積極的であることはテレビを通して結構有名だ。恵まれない子供達や環境問題のために募金活動をしているので、その協力を呼び掛けるCMを何度も見たことがある。

……まあ、本当に集めた金の全てをボランティアに使っているかどうかは、甚だ疑問ではあるが。

「パパ、上になにかあるの？」

ずっと上を向いている俺が不思議だつたのだから。クルルちゃんも上を向いて田をキヨロキヨロと動かしている。

「ハハ、なんでもないよ。ただ、……あそこからならこの街一帯を隅々まで見渡せるかなあ、なんて思つてね」

「ふーん？」

田舎だけあって、ここに近辺にはあのビル以外に大きな建物はほとんどない。あそこから望遠鏡を覗いたら、さぞかし眺めが良いことだろう。

「トキちゃん、それは犯罪だよ？」

「ぬおッ！？」

すぐ真後ろからの声に飛び上がる。いや、声に驚いたわけではない。耳に息を吹きかけられたら誰だって驚くに決まっている。

即座に振り向くと、荒波先輩が血腫のバストの下で腕を組んで一
ヤニヤとした笑みを浮かべていた。

「あ、荒波先輩！？ なにするんですか！」

「ふう、つでしたの」

「なんでしたんですか！」

「それはねえ、トキちゃんが『あそこから望遠鏡を覗いたら、さぞ
かし眺めが良いくことだらう』って犯罪臭い台詞を口走っていたから
だよん」

「え、声に出てました！？」

「つ、ん。勘」

「勘で思考を読まないでくださいよー。」

「まつたくこの人は……。俺は額を押さえて首を振った。

「『『』』うなつたら先輩の胸を揉みまくつてやる』だなんて……トキ
ちゃんって本当にエツチだねえ」

「思つてねえよー。勝手に俺の思考を捏造しないでくださいよー。」

「ネツゾウなんてしてないよ。『ツゾウしただけ』」

「同じ漢字ですよねー？」

『捏造』はネツゾウともテツゾウとも読める。ちなみに、でっち上げ、というのはここから来ているとかいないとか。

「……あー、それで、こんなところでなにをしてるんです?」

話を戻して……いや元々脱線から始まつていたが、なんとか戻す。……にしても、こんな人気のないところで出で会すなんて神出鬼没な御人だ。

「……えーと、ね。トキちゃんを探してたんだよ?」

「は? 僕を?」

「やうだよお。澄香ちゃんが『まさか生徒会に来ないなんて……この世から滅されたいよ!』って怒つてたから」

「ゲホ……」

「うわ、忘れてた。確か今日も生徒会の仕事を手伝つと約束してたんだつた。」

「いやあ……こつちにも事情つてもんがありますからね。あー……、そこんところの説明、お願ひできませんか?」

澄香は荒波先輩の言つことなら、多少だが聞くので藁にもすがる思いで頼む。

「じつかたないなあ。お姉さんに任せなさい」

ドンと胸を叩いてふんぞり反る荒波先輩。……しかし、胸を叩い

たどきの音はドンではなくボローンだった。恐るべき爆乳である。

「おあと。そろそろ私も生徒会に戻らないと遅番ちやんにじめられちゃう」

思い出したように手を叩いて、ひらひらと俺とクルルちゃんに手を振った。

「じゃあねトキちゃん。クルルちゃんと二人きりの共同生活だからつて、襲つたりしたらいけないよ？」

「しねえよー」

「クルルちゃんもまたね。パパが鼻息荒く近付いてきたらちやんと悲鳴を上げるんだよ？」

「うん？」

「あんた俺をなんだと思つてるんだ！」

と怒鳴りつつも手を振り返す。しつしつ、と犬を追い払うような動作で。クルルちゃんもバイバイと手を大きく横に振つて、笑いながら去つていく荒波先輩を見送つた。

「…………」

その後ろ姿を最後まで見届けてから、クルルちゃんへと顔を向ける。

「…………クルルちゃん、今日の晩御飯はなにがいい？」

晩の献立はまだ決めていなかつたのでリクエストを尋ねた。

「えーとね、……なんでもいいよ」

少し悩む素振りを見せ、しかし一ヶ口りと笑つてそりと云つた。

「なんでも……かあ」

実は一番困る回答なんだが……まあ、いいか。

「じゃあ一田家に帰つたら、一緒に買い物に行く？」

「行くー！」

そんな些細で取り留めもないような申し出に、クルルちゃんはそれはもう嬉しそうに笑つて、はしゃいだ。子供ながらの、喜びの表現だつた。

「ハハハ……」

俺も子供の頃はこんな風に感情豊かだつたのかな。……もう覚えてないが、少なくとも母さんが生きていた頃は、俺にも笑顔が多かつたような気がする。

こんな異国之地で、母親はいないし父親とも離れているのに、こうして一人でいるのにも関わらず、クルルちゃんは笑つていられる。……そこは素直に尊敬できるほど、クルルちゃんは健気で、強かつた。

「良し。それなら、今日は」

とつあえず、晩の献立は決まった。

俺の今の知識と技術では、これが精一杯だ。

「カップラーメンにしよう」

インスタントだった。

……いや、さ。朝飯は作れるけどさ。晩は今までインスタントで済ませてきたから、正直、料理スキル（十段階中）の俺にとって朝飯のような簡単に出来るやつはそれこそ朝飯前だけどそれ以上のは作れないというか。

「かつぱら～めん？ うん、食べてみたい！」

どうやらクルルちゃんも食べたことないみたいだし、今日の晩はこれにしよう。

「……料理の本、買わないといけないなあ」

頭を搔き、ぼやく。いつまでもインスタントというわけにはいかないし。……昔、澄香の料理にいろいろとケチを付けたことがあるが、ホント、何様だったよなあ俺。

今度澄香に弟子入りさせてもらおう、と恥を忍んで頼み込もうと
決めつつ、俺達は少し紅くなってきた空の下を、他愛のない話をし
ながら二人仲良く手を繋いで歩き出した。

……その様子は、確かにまつたくと言つていいほど親子には見え
なかつたが、兄妹のように仲睦まじくは見えたことだらう。

2 7 **『一人手を繋いで』（後書き）**

俺は面倒事が嫌いだ。お人好しなことも、ついでに嫌いだ。

例えて言つなら、目の前で子供が溺れているのを発見したとする。そのとき俺は、間違いなく次の行動に移るだろう。

次回、新米パパ奮闘記～親子の絆編～第3話。

【とある保険医の憂鬱】

子供が溺れていることを大声で叫んで周りに知らせ、救急車を携帯電話で呼びつつ空のペットボトルが落ちていないかをくまなく探し子供に投げつけるぐらいだ。

しかし、

「それでも十分お人好しだよ、カナヅチちゃん」となぜか荒波先輩に言わされたことがある。……なぜ俺がカナヅチだってバレたんだ？

「手伝いなさい」

「…………は？」

その突然の発言に、鞄から荷物を取り出す手を思わず止め、顔を怪訝そうに歪める。

田の前では現生徒会長の南条澄香が両手に腰を当てて俺を見下ろしていた。見方によれば傲岸不遜な態度に見えるが、澄香がすると凛としていて様になるのだから不思議だ。やはり彼女の貴祿が成せる態なのだろう。

「…………なんなんだ、突然。主語を言え主語を」

いきなり述語を言われても反応に困るだけだ。止めていた手を再び動かしながらそつと尋ねる。

「私を、手伝いなさい」

「…………」

“なに”を、が知りたかつたんだが。

俺は溜め息を吐き、中身がなくなつて軽くなつた鞄を机の横に引っ掛け、もう一度改めて澄香に尋ねる。

「“なに”を、手伝えばいいんだ?」

そこまで言つと、澄香はキリツと引き締めていた表情を少し困つたように和らげた。言葉を探すように手を左右に動かしている。

現在の時刻は七時半。もちろん、朝のだ。今日はいつもより早く家を出、校長室から近い西門を通り、つこせつとき校長にクルルちゃんを預けたばかりである。そうして教室へと向かい、……誰よりも早く学校へ登校する真面目な生徒がいる教室へと入り、こつして今に至るわけだ。

ちなみに、今のように澄香が頼み事をしていくのにはそう珍しくもない。というか、澄香と一ときりになるといろいろと雑談をしたあとに頼み事をされるというスタンスが形成されているほどだ。このようにいきなり突然突拍子もなく頼み事をしていくのは……生徒会の仕事を押し付けてくるときだけである。

ということはつまり、生徒会の仕事を手伝えと言つことだらうか。……はて。それならいつものように無理矢理押し付けてくるはずだらうじ。

「……とにかく、手伝つか手伝わないのかどちらか答えなさい」

ようやく澄香が口を開いたと思つたら、腕を前に組み、再び表情をキリツと引き締めて高圧的に一択を迫つてきた。

「もちろん、手伝わない、の選択肢はないわよ。あなたは私に多大

な借りがあるんだか」「ひ

しかも選択肢の意味はまったくなかつた。それに多大な借り……
ところは、昨日の生徒会の仕事をすっぽかしたことだらう。それ
を言わると俺も強く言えない。

「…………わかつたよ。手伝ひ手伝ひ。だから、なにを手伝えばい
いのか教えてくれ」

しかし、澄香が答えてくれるにはしばし時間を要した。逡巡する
ように手を開じ、やがて決意するよひに表情を少し険しくして俺を
見据えると、さくへ口を開いた。

「…………保険医の公卿先生が時々、だけど生徒会の仕事を手伝ってくれ
ているのは、知つてゐるわよね？」

「…………。あ

初耳だった。

というか、そんな場面見たこともなかつた。

「実は、…………その公卿先生が困つたことになつて、いるの

「困つたこと?」「

「ええ……」

澄香は神妙に頷き、その“困つたこと”を告げた。

「どうやらストーカーの被害を受けているらしくの」

「……………へえ」

それを聞いて俺は、心底どうでもいいような口調でやる気のまつたくない嫌そうな顔を隠しもせず、つまらない反応を露骨に見せ、それだけを言った。

そんな俺の微妙な反応に澄香が気付かないはずもないのだが、敢えて俺に尋ねる。

「…………その、ストーカー被害をどこかしたいと思つてるんだけど、」

「断る」

手伝ってくれる? と澄香が続ける前に、ハッキリと俺は拒絕した。

そして一の句も継げないでいる澄香に、俺は更に続ける。

「どうして、俺が、そんな恋愛沙汰の延長線でしかない面倒事に、首を突っ込まないといけないんだ」

法律上ではただの男女間トラブルでしかないことになんて俺がでしゃばらないといけないんだ、と憤然とした面持ちで一区切りする「」と元語氣を強める。

「それに、そんな面倒事は警察に相談しろ」

「相談したわよ……まったく取り合ひてくれなかつたけど」

そりやそりや。

民事不介入だかなんだか言つて門前払いされるのがオチだろ。実害がなれば奴らは動かないからな。いや“動きたくない”か。だからストーカー規制法なんものが数年前に施行されたのに、まったく改善されていないのが今の現状であり実情だ。

そこまで分かつていながら警察に相談しようと無責任に発言する俺は、澄香から見たらさぞかし警察の対応と同じように見えることだろ。おそらく警察も、俺と同じ気持ちで応対していたはずだからだ。

“面倒臭い”。

つてね。

「ならお手上げだな。それに警察が取り合つてくれないんなら俺が取り合つても仕方ないだろ」

「……でも、わざわざ手伝ってくれるつて言つたじゃな」

「それはそれ、これはこれだ」

使ってみて分かるが、屁理屈をこねるにはなんとも有効な言葉だなコレ。まったく理屈が通つていのに、通つていのうに見せかけられるのだから不思議である。

「俺がそんな面倒なことを手伝うようなお人好しじゃないってこと

ぐらー、お前も知ってるだらう。やるんならお前が一人でやれ

突き放すように冷たい言葉を投げつける。表情も拒絶を顯すよう
に小馬鹿にしたような顔を心掛けた。

……するとい、

「…………なによ」

澄香は頬をふくらと膨らますと、ふいっとそっぽを向いた。

……これは珍しい。

スネたようだ。

「……時風が『なんでもかんでも俺に頼るな』って怒ったから一
人でもなんでもできるように頑張ってたのに、『少しは俺を頼つ
てもいいんだぞ』なんて優しい言葉を掛けて自分から手伝ってくれる
ようになつたのはどこの誰よ。……だから、……その、少しは頼つ
てみようかなって思つて相談したのに、『お前が一人でやれ』って
断るなんて無責任じやない」

愚痴るようにブツブツ呟いては、ちらちらと横目で俺を恨めしそ
うに睨んでくる。これには俺も參つた。

「……あー、いやそれは、お前がなんでもかんでも一人で背負い過
ぎて病氣になつたからだろ。だから俺は見かねてだな、」

「……………わざわざおまかれてくれるって叫んだの?」

「お前なあ…………」

「あ…………。俺は居心地悪そうに頭を搔き、歯を尖らしている澄香から田線を「反らした」。いひなると子供みたいにいつまでもスネるからなあ」「イツ。そここんど」ひびき、昔からまつたく変わっていないな。

「…………」

「…………」

無言でじこいつと俺を見てくる澄香は、元氣を貰っていながら、

「…………はあ」

深い溜め息を吐き、両手を上げ、降参の意を示した。まさしく『お手上げ』である。

「…………はい。わかつた、…………わかつたよ

折れた。それはもう、へし折れた。どうやら俺も、一回に甘くへ弱いところは昔からまったく変わっていないようだ。

「手伝えばいいんだろ手伝えばまばたく。面倒事を持ち込みやがって」

しかめっ面でふてくされたよつこきつひつも、澄香はとても疑わしげな顔をして俺を見つめてきた。

「……本当に？」

「ひひひやうひ心暗鬼になつてこるよつだ。……本当に仕方ない奴だな。

俺はやれやれと椅子から立ち上がると、おもむりに澄香に近付き、自然な動作でその頭にポンと軽く右手を置いた。

「…………うう…………」

すると澄香の顔が面白いほど勢いで真っ赤になつた。だけども嫌がる素振りはまったく見せないので、俺は構わず澄香の頭を撫で始める。クルルちゃんとはまた違つた艶やかな髪の質感が、まるで手に馴染むような感触なので、撫で心地が良かつた。

「本当だ。だから、そうむくれんなよ」

「…………むくれてない」

「はいはー」

当然だが、幼馴染みだけあって澄香と喧嘩したことは数え切れないほどある。喧嘩したあの澄香は大概スネて俺と口を利こうとしなくなるのだが、一時間ほど過ぎるとあからさまに寂しげな表情をして仲直りしたそうに遠くから見つめてくるような女の子だつたので、なんだかバカらしくなつてきた俺から謝るのがほとんどであった。

頭を撫でる、といつ行為はその頃からの名残だ。澄香に謝るとき

はいつも頭を撫でていたので、癖みたいなものだらう。……あの頃の澄香は、泣いていても俺が頭を撫でたら本当に嬉しそうな顔をして喜んでいたので俺としては都合が良かつたのもあるし、……まあ、その、なんだ。……か、可愛かったしな。

「…………時風」

「ん？」

すくに近づいてくれる澄香へと意識を向ける。

「…………ありがと」

すぐ近くにいた俺がどうにか聞き取れるよつな小さこ声で、澄香が感謝の言葉を呴いてそっぽを向いた。

「…………ああ」

少し照れつつも頷く。この昔から相変わらず可愛こままの女の子は未だに彼氏がないのだから不思議である。大分前に『彼氏作らないのか』と尋ねたことがあるが、返ってきた答えは『時風が彼女を作りうると思いつから考えてみるわ』であった。

ちなみにそれには続きがあつて、『じゃあそんときはまず最初にお前に告白するよ』と冗談半分で言つたら、『望むといひよ』と真顔で返された。……おやじく、あつけなく玉砕するところになるだらうな。

「…………？」

そのとき、ふと澄香の様子に違和感を感じた。さつきからそっぽを向いたまま微動だにしないのである。……どうしてだろう。無表情なのに、その横顔からはなぜか『驚愕』の一文字しか感じられないかった。

「…………」

そうして俺も嫌な予感を多大に感じながらも、澄香が向いている方向へと顔を向けた。

そこには、

『…………』

教室の外から、遠巻きに俺達の様子をニヤニヤとした表情で眺めてくるクラスメイト共の姿があった。しかも見るかぎり全員揃っている。

「…………てめえら、そこで、なにをしている…………？」

即刻、澄香の頭から手を離した俺が、我が身を怒りに震わせながらクラスメイト共に聞いた。

「なにをつて……」

クラスメイト共の代表で、工藤がニヤニヤ笑いを抑え切れないような口調で言った。

「誰もいない朝の教室で睦みあつ一人を、皆で覗き見してただけだぜ？」

ブチ。

聞こえるはずのない堪忍袋の緒が切れる音が、俺の頭と近くの澄香から聞こえたような気がした。

そして二人同時に大きく息を吸い込むと、口を揃えて息の合った怒声を校内中に轟かせた。

「「帰れッ！－」」

……そして本当に帰ろうとしゃがるクラスメイト共のせいで、学級崩壊の危機に陥りかけて田中先生の男泣きを見るに至ってしまった。

備考：

ストーカー規制法

平成12年5月18日。

第147回通常国会において『ストーカー行為等の規制等に関する法律（ストーカー規制法）』として成立し、11月24日から施行された法律。この法律はストーカー行為等を処罰するなど必要な規制と、被害者に対する援助等を定めており、ストーカー行為の被害から人々を守ってくれるはずのものである。

以下八つの内、一つでも当てはまればそれはストーカー行為となります。

- 1【つきまとい・待ち伏せ・押しかける行為】
- 2【監視していると告げる行為】
- 3【面会・交際の要求（強要）】
- 4【著しく粗野又は乱暴な言動】
- 5【無言電話、連続した電話等】

6【汚物などの送付】

7【名誉を傷つける行為】

8【性的羞恥心の侵害】

上記のいずれかに当てはまっている場合、警察署長等から『ストーカー行為をやめなさい』と警告してくれます。更に、警告に従わなかつた場合は、東京都公安委員会が『その行為はやめなさい』と禁止命令を行います。そして更に禁止命令に違反して『ストーカー行為』をすると、1年以下の懲役又は100万円以下の罰金が科されます。

しかし、告訴しなければ検挙することはできないのでご注意を。もし告訴していなかつた場合の罰則は、6月以下の懲役又は50万円以下の罰金となります。

尚、警告によってストーカー行為が終わる確率は70%以上あります。

では、残りの30%は?

.....逆恨みほど、人間という恐ろしさを感じるものはないの

です。

軽諾寡信 けいだくかしん という言葉がある。

『軽諾は必ず信、寡し』の略で、軽々しく物事を引き受けける者は約束を守らないことが多い、信用できないという意味である。まあつまりは、安請け合いする人間は当然にならないということだ。

その点からすると、嫌々ながらも渋々と請け合った俺は信用に足るということになるのだろうが、……それは別として、俺は今、切実にこの軽諾寡信の意味に『安請け合いするような依頼を持つてくる奴も信用できない』を付け加えたい気分であり、非常に理不尽な気分を感じているところである。

それは昼休みのチャイムが鳴り、昼食を食べようとクラスの皆が思い思いに行動していたときのことだ。俺が食堂でパンでも買ってクルルちゃんに会いに行こうと立上ると、後ろから澄香が近付いてきて言ったのだ。

「じゃあ時風、今から保健室に行ってね。あ、午後の授業のことは心配しなくてもいいわよ。私から先生に早退したって言つておいてあげるから

おかしい。なんで俺が午後の授業をサボる前提で宣つておるんだ

『トイツ。

「は？…………ひよ、オイー、待てよー。」

慌てて教室から出でひよする澄香を呼び止める。

「なに？？」

「なんで俺が午後の授業をサボらなことにならんだよー。」

「ほら、『急がば回れ』ってことわざがあるでしょう。だからよ。」

「意味が違うだろー むしろ逆だ！ それを言ひなう『巧達は拙速に如かず』だー。」

「良く知ってるわね

「せいや これに関してはお前より成績良いしなー。」

現代文（高校での国語）に関してなら学年トップクラスの澄香にも劣りはしない。……まあそれも、現代文は澄香にとつては苦手な“教科”なだけで、俺にとつては得意“分野”だという理由でしかないのだが。

「とにかく、手伝ってくれるって約束してくれたからにはちゃんと守つてよね。……じや、私はこれから職員室に行かないといけないから、後は任せたわよ」

「お、おこー」

俺の制止の言葉に振り向くもせず、澄香は教室からすたすたと出ていった。

「…………」

弁当も食わずに職員室に行くのだから澄香も忙しこうのは分かるが、後は任せたつてあんまりではなかろつか？

肩を若干落として溜め息を吐くと、軽諾寡信はするもんじやないなど沁々と思つた。……ああ、ここでの軽諾寡信の意味は『安請け合ひはするもんじやない』なんで実際の意味とは違うのであしからず。……こつか今の状況を如実に表せれる言葉が出来たら文部科学大臣に提言してやるうかなマジで。

さて、と。とつあえず食堂に行つてパンでも買ってから、クルルちゃんと顔を見せに校長室へ行くとしようか。保健室はその後でもいいだろ。

『氣だるがり順序を決め、俺は教室から出ると一階へと降りた。

一階の一年生校舎と三年生校舎を繋ぐ通路は一つだけで、それはちょうど二つの校舎の真ん中にある。その通路で区切るよつにして、一年生校舎から見て右半分は食堂、左半分は中庭となつてい。

すぐ近くに中庭があることから、食堂で食べる者と中庭で食べる者とで分かれるので、食堂を利用する者は結構多いのだが混雑することではなく、むしろ快適でさえある。ただし、夏場または冬場にな

「おばなちやん、メロンパンあるー？」

「おばなちやん、いつにまづ奴にはやいなこよー」

「じゃあ、ババア」

「……もつ一度言つていいんガキイ？」

「クソババア」

「誰が余計酷く言えと言つたこのクソガキッ！」

とまあ食堂の“お姉様”と微笑ましいやりとりを経て得たメロンパン二つと牛乳ビン一本の入った袋を片手に、『もつ一度と来るなー』とこう罵声を背に浴びつつも清々しい気分で食堂から出た。人をおひょくするのって楽しいよね。

わざわざメロンパンを食べながら校長室へ向かおうと一年生校舎から一年生校舎へ到る通路に差し掛かったとき、通路の端で五、六人の男子が中腰で固まつて座っているのが見えた。

「……すげえ……」

「これ……だ……ねえの？」

「撮つた……誰……な……」

俺がそこつらの側を通り過ぎようとしているとき、そんな微かな話

声が聞こえてきた。なにやら興奮しているらしいのは言葉の節々の強弱から分かった。大方、工口画像でも見て興奮しているのだろう。

お盛んなこつた、と呆れたようにそう結論付け、俺はそいつらから離れて校長室へと向かつた。

どちらでもある田舎の一戸建てとして捉え、気にかかる事ともなく。

ノックなどすることなく校長室に入ると、だらしない笑みを浮かべた髪面のおっさんと楽しそうにあやとりをしているクルルちゃんが視界に入ってきた。ハタから見ると犯罪未遂の場面である。

「あ、
パパ
！」

顔を上げるとすぐに俺の側へと近寄つてくる。さながらじやれついてくる仔犬のようだ。俺は口元を綻ばせると、クルルちゃんと同じ田線になるように膝を曲げた。

.....

向こうから怨念しか感じられない血走った田で鬱面のおっさんが睨み付けてくるので、田を合わせないようになつつくルルちゃんに話し掛けた。

「あやとつしてたの？」

「うん。ほり、見て見て！ 東京タワーだよー。」

クルルちゃんは自慢するように両手を俺の前に差し出した。そこには確かに複雑に絡み合って出来た東京タワーがあった。

「へえ、凄いな」

感心してしげしげと東京タワーを眺める。

俺も昔、澄香と一人で遊ぶときに何度もあやとりをした記憶があるが、その頃の俺はあやとりは難しいものと捉えていたので、器用にいろんな形に変化させることができた澄香を素直に尊敬したものだ。一番簡単な第ぐらいしかできず澄香に笑われていた俺からしたら、東京タワーができるクルルちゃんはかなり凄いのである。

それにしてもチョイスが良い。指先を動かし、物を立体的に考えることで脳が活発に働くので、幼い頃の情操教育に良いからだ。大人でもボケ防止や脳の老化防止にも役立つし。

「久津川くんもやってみたらどうだい？」

机の上にあるパソコンで見えなかつたが、どうやら校長もいたようだ。膝を伸ばして立ち上がると、いつものように紅茶を優雅に口に含んでいる校長の姿が見えた。

「俺なんかより校長がした方がいいんじゃないですか？ まあ、すでに頭が爽やかになつてますから処置すべき時機を逃しているんで手後れだし、そのせいで手遅れになつているとは思いますけど」

「……久津川くん。まさかとは思ひナビ、私になにか恨みでもあるのかい？」

「え？ まさかないと思つてやがつたんですか？」

作り物の笑顔を浮かべて俺が言つと、校長は若干類を引き攣らせ苦笑した。俺から進む憎悪の波動に気付いてくれたようだ。

「ねえ、パパもあやとつしよう！」

俺を見上げ、僅かに期待の込められた真つ直ぐな瞳でそつと誘つてくる。

「あー……」

その申し出に応えてあげたかったが、これから保健室に行かないといけないので丁重に断ることにした。

「『めんね、クルルちゃん。ちょっと保健室に用事ができたから、今から行かないといけないんだ』

膝を曲げ、再びクルルちゃんと同じ田線になると、滑らかな頭に手を置いて謝る。

クルルちゃんは少し寂しげな表情を浮かべたが、それはすぐに心配そうな表情へと変わった。

「……どこか、身体が悪いの？」

「いや、そういうわけじゃないよ。澄香お姉ちゃんに頼まれ」とを
請けたから、それをやりにね

「そつか……」

俺の言葉に安堵の息を吐いて、クルルちゃんは良かつたと綺麗な
笑顔を浮かべた。

「ほう、孫から頼まれごとか。なにを頼まれたんだい？」

しばらくクルルちゃんを見つめていた俺の耳に校長の声が入る。
澄香の名前が出たので校長が興味を示したようだ。答える義務も義
理もなかつたが、答えない義務も義務もなかつたので、立ち上がる
と肩をすくめて簡潔に答えた。

「公卿先生がストーカーそれでいるよつなんで、なんとかしてほし
いと頼まれたんですよ」

「……ストーカー？」

不思議そうに首を傾げる校長に、俺は半田ドいかにも怪しむよう
に尋ねた。

「……まさかとも思いませんが、校長がストーカーしているなんて
ことはありますよね？」

「その言い方に明確な悪意を感じるが敢えて無視して答えるとしよ
う。私は……無実だ」

三点リーダーが十個もなければ信じていたのに。

「冗談だよ冗談。私は無実だ。そもそも、この私がストーカーをするなんてことは、絶対にないからね」

「やけに自信満々ですね。して、その根拠は？」

「私がストーカーをされる立場だからだ」

「うわ言い切りやがったよコイツ。」

呆れる俺の横では、『すとーかーってなあに?』といつクルルちゃんの疑問に『それはだな……』と髭面のおっさんが子供でも判るように簡単に説明をしてくれていた。

「……しかし、ストーカーか。これはまた、いろいろと厄介なことを孫に頼まれてしまつたね」

さつきまでの弛い雰囲気から一転して真面目な雰囲気を纏うと、校長が難しい表情でそう言つた。

「……そうですね。だから嫌だつたんですけど、ま、仕方なく」

疲れたように息を吐いて苦笑すると、校長にあることを尋ねた。

「あのさ、校長。ストーカー規制法が施行されてからは前年に比べてストーカー事件が低下しているのは、確かなんでしたっけ?」

「そうみたいだね。私もニュースで低下していると聞いたことがあ
る」

ストーカーというのは言わば“思い込み”で行動しているようなものだ。自分がストーカーをしているという自覚がない。だから警察署長等にストーカー行為をやめるように警告を受けることで、初めて自分がしていることがストーカーなのだと気付き、相手も自分が的好きなんだという“思い込み”が解消され、正気に戻るのだ。

自覚あつてストーカー行為をする奴もいるが、警告を無視しても東京都公安委員会から禁止命令を出されると大半はやめるのだそうだ。そりゃあ、懲役処分又は罰金処分のどちらかを選べと言われたら、どちらも嫌だからな。

「それじゃあ、ストーカー事件から殺人事件に発展してしまうことが増えたのは、確かなんですかね？」

「それは判らないよ。そんなこと、ニュースで流すわけがないからね」

そんなものだ。確かにマスコミ共は“真実”をテレビを通して教えてくれるのだろう。肝心な“事実”を推し隠してな。

……さて、警察署長等にストーカー行為をやめるように警告されることで終まる確率はおよそ七十%だ。これは、警告に反応して思い込みが解消されて正気に戻る確率と言つてもいいだろ。

では残りの三十%は？

「……思い込みって怖いもんですよね。勝手に勘違いしていくくせ

に、ストーカー行為だと言われたら逆ギレするんですから」

言葉を直すなら、“逆恨み”だ。最初の警察署長等による警告で勝手に傷付いて憤慨して激昂して逆恨みして他人を傷付けるのだから厄介なことこの上ない。

今の世の中。

逆恨みほど怖いものはないのだ。

それが残りの三十%。

なにをしでかすのか、分からぬ。

「公卿先生のストーカーが厄介な人物ではないことを祈っているよ
気が重くなつてじんよりとする俺に若干の同情を感じているのか、
そんな気遣いの言葉を口にした。

「…………、じゃ、行つてきます」

校長には背中越しに手を振り、クルルちゃんには頭を撫でて別れ
を告げ、隣面のおっちゃんは睨んでくるので無視して、校長室から出
た。

そして俺は、公卿先生に会つために足取り重く保健室へと向かつ
た。

3 2 『厄介な面倒事』（後書き）

備考：

キャラクター紹介・4

【のお姉様】

これからも決して名前も年齢も容姿についても描かれてることがないだろうが脇役（予定）。

時風におばけやん扱いされているが、実はかなり若い（自称）。

こんなところでバイクしているので、時風が街を歩くとたまに遭遇することがある（運命？）。

毎日のようにおひょくつてくの時風を最初の頃はうやうやかっていたが、最近は彼との掛け合いが少し楽しくなっている模様（多分）。

作者のお気に入りになりそうなので、おそらくはこれからもずっとひつそりと出てくるかも知れません（絶対）。

保健室まで間近とこいつといふと聞いたよつに気が付いた。一階の廊下はやけに足音が反響する」と。

昨日は少し違和感を覚えるぐらいのものだったが、癖で運歩法といつ足音をあまり立てない歩き方をしているのに、それでも足音が響いて聞こえるのだから気付いたのである。足元の床を注視してみると、一階全体ではなく、この辺りだけコンクリートとは材質が違うように感じた。

「……こじだけ大理石でも使ってんのか?」

それはなんにせよ、なぜこじだけ床の材質が違つてゐるのかという疑問は、少し考えれば解けた。まさかとは思つたが。

「失礼します」

ノックをし、保健室の戸を開けて中を覗く。さつと見回してみたが、昨日と変わらず人の姿は見えなかつた。

「…………」

そしてなんとなく視線を下に向けると、昨日と同じく掃除用具入のロッカーの周りにはホウキやモップやらが散らばつてゐるのが

見えた。もう昼休みが終わっているので校内清掃の時間だから違和感はないかも知れないが……、と俺はそれを悩むように頬を搔きつつ無言で見下ろす。

「あー……」

昨日とは違つて、俺はここに保険医に用事があるのだ。散らばつたホウキやモップをベッドの下に隠し、誰かが来たときにはバレないよつこにするなんていう善意をするつもりはさらさらないものである。

「…………えーと、その…………開けますよ?」

そう先に断つて、俺は掃除用具入れのロッカーに手を掛けると、ゆっくりと開いていく。

「…………ひ」

開けたその瞬間には分からなかつたが、微かな悲鳴に視線を落とすと、…………目が合つた。

ぱっちりとした瞳は涙で淡く揺らめき、怯えのためか体を縮こませ、頭を抱えてガタガタと震わせている女の人と。

その瞬間。

(な、なんだ……?)

ぞくり、と俺の中のなにかが突き動かされるような感覚に戸惑いを覚える。それは今までにない、初めての感覚だった。

「あー……。あなたが、公卿先生ですか?」

片手で顔を押さえ、一步、二歩とよろめくように後退しながら尋ねると、女性は田を見開き、『あ……』と小さく声を漏らした。

「……あ、君が……久津川、時風……くん?」

おどおどと上田使いに尋ねられ、また妙な感覚に襲われたがんとか耐え、肯定するよつに頷いた。

「あ……。や、やっぱり、そうだつたんだ……」

まるで安堵するよつに大きく息を吐くと、女性はこいつと薄く微笑みを浮かべて立ち上がつた。

(……ああ、確かに)

その姿を見て、俺は成程と納得する。

亞麻色の長い髪をふんわりとした柔かなイメージのあるボヘミアンウエーブにしていて、柔和な雰囲気のある公卿先生に良く似合つていた。大きめなサイズの白衣を着用しているが、それでもスタイルは抜群だと分かるのだから荒波先輩にも引けを取らないナイスバディである。

しかし驚くべきは顔だ。下手すりや中学生に見えるんじゃないかと思うほどの童顔に、白く透き通つたきめ細やかな肌は純粹に綺麗だと感嘆せざるを得ない。その上、大人の雰囲気を醸し出しながらも、子供っぽいあどけなさはまだまだ抜けきっていないよつなアンバランスさは魅力的さえある。

それは確かに、噂通りの美人であることは間違いなかつた。

「え、と……それで、あなたが公卿先生ですか？」

間違いないだろうが念のために最初の質問を繰り返し尋ねる。

「あ、は、はい！ そうです！ ゴメンなさい！」

びくうつ、と体を大きく震わせて身構えるように公卿先生は答えた。そして顔を赤面させると視線を左右に行ったり来たりと迷わせ、うつ向くことで落ち着かせたかと思いつきや、俺の様子をちらちらと正面使いに覗いてくる。

「…………」

どうやら男性恐怖症の中でも対人恐怖症寄りで、症状も軽度のようだな。そう俺は目星を付けると、もつ三歩ほど後ろに退き、改めて自分から名乗つた。

「どうも、澄香に頼まれてやつて來たつ B の久津川時風です。とりあえず、まあ、以後お見知りおきを」

軽く頭を下げるといふと、『は、はい！ よ、よろしくお願ひします！』と深々と頭を下げ返された。恐縮が過ぎるその態度になんとも言えない気持ちになりながらも、頭を振つて速やかに本題へと移行する。

「それでは、話せる範囲で良いので被害状況を聞かせてもらひますか？」

なんか警察の事情聴取みたいだな、と内心苦笑して公卿先生の言葉を待つ。

だが、なぜか公卿先生はじいっと俺を見つめたまま応えようとはしなかつた。どうしたのだろう。まだ何歩か後ろに退いた方が良いのかと考えあぐねていると、よつやく公卿先生は口を開いてくれた。

「……あ、あの、……き、昨日も久津川くん……は、その、保健室に、……来てたよ、ね？」

所々でどもつたりするたどたどしい口調で紡ぎだされたのは、俺の言葉に対する応えではなく、昨日俺が保健室に来たかどうかの確認であった。

「え、ああ、はい。そうですけど。それがどうかしました？」

「あ、その、……た、ただ、……お礼を言いたくて……」

もじもじと人差し指と人差し指を合わせ、だんだん声が尻すぼみになつていったがなんとか聞き取り、疑問符を頭の上に浮かべて尋ねた。

「なんのお礼ですか？」

「あ、あの……昨日、私がロッカーに隠れてたの知つてて、……黙つてくれたよ、ね？」

「……あー。そのことですか？」

男性恐怖症の彼女に工藤はなにかと刺激が強すぎるだらうと思つての、ほんの気まぐれに過ぎない善意だったわけだが。

「……そ、それに、私が慌てて隠れたときこ、散らばつた掃除用具も、わ、わざわざ隠してくれたし……」

「……いやそれは、誰かが来て踏んだら危ないと思つての行動なわけなんですが……」

俺がそう言い訳がましく否定するも、公卿先生は見透かしたようにクスッと微笑を溢した。

「優しいんだね、久津川くんは」

そこだけはどもつたりせず、慈愛に満ちた口調で言葉を紡いだ。

「……そ、それに、その理由だけだと、ロッカーに付けるだけで目的は達せるのに、そうせず、わ、わざわざ『ベッドの下に隠しておけ』って、私に聞こえるように囁いたのは、なぜなの……か、な？」

……………ジッカラバレバレのようだ。

小さな善意といつのは、気付かれるとかなり恥ずかしいものなんだよな。

「……それはそつと、隠れるならうと巧く隠れてくださいよ。そんな雑な隠れ方をしているとすぐにバレてしましますよ」

照れた表情をあまり見られないように背け、善意だなんて柄にもないことをした責任を公卿先生に押し付けるように言った。

「あ、昨日と今日のは特別です！……だ、だって、久津川くんの足音って、その……静かなんだもん」

「…………足音？」

「は、はい。私、足音で男性なのか女性なのか見分ける、特技があるから」

「…………え、じゃあもしかして、一階の廊下の一階の廊下の一部の材質が異なつているのは」

「は、はい……。校長先生が、私のためにわざわざ用意してくれて、

まさかとは思つていたが、やはり足音で人の到来を感知していたよつだ。しかも足音で男女を判別する凄い特技付きで。

人間は目が不自由になるとそれを補おうとして他感覚機能が鋭敏になるので、匂いや気配、歩幅や足音の強弱で人を判別することができるようになるらしい。ならばこれも、男性恐怖症の公卿先生が身を守るために産み出した思わぬ副産物のよつなものなのだろう。

……と言つことはなにか。俺の足音が小さ過ぎるせいでギリギリまで気付けなかつたために、すぐにバレてしまつよつな雑な隠れ方になつてしまつたつてことか？

つまり、俺が善意だなんて柄にもないことをすることになつたのは、初めから俺自身の責任を果たすためのものでしかなかつたとい

うわけか。

「……しかし、校長がわざわざねえ」

確実に裏があつての行動としか思えない。公卿先生が校長の毒牙に噛みつかれないよう祈るばかりだ。

「……それはまあ、善意のみの行動だと願つておくとして。早速本題に入りたいんですけど、よろしいでしょうか？」

かなり遠回りになつてしまつたが、ようやく本筋へと入る。

「はい……」

公卿先生は一つ頷くと、ぼつぼつと語り始めた。

そうして話を聞くところによると、今から半年前にその予兆はあつたらしい。最初は誰かに視られているような感じがするだけの、気のせいだと思える範疇の程度だつたそうだ。実際、ただの自意識過剰ではないか、と気にもしなかつたと公卿先生は言う。もしかして幽霊？ とそんな間抜けなことも考えたこともあつたと苦笑気味に続けた。

でもそれも、一ヶ月も続くと気のせいだと思い込むのも難しくなつてきた。それに、自分が棄てたゴミ袋が次の日には荒らされたり、耳が良いために誰かが後を跟けてくる足音がはつきりと聞こえるので、ストーカーをされていると認めざるを得なくなつたのだ。

そしてつい最近になつて、鍵を掛けていたはずなのに誰かが勝手に家中に入つたような形跡が頻繁に起き、家具の位置が変わった

り下着がなくなったりしたため、仲の良い澄香に相談し、こうして俺に回ってきたというわけだ。

「なるほどね……」

そこまで聞いて、なぜ警察が取り合わなかつたのか納得する。話だけを聞くと、気のせいだと一蹴できるものばかりで決定打に足りないのだ。

警察ではない俺からしたら決定打ばかりなんだけどな。

「……最後に一つだけ、公卿先生に聞きます」

人差し指を立て、俺は公卿先生を見つめる。

「は、はひ！ な、なんでしょうか？」

真剣な俺の様子に声が裏返りながらも強く頷く公卿先生に、たつた一つ、大切なことを尋ねた。

「本当に、絶対に、確実に、 “それは気のせいではないんですね？”

前提の確認。

このストーカー被害を拍子抜けなぐらいあっさりと呆氣なく終わ

うせんための、必要事項の確認だ。

「…………。はい」

間違いがないのか思い出すよつて田を瞑り、一拍置いて田を開くと、力強く頷き、答えた。

「そうですか。……分かりました。では、なんとかしてみるとしますよつてか」

これにて事情聴取は終わりだ。他にも聞くべき!ことはあるのだろうが、そこは警察の領分。任せるとしよう。俺がするのは、ストーカー被害を止めることと、アフターサービスで公卿先生が逆恨みされないようなやり方で必要最低限なことをするだけだ。

「……それでは、失礼しました」

もう一回は用がないので一礼し、保健室から出よつとする。

「あ、…………あのー」

しかし、なぜか切羽詰まつたような様子で公卿先生に止められた。戸に掛けていた手を離していくつと反転する。

「どうかしました?」

「じ、実は、その……、えつと……あの……」

公卿先生は躊躇つよつて言葉を濁していたが、根気良く待つといふと、やがて声を絞り出すよつて言葉を発した。

「…………わ、私も、さつき澄香ひやんに聞いたばかりで、く、詳しここには知らないのだけ……」

さつき、俺が校長室に行つている間に澄香がここに来ていたらしい。そのときに澄香から聞いた話を公卿先生から最後まで聞き、俺は呆れた表情を浮かべたがすぐに苦虫を噛み潰して飲み込んだような表情へと変えた。

「…………あの、バカ」

それだけを呴く。額に手を置いてやれやれと首を振り、大きく息を吐いた。

…………さつきや、もう簡単には終わらせてはくれないよつである。

3.3 『事情聴取』（後書き）

備考：

男性恐怖症

対人恐怖症の男性限定版のよつなもので、男性と一緒にいたり近付かれたりすると強い不安（恐怖）に駆られることから男性恐怖症と呼ばれている。これは心的要因^{トライマ}で発症することが多い。ただ、男性に対する興味があまりない女性にも男性恐怖症と決めつけられることもあるようだ。

なお、恐怖症というのは心理学的・生理学的に異常な反応を起す症状なので、精神疾患の一種として捉えられている。

ちなみに、作中の公卿直実は時風から軽度の男性恐怖症だと判断されていたと思うが、男性が来たら隠れるという行動はそれなりに重度だと思われるのに、自分と普通に会話ができるので軽度ではないか、とまだ仮定の域での判断であるようだ。

この学校の清掃時間は三十分もあるため、残り十分ぐらいになると皆さうしてもダラダラとした動作で掃除をするようになる。それでも真面目な生徒はいるもので、最後の最後まで綺麗に階段を掃除してくれている女子生徒の横を、掃除をサボっている俺としてはかなり申し訳なく思いながら通り過ぎた。

一年生校舎の三階には、生徒会室、放送室、多目的室、生徒指導室といった順に教室があつて、主に生徒会役員が分担して掃除を行っている。一応は俺も生徒会役員なので掃除担当場所があるわけだが、それとは半分関係なく、そこを目指していた。

生徒会室。

そこが俺の掃除担当場所であり、……同じく、澄香の掃除担当場所でもある。

一度足を止め、『生徒会室』と書かれた札を見上げる。これは俺が澄香に書かされたもので、下手ながらも一筆入魂して書き上げた思い入れのある表札だ。当然の疑問はなんで澄香ではなく俺が書いたのかだが、……俺の生徒会での役職が 奴隸 という人権侵害じみた理由に他ならない。

「さて、と……」

軽く息を吐いて、俺は生徒会室の扉を開けた。

やはり、と言つべきか、澄香は生徒会室にいた。こいつの性格からして掃除をサボるわけがないと思い、保健室から出たあと真っ先にここへと向かったのだが正解だったようだ。

ただ、掃除は既に終えているらしく、一番奥の席に座つてなにかに目を通していた。

「なんだ、時風か……」

澄香は少しだけ顔を上げて突然の闖入者である俺を視界に入れると、ちょっと待つて、と言つてすぐに俺に背を向けた。そして天井を見上げ、両手に目薬を差す。それは、目が疲れたときに澄香がするいつもの行動だった。

「……なにしに来たの？」

椅子から立ち上がり、ハンカチで目の回りを軽く拭いながらこちらに体を向け、そう聞いてきた。

その目元は、少し紅い。

「…………」

それだけで、俺には十分だった。

「…………はあ。お前なあ……」

呆れたように息を吐く。なにか言つてやるつと思つてここまで来たのに、それもなんだかバカバカしくなつてきた。

「なによ……」

その俺の態度が余程不愉快だつたようで、すぐに不機嫌そうに眉を寄せた。目が少し充血しているのもあって迫力もいつもより一割増である。

「……といつか時風。あなた、公卿先生に話を聞きに行つてたんじやないの?」

「ああ。公卿先生から話を全部聞いたからこゝに来たんだ」

「え……」

なぜか信じられないといつた表情をして目を丸くする。……しかし、それもすぐにさつきよりも不機嫌な、見よつこよつては不満そうな表情へと変わつた。

「……へ、へえ。よくまあ短時間で公卿先生とお喋りできるようになまになつたわね。女垂らしの才能もあるんじやないの?」この甲斐性なし。見境なしに女に手を出すんじゃないわよ、ロリコンのくせに

「う、ロリコン……?」

なぜ自分がいつも罵られなくてはならないのかが不可解だが、一つ咳払いして氣を取り直す。

「……なあ、澄香。どうして俺がここに来たのか、お前、判るか？」

「掃除？」

「なわけねえだろ」

素で答えた澄香に思わず苦笑を漏らしそうになる。そりや確かにここが掃除担当場所だけさ。

やれやれと首を振つて先を続ける。

「俺は“公卿先生から話を全部聞いたからここに来たんだ”と言つたよな？ だつたら、それがどういう意味なのか察せないほど、お前はバカじやないだろ」

そこまで言つて判つたようすで、苦々しげに顔をしかめ、『時風に言わなきよつて口止したの』……』と小声で文句を呟いた。

「バーカ。なにが口止だ」

すたすたと澄香に近寄り、強めの『ハッパン』を喰らわせてしまふ。

「痛つー。」

両手で額を押さえ、掌の隙間から恨みがましく俺を覗いてくる。その涙目からは非難めいた感情がひしひしと伝わってきたが、どこ吹く風と涼しげに受け流し、腕を組んで詰問するように澄香に尋ねた。

「お前、どうして“盗撮”のことを俺に黙りつとしていたんだ？」

しかし、ムスッと拗ねたように顔を背けるだけで、澄香はそれに応えようとしなかった。……ホント、漢字でも表されるように手の掛る幼い子供のような奴だ。

澄香がなにも言わないのをさつき公卿先生から聞いた話を抜粋するが、どうやら公卿先生は盗撮の被害も受けていたらしい。と言つても、それを知ったのは今日の昼休みになつてからで、複数の男子が集まつて携帯を見ながら興奮していたのを見て、澄香が『群れるな』と注意したことから発覚したそうだ。

そのときの情景が容易に想像できた。興奮している自分の耳元に、氷河期の到来を思わせるような聲音がいきなり飛び込んできたら携帯を落としてしまつのも頷ける。……や、想像できると『ううだけ』自分がされたことがあるからではないのであしからず。

そして携帯を拾つた澄香が携帯の画面を見ると、下着姿の公卿先生の姿を発見し、どうしたことだと携帯の持ち主に詰め寄つたところ、とある掲示板にこの学校の盗撮画像がアップされていることが判つたのだそうだ。

しかもそこでの盗撮画像には公卿先生だけではなく、他の先生や女子生徒の画像もあつたのだと言う。なので、ストーカー被害とこの盗撮は同一のものであるとはハッキリとは言えない。可能性が高いのは確かなのだが。でもそうとは言い切れないのだから難しいところである。

そして、そこでの盗撮画像の中には

「……ねえ、時風」

と、そのとた。くるりと俺に背を向けた澄香が、背中の毛がぞわりと逆立つような冷え冷えとした声音で言葉を発した。

「あなた、水着と下着の違いつて、判る?」

「ん……。……いや」

突然の問い掛けに戸惑つたが、澄香の心情を思つとこの質問の意図は判らんでもない。なので正直な気持ちを答える。下着も水着も、俺には同じように見えるからな。

「せう。……なら教えてあげるけど、女にとつて水着はね、“見てほしいもの”なのよ。……極端な話だけどね。だから女の子は見られてもいいように陰ながら努力をするわけ。それから自分のスタイルに合つた水着をいくつか探し出して、その中でも可愛いと思える水着を選んで、自信を持つて見せられるから人前でも惜し気なく晒せるのよ」

そこで一瞬だけ俺に顔を振り向ける。

「それに水着を褒めてくれたら結構嬉しいものなのよ? ……好きな人なら特に、ね」

「そういや澄香と一緒に海に行つたことは何度もあるけど、水着を褒めてやつたことってないな、俺。……今度機会があれば褒めてやろうかな。

「……だけどね」

澄香の声音が一気に低くなる。

「下着は違うわ。女の子にとつて下着は、『見られたくないもの』なの。下着を見られるのは、言わば裸を見られるのと同義。……これは私の個人的な意見だけね」

感情が高ぶっているのか、少し肩を震わせて話をする澄香。

彼女は今、どんな表情をしているのだろうか。

「私はね、時風。貞操観念が強いと思われるかも知れないけど、自分の裸は好きな人にしか見せたくないの。……一生を、添い遂げる相手にしか。それは下着も同じだけど、別に不慮の事故で見られてしまつたのならそれはそれで仕方ないとは思うわ」

だから……、と机に両手を置き、力を込めるよつて拳へと形作つていいく。

「隠れてこそと人の身体を盗み撮りするような奴は許せないし、好きでもない奴に身体を見られるのは我慢できないの」

「…………… そつか」

俺には女の気持ちは判らない。澄香がどんな気持ちで俺に言葉を向けているのかも判らない。

だけど、

「判つた」

そつ自覚しながらも、俺は言つ。

「判つたから、……もひ、泣くな」

なぜなら俺は、澄香を盗撮した奴が許せないと思つてゐるし、澄香を泣かせたことに対する怒りを我慢できそつにないからだ。

それは確かに**方向性**は違えど、同じ氣持ちに**ベクトル**に変わりないと俺は思う。

「な、泣いてなんかないわよー。」

俺の言葉にすぐに反応し、澄香は振り返ると田薬を手に持つて俺の田の前まで見せてきた。

「！」これは田薬を差したから泣いているように見えてるだけよー。」

ムキになつて俺に詰め寄り言い張る澄香の頭に、軽く手を置いた。

「お前……バカだなあ」

「ば、バカつ？」

「バカだよ」

苦笑し、澄香の頭をポンポンと軽く叩いた。

「……田薬を差して泣いていることを誤魔化せられると思つてゐる
は、お前だけだ」

え？ と良く判りないとこ表情を浮かべる澄香の田元は、未だ
紅い。

それは、涙を何度も拭つていたとこ証拠。

「…………お前なあ、どうして盗撮のことを俺に黙りつとしていたんだ
？」

さつさは思つてくれなかつた質問を再度口にする。

「それは……」

「今度は応えてはくれたが答へ口口じもる澄香。いつ向いて、ちら
りと上田使いに俺を見てくる。

「なんだ？」

俺が促すと、よつやく澄香は答へてくれた。

「…………ストーカーのこと時風に任せたから、これは私がやつて
思つて」

「…………つまり、遠慮してたつてことか」

やれやれと肩をすくめる。変なところで氣を使つ奴だなコイツは。

「今更遠慮するみつな仲じやないだら、俺とお前は。…………お前が困
つてたら、俺は無条件で助けてやるさ。それは今までそうだし、
これからも決して変わることはない」

につ、ヒシーカルに笑つて言い切ると、なぜか澄香は顔を紅くさせた。

なにか不愉快なことを口にしてしまったかと焦つたが、

「で、でも、ストーカーのこと頼んだとき渋つてたじやない」

と、どうやら矛盾に気付いただけのようだ。……それはまあ、澄香ではなく公卿先生だつたから渋つただけなんだけどな。決して口にはしないが。

「それはそれ。これはこれだ」

屁理屈を述べて明言を避ける。澄香は不満そうな顔をしていたが、それ以上の追求はしてこなかつた。

「さて……」

ストーカー被害。

盗撮。

今日一日で二つも面倒な厄介事に巻き込まれてしまつたが、どちらもその気になりや一日で終わらせられるようなものばかり。

ストーカー被害はあることをすれば。

盗撮は心当たりがあるので裏付けを。

ま、盗撮の方は十中八九、学校の関係者だと想つのでそれは澄香と一緒に調べるとして。俺の心当たりが間違っていたとしても別やり方があるし、一日で終わるとは思つ。

「…………どう、どうしてやるかな

誰にともなく、俺は呟いた。

備考：

この物語について・1

皆さんは信じられないかも知れませんが、この物語にも一応の『テーマ』はあります。

そのテーマに沿ってプロットを作り、一応、最終話までのプロットは出来上がっています。そのための伏線もどきも地味に着々と張っています。まあ、回収前提の伏線しか張らないので最後になつても取り残しはないとは思いますが……。

なお、私のプロット作りは単純で、そのストーリーの粗筋を作つたあとに、入れるべき描写や伏線となる単語があるならそれらを忘れないように粗筋の中に加えていくだけです。それからストーリーに肉付きをしていく。ただそれだけですね。

ちなみに、全八話予定なのですが、もしかしたら増えるかも知れませんので気長に待っていてください。

そろそろ本腰入れて行動しようと決めた矢先、早くも出鼻をくじかれることになった。

なんと澄香である。

と言つても、氣を折られたといつより、氣を削がれた程度のものだが。

「……実はね、あなたに盗撮のことを黙つていた理由は、それだけじゃないの」

「は？」

神妙な表情でやつカミングアウトする澄香に、俺は怪訝そうに首を傾げる。俺に遠慮していた、といつ理由の他になんの理由があつたと言つのだらう。

「なんだよ？」

「…………」

「なんだよ？」

急かすように先を促す俺に、澄香がジターとした目で睨み付けてきた。その鈍器のような眼光に圧され、少したじろぐ。

……にしても、女の眼光に怯むなんて、かなり情けないぞ、俺。まあこいつに限っては例外か、と自分に苦笑していると、ようやく澄香が唇を尖らせて理由を述べた。

「……だつて時風、盗撮画像見るでしょ？」

「は、はあっ！？ そんなもん見るわけ…………あっ、いや、その見ることになるけどさ…………」

一瞬で沸点が低くなり、顔を真っ赤にさせて憤慨しかけたが、ハツと気付く。普通の写真でもそつだが、被写体への角度からどこから撮られているのか大体判るものなのだ。もちろん、そのためには撮られた場所を把握しなければいけないので、まずは盗撮画像を見てどこで撮られたのか推理しないといけない。

「そ、それならお前が見て判断しろよ。小学生レベルの空間認識能力さえあればそんなに難しいことじゃないんだからさ

自分では名案だと思ってそう提示したのだが、澄香に呆れたような溜め息を吐かれた。

「……なによ、空間認識能力って

「へ？ バスケの授業とかで習わなかつたか？」

「私、そんなの知らないわよ」

それを聞き、言われてみれば俺も授業で習つたわけではなかつた
なと思い出す。澄香が知らないのは当然だつた。

「前々から思つていたけど、あなたつて妙な知識を色々と持つてる
わよね」

そんな澄香の疑問に、俺は天井を見上げ、『ああ、それはだな…』
…』と思い出すように口を開じてみる。

「『知識は武器』……だからかな」

「……なによそれ？」

不意に脳裏に過ぎよった言葉がそのままポツリと口から漏れ、澄香
が反応する。

「ふん、そうだった。

俺はあいつに、そう教わつたのだ。

「親父の受け売りだよ」

澄香の言つ妙な知識のほとんどは、親父から教わつたものばかり
だ。

知らなくてもいいような知識ばかりで、役にも立たない無駄な知
識ばかりかも知れない。

だが。

知らなくてもいいような知識なんてものはこの世に決してないし、役立たない無駄な知識がこの世にあるわけがないのだと。

嘘だけは言わない親父が言っていたのだから、その通りなのだろう。

現に、知らなくてもいいような知識がこうして役立っているのだから。

……まあ。

つまりは結局のところ。

知識というのはどうでどう活用をせるかなだけで。

知識を披露して役立たせるのも、無駄な知識として永遠に頭の片隅に置いておくのも。

結局は、人次第。

人それぞれの使い途みちがあるというわけだ。

それを今では“知恵”と呼ばれ、辞典でもそう解釈されている。

「知識つてのは所詮は人間相手にしか通用しないもんだ。だからそれを知恵を使って有効に活用することができれば、言葉だけで相手を圧倒することも可能になる。言葉だけで相手を倒す武器にな」

知識があつても知恵がなければ意味がなく。

知恵があつても知識がなければ意義がない。

いくら知識といつ武器があつても、知恵がなくて扱えなければなんの意味がない。逆に知恵があつても、知識といつ武器がなければなんの意義もないのだ。

もちろん俺には両方あるし、それを使いこなすための知能も持ち合わせているけどな。

「平和的だろ？ 言葉だけで相手を倒せるんだから色々と知識を蓄えるのも悪くないよな」

俺なら難しい言葉を並べ立てて相手を煙に巻くのもできぬし、言葉巧みに相手を騙すこともできる。

だからこそ、俺の得意分野だ。

どつちも政治家と詐欺師の常套手段だといつのがなんとも物憂いだが。

「ふーん……。それが、あなたが妙な知識を持つていてる理由なんだ」

納得したように頷いてはいるが、表情は晴れやかではなく曇っていた。おそらく、全然俺の柄に合わない理由の説明に訝く思つてゐるのだろう。

それに、全部が全部、本当のことを言つたわけではないから当然だ。

そしてそう思つていながらも、相手を想つて無理に聞き出そうとしないのがこいつの良いところだ。……うん？ ここは『好い』と著した方がいいだろうか。それとも『善い』『佳い』『雅い』……。どれでもいいか。

「……話はここまでだ」

同時に、これまでだ。

本当の理由なんて、こいつは知らなくともいいことだからな。

「ほら。さつさと女子更衣室に行くぞ。お前がいないと、」

「私は無理よ」

「入れない……って、は？ なんでだよ」

「授業があるからに決まってるじゃない」

無遅刻無欠席無早退。

小学生の頃から現在まで続いている澄香の偉業である。

「優等生かよお前は」

「優等生ですよ私は」

「つこり笑つて優等生スマイルを造る。見事なスマイルのバスだつた。

「……ああはいはいそうでしたそうでしたね。天下の生徒会長様でしたね」

しかし、困った。

「のままだと放課後まで澄香を待たなくてはならない。今の内に確認しておいた方が後が楽なんだが。

「まさか一人で女子更衣室に忍び込むわけにはいかないしな……。下手すりや盗撮犯の前に俺が捕まっちゃう……」

「そうぶつぶつと呟いていると、見かねたのか、澄香がぽつりと提案した。

「……公卿先生がいるじゃない」

「ん? ……ああ、そうか。そうだな」

女性の中で盗撮の被害を受けていると知っているのは、今のところ澄香と公卿先生の一人だけだ。多分協力してくれると思う。それに先生と一緒に女子更衣室に入ることができるので適任だろう。

……だが、まだ最大の難関が残つている。

「あー……、澄香。その、……なんだ」

なんと詰つべきかと、歯切れ悪く言い淀む。

撮られた位置を特定するために画像が必要なのだ。その顔を澄香に伝えようとしているんだがこれがまた言いにくくし言いづらい。

……でも、まさか『盗撮画像を見せてくれ』と幼馴染みの女の子に言ひ日が来るとは思わなかつたな。

「……判つてゐるわよ

しかし俺が最後まで言ひことなく澄香はどひやら理解してくれたようだ。幼馴染みならではの意志疎通。あー、うー、と低く唸つたり、顔を赤めたり青ざめたりさせながらも、澄香は携帯を取り出すと操作を始めた。

そしてかなりの苦渋の表情を浮かべながらも、『い、これなら…』と一大決心したように、くわつ、と目を見開き、『えい！』と自分を突き動かすように小ちく鼓舞した後、送信ボタンを押した。

さうしてしばらくして、俺の携帯からメール着信音が鳴り始める。

「…………」

若干の緊張を澄香に漏りれないようこゝ気を付けつつ、俺は澄香からのメールを開いた。

ナニには、

「…………」

思わず、声が漏れる。

着替えている途中なのだろう。スカートはすでに脱衣していく、ブラウスのボタンを外そうと胸元に手を掛けている状態の画像だつ

た。動画で撮っていたのを静止画にしてみると、少し粗さが目立っている。

だけど、綺麗だった。

ブラウスのボタンを外してはだけられた胸元の下着は、ほとんど両手と長い髪の毛で隠れてはいたが、白い物がちらりと見え隠れしていた。そしてスカートがないため露になつてている下の下着は、撮られた位置からだとギリギリ隠れていた。

だというのに。

裸でもなく、下着もほとんど見えないのに。

……扇情的だった。

とても、目の前にいる女の子と同一人物だと思えないほどに。

「……な、なななに顔紅くしてるのでー。」

堪えきれなくなつた澄香が俺の携帯を奪うように引つたぐる。

少し呆けていた俺は一瞬遅れて『……し、仕方ないだろー。』とようやく反応した。

「こんなの見たら誰だって紅くなるに決まってるじゃねえかー。」

それに知つてる奴のなら尚更だ。

「嫌なら自分の画像を送つてくれんなよー。」

「そ、それこそ仕方なかつたのよー。」

顔を真つ赤にさせ、そっぽを向く澄香。

そして「じによじによもじもじ」と、小さくせりきりしない口調で理由を紡いだ。

「だ、だつて……他の女の……を……やの、……見てほしくなかつたから……」

……？　あまり聞き取りにくかつたが、つまづきのつまづきとか。

他の被害者に悪いと思つて自分を犠牲にした、ということだらうか。あれほど自分の下着を見られたくないと言つていてこいつが、わざわざ「」の画像を選んだ理由としてはそれが妥当だと想ひ。まさか俺になら見せてもいい、だなんて思つはずがないし。

「……そ、それにしても、私のを見て顔を紅くさせたつてことは、一応は私のこと女扱いしていたのね」

と、俺から視線を外しながら独白するよつこ澄香が言つた。

「は？　なに言つてんだお前」

恥ずかしさで思わず漏れ出た言葉だったのか、独り言のような聲音だった。でもその聲を聞いた俺は、首を傾げながらも当たり前のことを言つた。

「お前は女だよ。少なくとも、俺はお前をひやんと女扱いしている

つもりだぞ

それだけを言つて、少し物足りないかなと更に付け加える。

「それに、……まあ、俺だけの意見ではないけど、それなりに魅力的だし、か、可愛い女の子だと思つぞ、うん。幼馴染みじやなかつたら惚れていったところだ」

「うぐつ……！ な、なんか言つていて恥ずかしくなつてくるな」レ。

とまあ、かなりベタ褒めしたつもりだったのだが、『や、そう……？』と微妙な表情をされた。嬉しそうな表情には見えるんだが、なぜか素直には喜べないといった複雑な表情にも見える。

……なにかマズッたか、俺？

「……そ、それじゃあもうすぐ授業が始まるから教室に行くわね」

一つ咳払いして、澄香はそそくわと俺の横を通り過ぎる。

「あ、ああ……」

俺はその背中を眺めるだけしかできなかつたが、扉を開けて生徒会室を出る前に、澄香はぱたりと立ち止まつた。

「……ねえ、時風

さうして首を向けたまま、俺に言葉を投げ掛けてきた。

「…………なんだ？」

俺はその背に向かって、言葉を返す。

そして数瞬の後、

「…………幼馴染みだったら、どうなの？」

と、訊いてきた。

「へ…………？」

「…………くす。なに間抜けな声出してるのよ、バーカ」

最後によつやく俺に顔を振り向けると、冗談っぽく笑つた。

そして『頑張つてね』とそれだけを言い残して、澄香は扉を閉めた。

「…………」

澄香が出ていった扉をしばりて眺め、独りだけになつた生徒会室の中、ボリボリと頬を搔くと、

「…………といへの世」「、元世のへい」、惚れてるよ

昔のままの、俺だつたらな。

そう、苦笑した。

同時に、午後の授業の始まりを告げるチャイムが、鳴つた。

3.5 『知識の使い途』（後書き）

備考：

知識の使い途

使い方によつて色々な形に変化する武器。

それが、知識。

それをどう扱うかは、自分次第。

生かすも殺すも、自分次第。

文字通りの意味でも。

そして。

久津川時風にとつては、

.....。

3 6 『女子更衣室へ行く前に』

そういえば澄香の奴、俺の携帯も一緒に持つて行きやがつたな。そのことによく気付いたのは、生徒会室を出てからだつた。自分の間抜けさ加減に溜め息を吐いて呆れるも、それだけ澄香のあの画像は衝撃的で刺激的だつたわけだと一人納得してみる。

勿論、言い訳なのだけども。

でも問題はない。

さつきのあの画像はしつかりと網膜に焼き付け、念入りに脳に刻み込み、一生忘れない記憶として海馬に記録している。抜かりはない。

ついでにどんな手口で盗撮をしているのかも、被写体に対する角度から十中八九の推測もできている。後は、現場に赴いて物証入手するだけだ。

そのためには……。

本日二度目となる保健室の前で一度足を止め、耳を澄ませてみると確かに、足音の反響が微かだが大きく聴こえた。余韻も僅かに永く残っている。些細な違いだが、公卿先生にはこれだけで十分なのだ

るつ。

それもまた、公卿先生がこの世界で生き抜くために身に付けた防衛能力。

逃げるために身に付けた、特技なのだ。

……いつたい、彼女もどんな辛い人生を経て今まで生きてきたのだろうか。

そう公卿先生の過去に想いを馳せながら保健室の戸に視線を移し、少しだけ苦笑する。怪我以外の理由でここに来ることはあれど、怪我以外の目的でここに来ることにならうとは。いやはや。人生もううだが、人世もなにが起こるか判らないものだ。

.....。

なんで、判らないんだろうな。

幾度となく自問自答してきた疑問に対しても似た苦笑を微かに漏らし、俺はノックをしてから保健室の戸にゆっくりと手を掛けた。

「失礼します」

「あら、久津川くん。いらっしゃい」

「.....」

「澄香ちゃんとは会えましたか？」

「えつ……。あ、ああ、はい。まあ……」

「それは良かつたですね」

「…………」

「どうしたの? まうひとして。まあ、立ち話もなんですから、こ
れから来て座つたらどう?」

「はあ……」

「なにか飲む? と言つても、コーヒーしかないのだけど」

「はあ……」

「久津川くんはブラックは大丈夫かしら?」

「はあ……」

「じゃあ今から煎れますので、座つて待つていてください」

「はあ……」

といった一連を終えて、俺はようやく首を傾げて疑問符を浮かべ
た。

「えーと。

「この人は、誰だ?」

ではなく。

確かにそういう気持ちで一杯ではあるのだが。

……公卿先生、だよな？

という、自分の認識に対する半信半疑からの疑問符だった。

もう一度、今度はまじまじと、ときぱもと「コーヒーを煎れている公卿先生の姿を眺めてみる。

ほんの数十分前にはボヘミアンウェーブだった髪型が、今はなぜかボニー・テールへと変わっていた。それだけで雰囲気が大人っぽいから子供っぽいへとがらりと換わり、まるで同年代のようだと錯覚させられる。彼女が動く度に毛先がゆらゆらと揺れ、胸もゆさゆさと揺れた。

いや待て。

なぜ前触れもなくいきなり胸の描写が出たのかは俺がスケベだからではない。断じて違う。濡衣だ。潔白だと断固抗議する。公卿先生が白衣姿から女性用スーツに転じてしかも前を少しほだけさせているせいだ。

……それもまた、言い訳なのだけども。

そして理知的な眼鏡を掛けているのに加え、さつきの俺との対応から判るように、おどおどとした態度も拙い口調もなく普通に男の俺と接していたので、別人だと勘違いしてしまったのである。

現在進行形で双子説や一重人格説が頭の中で飛び交っているが、振り払いながら手前の椅子に腰を下ろした。

「お待たせしました。どうぞ。熱いので気を付けてください」

「……ありがとうございます」

「一ツコロリと差し出されたカップを一礼して受け取る。焦げたような独特的の芳香^{アロマロマ}が、湯気と共に鼻孔まで流れてきた。

「……あー、……あの、久津川くん。その、聞きたいことがあるのだけど」

「コーヒーを一口含み、苦味や甘味や酸味や旨味や香味や風味が円やかに滑らかに爽やかにブレンドされてとろりとしたマイルドなコクとキレのある味わいに舌鼓を打つていると、俺のすぐ目の前に椅子を引いて座つた公卿先生が緊張したような面持ちでそう切り出した。

その表情は、真剣そのもの。

「なんですか?」

それとなく姿勢を正して先を促すも、公卿先生は真正面から俺をじいっと見つめたまま応えない。

自然、互いに見つめ合つ状態となる。

「…………」

「…………」

チツ、チツ、チツ、チツ、チツ……と時計の秒針の動く音が聴こえてきた。辺りが静寂であることが判る。

つまりは意識が散漫としているほど長い時間が過ぎ、こつまで続くのだろうと若干辟易し始めた頃、よつやへ公卿先生はおずおずと口を開いた。

「…………あの、…………なにか、思ひ出しませんか?」

小首を傾げて、困ったように尋ねられた。

「…………と母されても。

なにを思ひ出せばいいんだ?」

「はあ……。別に、なんにも……」

「…………やつ」

フツ、と色褪せるよつや、公卿先生の瞳の光度が、暗黒を帯びた。

「…………ですか……」

そして肩を落として深い溜め息を吐く。ガックリと落ち込まれたのが傍田でも良く判った。

「…………あ、そうか。」

その挙動から、數十分前に公卿先生と対面したときに感じたものの正体に合点がいったような気がした。

あれは多分、『既視感』だつたのだろう。初めての感覚だつたので正しいかどうかは良くなは判らないが、恐らくはそうだと思つ。

“俺は過去に一度、この人と会つたことがある”。

この俺が、いつ、どこで、なにをして、どうなつたか、なんてことはまるつきり思い出せないが、それだけは間違いないだろう。

そうだとしたら、俺を知つているような、俺を知つていたような、公卿先生に対して覚えていた違和感にも納得がいく。

しかし、だ。

男性恐怖症である彼女が、平然と俺と対応できるのはなぜなのだろうか。まさか不安など抱かせもしないような信頼と信用を過去の俺が得られるはずもないし、それほどのことがあれば俺も覚えていはねばだ。

それとも、俺には記憶すらも残らないような些細な出来事が、彼女にはそれほどの根強い印象として根付いたのだろうか。

どうせ云ひ合ひよ。

俺も親父と同様、“過ぎ去つたもの”には興味がない。公卿先生には悪いが、過去を思い出すことに労力を費やすなんて無意味なことをするほど、俺は暇じゃないんでね。

「あー……公卿先生？」

視線を逸らしながら頑垂れている公卿先生に声を掛けた。両膝に両手を置き、ほんの少し前屈みになつているその姿は、豊満な胸を出張するように強調しているので田のやり場に困るのだ。

「……はい？」

顔を上げ、弱々しく返事をする公卿先生。

「お願いがあるんですが、聞いてくれますか？」

「お願い……ですか」

「はい。実は……」

「言い方次第では変な誤解を与えかねないので、俺の名前……というか今後の人生ためにも懇切丁寧に順序良く説明していく。

盗撮の手口が判つたので現場に物証を取りに行きたいのだが、男の俺が女子更衣室に入るのはリスクが高過ぎるため公卿先生も一緒に来てほしい。

面倒なのでここでは割愛するが、大雑把にまとめるならそんな感じだ。

「」の学校にはなぜか女子更衣室に鍵を掛けるといつ習慣がないので、出入りはそう難しくはない。そのことに（校長的な意味で）作為的なものを感じずにはいられないが……、とにかく、誰にでも犯

行は可能なわけだ。

そして説明を終えた俺と入れ替わるよう、終始聞き手だった公卿先生が、俺の説明を反芻するように開じていた目を開いた。

「判りました。久津川くんが女子更衣室にある下着を盗む手伝いをするばいいんですね」

「コイツなにも判つてねえ！」

「なわけねえだろ！」

変な勘違いどころか妙な勘違いをする公卿先生に怒声を浴びせる。しかし、公卿先生はなぜ自分が怒鳴られたのか判らないらしく、キヨトノとしていた。

「ど、どひしたの？……あ、『めんなさい』下着じゃなくて制服を盗みたかったんですね」

「それも違えよー。そんなマニアックな趣味は持ち合わせていない！」

「？」

「？ どうして制服だとマニアックになるの？」

「知るかんなどー！」

「いやしかし。

確かに疑問ではあるな。

下着泥棒と制服泥棒。やつていることは同じなのになぜか異質な隔たりを感じる。この二つの違にはなんなのだらうか。

まあ、俺には一生判ることはないだらうし、分かるつもつもないし、解りたくもない」とだが。

「久津川くん。そんなに強く否定しなくとも、私は軽蔑しませんよ。男子なんですから、仕方なことです」

「……仮にそ�だとしてだ。制服を盗もうとしているのを判つて、ながら止めずに加担する教師がどににいるかんだー。」

「え？ うるさいますカビ……」

「やつこつこつとを言ひしるたじや……こや、もうこじですか……」

なんだか頭が痛くなつてきた。

「なんなら、私の高校生時代の制服を譲りましようか?」

「いらねえよ！……つてこいつか、まだ持つてゐるのかよー。」

物持ちが良こにも程がある。

「もしものときのために血圧計を保管していました」

「もしものとき……」

一体どこのとおなんだらうか。

「それに体操服もありますよ？」

「え……？ あ、いや、そんな情報もいらねえよー。」

……なぜ俺は、体操服と聞いて一瞬戸惑つたのだろうか。

自分で自分が、恐ろしかつた。

……とまあ、そんなくだらないやり取りを終えて。

公卿先生が完璧に理解できるまで、俺は同じ説明を何度も続けた。

そして、結論に至る。

「……………」コイツはなにがなんでも俺を変態に仕立て上げたいらしい。

3 6 『女子更衣室へ行く前に』（後書き）

備考：

過ぎ去ったもの

つまりは過去のこと。

彼と、その父親の興味がないもののことです。

だからなのか、彼の家にはアルバムはもちろん、写真等も一枚もありません。……既に亡き、母親の写真も当然ながら。

なぜ過去に興味がないかは今後明かされるのでは語りませんが、大した理由ではないので気にしなくて構わないですし、なんの伏線でもないということを先に言つておきましょ。

3.7 『戦争談義』（前書き）

あれ？ いの小説つて「メーティだよな？」

作者ですか頭を悩ませるこの矛盾。いやはや、すみません』『めんな
さい。なぜか戦争談義で文字数を奪われてしましました。
予想外でした。

『ま、生暖かく見守つてやるわ』といつ心優しい皆様がいることを
信じて、次回……いや、次々回で終わらせたいと思います。

この学校の女子更衣室は一ヶ所だけあり、一つは体育館の横、もう一つは職員室の横に備えられている。

一ヶ所だけといつても、体育館の横にある女子更衣室は、体育館と同じ大きさの細長い建物の中に設置されており、そこに全校の女生徒一人一人に専用のロッカーを設けているので不便ではないのだ。

なお、男子更衣室はこの学校には存在しない。その事実を知ったとき、部活をする男子は『これが女尊男卑か……』と、女子との待遇の差に眞涙したという。

そして職員室の横にあるのが当然ながら職員用の女子更衣室であり、現在、俺と公卿先生はそこを目指して歩いていた。

「ねえ、久津川くん」

道中、公卿先生が俺のすぐ隣にピッタリと寄り添つて話しかけてきた。ふんわりとした心地良い香りになんとも言えない気持ちになりながらも、『なんですか?』と先を促す。

「この世の中、どう思いますか?」

「…………」

なんとも、まあ。

かなり漠然とした問い合わせだった。

「……あ、えと、『めんなさい。ええーと……』

でもすぐには撤回して、違う話題を探すように口論が始めた。

……俺と話をしたいのだろうか。

暇潰しだとしても物好きなもんだ、と思いながら公卿先生の言葉を待つ。話をするのは澄香で慣れているし、別に嫌いではない。時間潰しにもなるからな。

「……あの、戦争ってどうして起きたんだと思いますか？」

「…………

「マイツ、話題作り下手だな。

さつきの問い合わせとどう違うんだろうと少し呆れながらも、話題を一生懸命考えてくれた公卿先生を想つて、俺はそれに答へる」とした。

「『えもんが言つては、自分は正しこと思つていいから起つてこなさい』ですよ

「久津川くん自身はどう思つてこなの？』

「バカとしか言えないですね」

それだけ言って、これだけじゃあんまりかなと、公卿先生の難しい表情を見て、溜め息を一つ吐いてそこから更に付け加えた。

「……でもまあ、譲れないもの、といつのはあつたと思いますよ。少なくとも、ね」

「譲れないもの、ですか」

「ええ。自分の国をより良くしたい、なんてどの国も例外なく想つていることですからね。……それが愛国心か野心かは置いといて。悪くしようなんて考えるわけがない。でも昔は、輸入や輸出をしてもどの国も買つてくれないし売つてくれないしで悪くなる一方だつた。だから、略奪するしかなかつたんだしょ」

それが戦争の発端。

そんなことは中学生でも判ることだ。

「……略奪するだけならまだしも、見せしめに虐殺までした昔の人間に對して、俺はバカだと思つてゐるわけですよ」

今の人間が昔の人間を批判しても滑稽なだけだが。

バカバカしいにも、程があるが。

所詮、今の人間が過去から得られる教訓は、反省だけ。

しうすれば良かつたのに、などといつまでも過ぎ去つたことにグ

ダグダと文句を垂れるのは、ただの愚か者か虚け者のせいかである。

「以上が俺の答えですけど、なにか言いたいことはありますか？」

「いえ、ありません」

公卿先生は納得したような表情を浮かべて何度も頷き、否定した。

「…………」

「一む。

澄香だといろいろな角度から斬新な切り口で攻め立てるような反論をしてくるのだが、いつもなにもないと張り合いがないというか物足りないというか。

女子更衣室まだ半分以上距離があるし……。

やれやれ。

慣れといつのも考え方のだな。

そう内心苦笑して、今度は俺から公卿先生に問い合わせを試みた。

「では公卿先生。この日本といつもまた、戦争で数多くの犠牲者が出ましたが、それについてはどう思っています？」

「え？」

俺の言葉に目を丸くして数回瞬かせる。意味が判つてないというよりは、意図が判らないといった困惑を表しているのが良く判る。

「……それは、その、……悲惨、だつたと思います」

絞り出すよじよじやく紡がれた言葉は、その二文字だけだった。

それはやうだらう。

戦争を知らない人間にとつては、この問い合わせに対する言葉は限られてくる。

可哀想、だとか、残念、だとか、悲しい、だとか。

なんとも、心ない言葉だ。

戦争を知らない人間としては、仕方ないことなのだが。

「……そうですね。悲惨、だつたでしょうね。数多くの人が死に、それ以上の人人が嘆き悲しんだ。だから、その悲劇を再び繰り返さないためにも、一度と戦争なんてものを起こしてはいけないんだ」

そこまで言つて、俺は肩を竦めた。

「……と、毎年毎年戦争の悲惨さを伝えるテレビ番組が、八月が近付くに連れて何度も放映されていますけど、その番組を見る度に、俺はいつも思つことがあるんですよ」

「思つ」と……ですか

一つ頷いて、公卿先生に顔を向ける。

「そりやあ、日本は原爆を落とされた唯一の国で、数多くの人が悲惨な死に方をしましたし、それはもう悲劇と言つても差し支えのない出来事だったとは思います。残された人達は犠牲になつた人達のことを悼み、毎年毎年墓前で冥福を祈るのも良しとしましよう」

しかし、だ。

「家族が死んだにせよ。恋人が死んだにせよ。親友が死んだにせよ。いつまでもその死を引き摺り、戦争に対する怒りを抱いている奴らを見る度に、俺は思わずにはいられないんですよ」

顔を険しく歪め、俺は言った。

「被害者面するんじゃねえ」

と、ね。

さすがに、これには言葉が見当たらなによつて、公卿先生は閉口していた。

その間にも、俺は更に言葉を紡ぐ。

「日本だって非武装の民間人を三百万人以上は虐殺してるんだ。それもアジアだけでだ。なのに、日本人は自分達が被害者だという考え方や認識を持つ奴らが多いんですよ。仕方なかつた、そうする他なかつた、なんてふざけた言い訳であろうとか戦争を正当化しようとするとする学者だつている」

それが気に食わない。

気に入らない。

虫酸が、走る。

「映画なんかもい例ですよ。日本製の戦争映画のそのほとんどは、日本が被害者であるかのようにお涙頂戴の悲劇的な描写をしているはずだと思いますが、公卿先生は映画を観てそう感じたことはないですか？」

「……それは、ありますけど。でも……」

「はい。もちろんそれは商売上その方が売れるから仕方ないことが多いんですけどね。誰も、日本が悪逆の限りをつくす映画なんて観たくないでしょ？」

中国辺りなら喜んで観そうだが。といつか創りそつだなあいつら。つてかもう創つていたりして。反日教育ビデオとしてありそうだな。

「……話が逸れましたが、つまり俺が言いたいのは、か

「あ、着きましたよ」

その公卿先生の声に話を中断され、釣られるように公卿先生の視線の先に田を向ける。

「ああ……本当にですね」

『女子更衣室（職員用）』のプレートを見てそれだけを言つ。

……なんだか「」の釈然としない気持ちが。

話のオチを最後まで言わせてもらえたかった芸人もこんな気持ちになるのだろうか。

複雑な気分もある。

まあ、いいけど。

俺もなんで戦争について真面目に語っているんだろうと不思議に思っていた頃合いだつたし、ちょいちょいいんだけどさ。

不貞腐れるようにそんな強がりじみたことで自分を納得させ、仮頂面になつているのを自覚しながらも公卿先生にお願いする。

「では公卿先生、中に入つて、ロッカーの上になにが置いてあるか確認してください」

「え？ 私が、ですか？」

「他に誰がいるつて言つたんです？」

「私はてつかり、久津川くんが中に入るんだと思つていたんですけど」

「……いやまあ、それでもいいんですけど。すぐに済みますし」

ただ……、と女子更衣室の戸を見つめる。

「もしも万が一、中に誰かがいたら言い訳できないですからね。さすがの俺も、『変態』の烙印を捺される危険は冒したくないです」

「あ、それなら大丈夫ですよ。中から気配を感じないので誰もいませんから」

えらく自信満々に公卿先生が宣った。

「…………」

ビビの殺し屋ですかアンタは、というしつこいをしようとしが思い止まる。足音で男女を特定できる公卿先生だと妙に心強い説得力があつたからだ。

「それに私より、久津川くんが入った方がスムーズに事が進むと思いますよ」

「それはそうなんですけど……」

なんだろう。なぜか俺を女子更衣室に入れたいといつ意思があるようと思えてならない。普通、男が女子更衣室に入る姿なんて女性の心情からすると見たくはないと思うのだが。

「まあ、それじゃあ……俺が中に入りますけど、公卿先生は念のために見張りをお願いします」

「……だけ聞くと軽く犯罪臭がするな。

「判りました。誰か来たら『久津川くんが入ってますけど気にしないで下さい』と言付けますので」

「その瞬間、俺は『変態』といつ汚名を背負つて後ろ指を差される人生を過ぐすことになるのですが?」

「……あ、す、すみません。『久津川くんが入つてますけど気にしないで着替えて下さい』と言付けます」

「中に入らせないよー！」

とまあ、こうして。

結局、俺が女子更衣室の中へ入ることになった。

……のだが。

俺が声を荒げて公卿先生に念押しをし、女子更衣室の戸を開けて中に入つた途端

「ど、トキちゃん？」

誰か、いた。

中に、誰か、いた。

それも、俺の良く知る人物だった。

「なにしてるの？」「……、女子更衣室だよー！？」

初めて見るかも知れない、驚いた顔で慌てるその人物の姿を、珍しい、などと感想を抱く余裕など俺にはなく。

終わつちまつたなあ……俺の人生……。

ただ、それだけをまるで他人事のように想うことしかできなかつた。

備考：

戦争談義のオチ

本編での時風のまとめを華麗に中断をしてくれてしまつたのでここに紹介したいと思います。

「……話が逸れましたが、つまり俺が言いたいのは、『加害者であり被害者でもあるのはどこの国も同じことなんだから、自分の国の犠牲者ばかり悼んでんじやねえよ』ということを言いたかつたわけですよ」

まあ嘘なんですけどね。

彼が本当に言いたかつたことは、『犠牲者が出たのは戦争を止められなかつたお前達の責任なんだから、悼むんじやなくて謝れよ』だったのですが、なんとなく言つのを止めて別のことをおうとして中断されたわけですね。だから時風も最後はびくとも良くなつたのでしょうか。

戦争を反対したら殺される、なあ？」と日本語で訳す。ついでに「なぜかい？」
つまりは、その覚悟が無かつたということなのだから。

3.8 『良薬は口でせむ』（前書き）

終わった……ありゆる意味で終わった……。

てか、落ちたな。

うん、墜ちたな。

……ラストの面接で取り戻せるかなあ……。

お久し振りです。ようやく3.8ができたので更新しました。おそらく、今度こそ、次々回には3話終わらせられると思います。

も少しお待ちくださいませ……。

説明タイム終了。

「…………ふうーん。まあ、トキちゃんのことは私も良く知つてゐるつもりだし、信じるけどさあ

ジト目で眼下の俺を見下ろす荒波先輩の表情は呆れ顔であった。俺はそれを正座した情けない状態で見上げ、申し訳なく頭を伏せることしかできない。

「…………でもねえ、どんな理由があれ、女子更衣室に男子が入るのはちょっと感心しないかなあ」

「はい…………。おっしゃる通りであります…………」

荒波先輩の言葉の重圧に申し掛けられるように重々しく頭を下げる俺に、更に重ねるよつに別方向から叱咤の声が被さつてきた。

「そうですよ。もう高校生なんだから、やつて善いことと悪いことの分別はきちんと付けないと」

「…………」

声がする方向に視線で擦るようつに向けると、公卿先生が荒波先輩

なぞ

の隣で腰に手を当てて立っているのが見えた。子供を諭す母親のような表情をしているのがとても憎らしい。

え、なんでアンタがそつち側にいんの？

そう訴えるように非難する表情を造つて半田でじつと見つめる。

すると公卿先生は引き攣つた笑みを浮かべたあと、自分で頭をピンと叩き、舌を少し出して『てへつ』と笑つた。

「…………

不覚にも。

可愛いと思つてしまつた自分が情けなかつた。

「…………トキちゃん」

その低く静かな響きのある声に姿勢をピンと伸ばし、視線を元に戻すと、すぐ目の前で荒波先輩が不自然なぐらいに造られた笑顔を浮かべているのが見えた。

そして次の瞬間には、正座している俺の両肩に手を置き、その行動の意味に俺が疑問に思つ間もなく、ぐきゅう、と握り潰されたような痛みが俺を襲つた。

「…………ツ！？」

声にならない悲鳴を上げて全身を強張らせる。背中を電撃が衝き抜けたような信じられないほど激痛。悶絶寸前の、視界の端が真

つ白になつて意識が飛びかかる手前にまで俺は訳も判らず追い込まれていた。

なにゆえ、こんな所業を……？

掴まれていた手を離されると同時に崩れ落ちるように床に突つ伏しながらも、苦悶に表情を歪ませ、田で非難を訴える。

すると荒波先輩は可愛らしい笑みを浮かべたあと、自分で頭を口シンと呑み、舌を少し出して『てへっ』と笑つた。

「てへっ、じゃねえよー。」

不覚にも。

それも可愛いと思つてしまつた自分が本当に情けなかつた。

それはともかくとして。

ツツツツでガバツと体を起こした勢いをそのまま活かして更に進言する。

「なんなんですかいきなり！ 危うく失神しかけたじゃないですかー！」

「え、失禁？」

「失神だよ！ 肩握られたぐらいで失禁なんかするか！」

失神も普通はしないが。

「ええー？ そんなに痛かつたあ？」

「肩甲骨が碎けるかと思こましたよ……」

「ミシリ、という不安な音が肩の辺りから聞こえたのは氣のせいだと信じたい。……それよりも気になるのは、一張羅の制服なのに強く掴まれたせいでしわくちゃになつているのが目立ち、かなりの不格好になつていることだ。

「あ、…………めんねトキちゃん。確かに制服ってそれしかないんだつたよね」

「この制服が一張羅である」とを思い出したのか、荒波先輩が申し訳なさそうに謝つてきた。

「や、いいですよ

手をひらひら振つて氣にしなくて良いと云ふ。別にこれくらいならアイロン掛けすれば良いだけのことだし、氣に病む必要なんてない。

しかし、荒波先輩は納得いかないような難しい表情を浮かべ、

「……仕方ないねえ」

一瞬、……微かに覗き見せた表情が霞むような満面の笑顔を輝かせ、とある案を提示した。

「トキちゃん、脱いで」

「はい？」

一瞬なにを言われたのか理解できず、間の抜けた表情で首を傾げる俺を無視して、荒波先輩は俺の第一ボタンに両手を掛けると、上から順に外し始めた。

「…………ち、ちょっとー、なにしてるんですか！？」

ようやく我に還ったのが最後のボタンに手を掛けられたときだつた。すぐさま荒波先輩の両手首を掴んでボタンから離させる。

「な、なにするのトキちゃん！？ ダメ、離して！ 私の手を股間に持つてこい！ しないで！」

「なに誤解を招く物言いをするんですか！？ ここだけもし誰かに聞かれたら俺が性犯罪をしようとしているって勘違いされるじゃないですかッ！」

「…………く、久津川くんが性犯罪を…………や、やめなさい久津川くん！ いくらあなたでも、いち教師として生徒が犯罪行為をするのを黙つて見逃すわけにはいけません！」

「アンタ一部始終見てただるうが！」

見逃してないくせに見誤りし過ぎだろー！

「…………って、荒波先輩？ なんか、手が俺の股間にの方に向かって力が込められているような気がするんですが……っ？」

「な、なにを言つてゐるのかなあトキちゃんは……っ？ 私の手を股間に誘おうとしているのよトキちゃんじょり……っ？」

「なんて白々しい……。いや、いいんですよ。別に、触つても。その瞬間、荒波先輩に『痴女』といつ汚名を着せますけどね……っ？」

「ええ……っ？ トキちゃんが『痴漢』といつ汚名を着る間違いじやないかなあ……っ？」

傍田から見ればにじやかに互いを牽制し合つだけの一人。しかしその水面下では、俺の股間を前にした一進一退の激しい攻防が繰り広げられていた。

……なんでこいつなつたんだら？

閑話休題。

「ええーとね、トキちゃんの制服を持つて帰つてアイロン掛けしてあげよつと思つて」

先程の凶行について説明を求めるが、荒波先輩は悪びれた様子もなくニヤニヤしながらやつ答えた。

「それならそいつと先に戻つてくださいよ……」

とりあえず最後のボタンは自分で外し、手持ち無沙汰に制服を片手で持ちつつ疲れたように息を吐く。

「こやあ、なんか面白くつこ。……でも、

「……やが、途端にマニアとしたいやらしげに笑みへと変わる。

「ただ制服を脱がせたりしただけなのにあんなに慌てるなんて……。トキちゃんたらナード想像してたのかしらん? いやらしげねえこのムツツリくんは」

「…………

否定はしない。

否定はしないよ?

俺も、まあ、一応男をやつてるんだし、少しほ、その、あらぬ想像をしてしまったのは確かだ。言い訳はしない。事実である。ああ認めるとも。でもか、仕方ないことなんだよ。それが男の悲しい性さがでもあるんだからさ。

仕様がないんだよ。

仕様もない話だが。

「……でも、迷惑じゃないですか?」

男としての言い訳をしようとする思考を中断して話を戻す。制服を渡すことに渉る俺に、荒波先輩は不思議そうに首を傾げた。

「どうして? アイロン掛けするだけだよ?」

「…………。まあ、そつなんですか?」

荒波先輩の家庭の事情を知っている俺としては、遠慮しておくれべきだと思ったのだが。

家族。

誰しもその関係が良好という訳ではない。愛のある家族があるならば、憎しみしかない家族もあるように。……ただそこにはいるだけの、愛憎もなにも無い家族もあるのだ。

普段からは考えられないが、荒波先輩はそんな荒涼とした家庭にいるらしい。荒波先輩当人から笑いながらなんでもないようになつて教えてくれたが、俺にはそれが諦念だとしか感じられなかつた。

なんとかしてあげたいという気持ちはあるけれど、所詮、俺は部外者。助けを求められていないのに他人の家庭事情に口を挟むほど不粋ではない。荒波先輩も、知つてほしくないと思つてゐるからこそ表面だけで詳しくは話さなかつたのだから。

話を聞いてからは気を使って荒波先輩の住所の近くには行かないようにしてゐるが、俺の家から遠い場所だし、そこまで行くことはないと思つ。

助けを、求められない限りは。

……我ながら、本当に受動的だよな。

「それじゃあ、よろしくお願ひします」

心の中で自嘲しながら制服を荒波先輩に渡す。

「お任せくださいませ」

まるで主人から召し物を頂く侍女のように恭しく制服を受け取る
荒波先輩。

「えい」

床に叩き付けられた。

「えい」

公卿先生に踏まれた。

「なにをするー!？」

事前に打ち合わせをしていふとしか思えないような流麗な動作で
息の合つた暴拳を行う一人にキレ気味で怒鳴り付ける。

「ええーと、つい

「な、なんとなく」

「アンタなら……」

もう溜め息しか出なかつた。

「……つて公卿先生? アンタはいつまで俺の制服を踏み続けるん
だ?」

「あ、わわ……！」

慌てて足を退ける公卿先生。それを憮然とした表情で眺めながら、ふと、荒波先輩もまた俺と同じような表情をして俺を見てくる「」とに気が付いた。

「……なんですか？」

「こやあ、せつまつサアヤんだったんだなあ、と思つてねえ……」

チラチラと俺と公卿先生を交互に見ながらよく判らない返答をされる。

「……にしても、」の人があの公卿先生なんだねえ。……ふーん
……へえ……ほお……」

そしてじりじりマジマジと公卿先生の姿を全身余すことなく眺め始めたかと思うと、

「とつやあー！」

「ひやあー？」

「いきなり公卿先生の胸を驚掴みにした。

「つーん……」は変わってないなあ……」

柔らかさを堪能するように揉みしだきながらそんなことを呟く。恥ずかしげに顔を赤らめて我慢している公卿先生の姿は、男の俺には目に良薬……ではなく毒……いや、でも敢えて正さなくてもいい

のか。

良薬もまた目に苦しだ。

「いや、そこはすぐには変わらないでしょ……」

なんとなく荒波先輩の意図が判り、咳払い一つして顔を背け、そ
うシシコリする。

おそらく、荒波先輩もまた俺と同じように公卿先生の変身に驚いているのだろう。格好が変わっているどころか、男の俺と一緒にあの特徴的な拳動不審をしていないのだから別人だと思うのも当然である。

そう一人で納得して頷いていると、荒波先輩が俺に振り返り、なぜか悲しげな瞳をして俺を見てきた。

「……トキちやんって本当に女優らしの才能があるよね。ニヤニヤ
は『女説し』かな。それとも甲斐性なし? ……でも、ロココノの
くせに見境なしに女の子に手を出のせやめなさいよ」

「乃、口傳、也、」

どこかで似たような台詞を聞いたことがあるだけに、それだけ俺はそう思われているのだという事実に目眩がしそうになつた。

早くこの汚名的なイメージを払拭しなければ……。そう俺は心に決める。しかし、今はまだ分が悪いので先ず話題を変えるべきだろう。

「えー……あー……っ、そ、そつだ。荒波先輩はなんでここにいるんですか？」

授業中の、それも職員用の女子更衣室になぜ荒波先輩がいるのだろうか。すこく不思議である。

「あー、それは担任のリッちゃんに『携帯取つてきて』って言われたから取りに来ただけだよ」

「なんて教師だ……」

ろくな教師がいなこの学校。

肩を落とし、開いている窓から外を見る。ここからだと、……あれ、なぜだろ。一階と二階の違いがあるのに、ここからだと俺のクラスが良く見えた。

高低差の関係だろうか。

それにしても異常だ。

……うん。軽く現実逃避しかけたが、この学校にいる限り、逃げられない現実なんだよなあ。

今日の前に見える現実。それは、南条澄香が工藤荘介の首を絞め上げている衝撃的シーンだった。

3.8 『良薬は口で苦い』（後書き）

備考：

似たような言葉

この物語には、似たような言葉だけど全然違う意味を持つ言葉が数多く出ています。

例えば、今回の話に出てきたこの言葉。

仕様がないんだよ。

仕様もない話だが。

仕様、の後に『が』が付くか『も』が付くかで意味が変わるのです。

『仕様がない』では、始末におえない、うまい方法がない、という意味になります。

『仕様もない』では、くだらない、バカバカしい、という意味になります。

たつた一文字なのに、こうも意味が変わるのでから、やはり日本語というのは難しく、そして面白い！

この小説で判りにくい表現とかを見付けたら、調べてみたらなにか発見があるかも知れませんので、やってみる価値はあるかも?……判りやすくしろよ、と言われたらそこで終了ですけども。

「さて……」

とつあえず窓を閉めて現実から目を背けることにして、俺は公卿先生へと向き直った。

「公卿先生に一つほどお願いしたことがあるんですけど、良いですか？」

「お願い、ですか？」

首を傾げる公卿先生に、『お願い』の内容を説明する。

それを聞き、公卿先生は少し逡巡してから頷いた。

「……判りました。でも、それはなんのためにするんです？」

「もううん、終わらせるためですよ」

最後に校長にも一つお願いしたら、上手くこければ今日中に全て終わらせることができるだろう。そのための種は時いた。あとは、勝手に芽吹くのを待つだけでいい。

「ねね、トキちひさんトキちひさん

荒波先輩がクイクイと袖を軽く引っ張つてきた。

「私にも、なにか手伝えることはないかな？」

「…………ハハ。その気持ちだけで十一分ですよ」

嬉しい申し出だったが、丁重に断ることにした。

「…………そっか。じゃ、私はそろそろ教室に戻るとするよん。それそろコツちゃんも渉れを切らして職務怠慢する頃合いだと思つ」

いやもうすでに放棄してるだろと思いながらも、またねえ、とにかくに手を振つて俺の制服を片手に女子更衣室から出でていく荒波先輩の後ろ姿を見送る。

「…………」

遠ざかっていく足音を聞きながら、俺は荒波先輩に対して僅かに抱いた一つの疑念について思考を巡らしていた。

「…………もしかしたら、荒波先輩は…………。…………」

口ではああ言つていたが、荒波先輩がここにいた本来の理由は。

「…………いや。…………」

フツと笑つて首を振り、思考を中断する。

まあ……それはそれで、嬉しいことなのだろうけど…………でも、

複雑な気分だな……。

それに確定したわけでもないし。これについては、また後日考えてみるとしよう。

結論は後回しにして、今は田先のことについて集中する。

終わりは、もつ田前にまで迫っていた。

……

十八時過ぎ。

そろそろ薄暗くなつてきたこの時間帯に、俺と公卿先生はまるで不審者のことあるマンショソを隠れて眺めていた。

塀と塀の間の狭い路地。手前には電柱が遮るように建つてゐるので絶好の隠れ場所であるここに身を潜める一人の男女。

怪しいだけだった。

妖しい雰囲気など欠片もなかつた。

「あの……」

俺がマンションの出入口を注視したまま微動だにしないので、その間することもなく暇なのか、そわそわと落ち着かない様子だった公卿先生がついに堪えきれず話し掛けてきた。

「なにかお話ししませんか?」

「えーと……今の状況判つてます?」

「……すみません」

少しだけ顔を振り向けてそういつたと、公卿先生はしゅんと頃垂れてしまつた。

「いやまあ構いはしないんですよ。俺も暇でしたし

黙つてじつとマンションの出入口を見ていることに俺も気が滅入つてきた頃だったので、前方に注意を向けながら会話することに決めた。

と、その前に。

俺達がなぜ隠れてマンションを眺めてこることの理由を説明をしておこう。

田の前にある三階建ての古ぼけたマンションは公卿先生の仮住まいだ、一階の一室に彼女は住んでいるらしい。ここからだと、辛うじて公卿先生の部屋の入口が見える。マンションには出入口からしか入れないように塀があるのだが、やろうと思えば簡単に乗り越えられる上に、塀に登ると一階のベランダに手が届くほど塀とマンションの間隔は近い。それにしばらく隠れていて判つたのだが、人気

や人通りも少ないので空き巣や下着泥棒には優良な立地条件だった。

もちろんそれはストーカーにも当たる」とだ。

そして俺は今日もストーカーの犯人は来るだらうと日星を付ける
までもなく日星が付いたので、こうして監視しているわけである。

「それで、なんの話をしまじょうか?」

曲がりなりにも隠れているわけなので声を潜めながら訊ねる。

「では、『Hコ』について話しまじょうつか」

「.....」

戦争の次はエコかよ。

男女の会話として全く色氣のない話題だなホント。

.....まあ、澄香との会話でもそういうのだが。

つてもしかして、公卿先生って話題作りが下手なんじゃなくて澄
香に影響されてるだけじゃなかろうか。

「久津川くんはなにか地球環境に関するエコで心掛けていることな
あります?」

だとしたら俺にも責任の一回はあるかも知れないなど自責の念を
抱きつつも、その問には肩を竦め、口をへの字にして返答した。

「全く無いですね」

「ええ？　HFCに興味とかはないんですか？」

「興味無い」というか……関係無いといつか……意味無いといつか」

「意味がない？」

「はい。だつて本当に意味が“無い”でしょ？」

HFCとは、二酸化炭素の排出を削減することで地球温暖化を防止する目的とした言葉らしいが、俺はそれを聞く度に情けない気持ちになつてくるのだ。もちろんそれは自分に對してではなく、エコだHFCだと口にする奴らに對してだ。

温室効果の一一番の要因は二酸化炭素ではなく水蒸気だし、そもそも二酸化炭素が増えてもすでに飽和状態なので温度が上がることはないということを知らないのだろうか。

そもそも二酸化炭素が増えたのは、地球の温度が上がってきてからだといふの？」

「私は意味はあると思いますよ。HFCをすることで様々な環境問題の防止ができるんですから」

なんかどつかの政治家が口にしそうな」とを公卿先生が言つた。

「例えば？」

「南極の氷が溶けて海面が上昇するのを防いでくれます」

「南極の氷はそう簡単には溶けませんよ。それに例え溶けるほど温度が上がったとしても、その分、南極の中心部の氷は厚みを増すというNASAの研究結果があるらしいですから」

「あ、それじゃあ北極の氷が……」

「コップに氷を入れて水を表面張力の限界まで入れてみてください。氷が溶けても水が溢れたりしません」

「う……。で、ではオゾンホールの拡大……」

「今は縮小しますよ」

「えと、ち、地球温暖化すると……」

「実は良いことでもないんですね。植物は早く生長しますし、全世界での死者も減少します」

「…………」

「あ。あと地球つて三十年周期で温暖化と寒冷化を繰り返してるんですね。三十年前は小氷河期が来るとか騒いでたらしいですし」

最後はほぼ関係ないことを口にしたが、そこまで言つてようやく公卿先生が静かになつていることに気付いた。

「ヤベヒ……ちょっとやり過ぎたかな。

相手の知らない知識を無闇矢鱈に披露してからかう俺の悪い癖だ

つた。自重して澄香にしかしないつもりだったんだが、公卿先生が新鮮な反応をするのでついついやってしまった。

やつぱり、あつそう、でスルーする澄香より、ムキになつて色々言つてくる相手の方がからかい甲斐があるからなあ。食堂のば……お姉様然り。

そろお、と後ろをチラ見して公卿先生の様子を確認してみる。

怒つているか、もしくは拗ねているかのどちらかであろうと、俺の予想に反して、公卿先生は感心したような表情をしていた。

「久津川くんつて凄いですね……」

ほうつ、と息を吐くようにそれだけを言つ。尊敬の眼差しをも向けてくるので、俺はすぐに顔を前方に戻した。

やり辛いな……。

澄香といい公卿先生といい……普通、からかわれたら嫌になるもんじやないのかよ。

そう愚痴を言いたくなるが、……どうやらその前に、奴さんが来たようだ。

俺は唇の前に人差し指を置いて公卿先生に静かにするようにジェスチャーすると、マンションの出入口に近付こうとする男の姿と一緒に視認する。

その人物とは。

「……え？ 詫間さん……？」

公卿先生が驚きの声を静かに上げた。

「どうして、詫間さんがここに……？」

「そりや、あいつがストーカー野郎だからでしょうね」

香氣な表情で警戒心なくやってきた詫間鑑孝を見て呆れたよつて言つ。

それに今までの登場人物の中では怪しいのは限られてるし。

とまあメタ的な感想は置いといで。

公卿先生がじばりく帰つて来ないことを知つては安心しているのだろう。詫間はコンビニに行くような軽い感覚で来たような感じだつた。

俺が公卿先生にしたお願いの一つに、『明日から休みなので帰つたらすぐに泊まりに出掛けたとこを職員室で話題にしてほしい』と頼んでいたのだが、あつたつ過ぎるほど引っ掛けってくれたようだ。

詫間は監視されてこることで付くことなくマンションの中へとおや。てつきり塀の上に登つてベランダから侵入するかと思いきや、生意気にもちやつかり合鍵を作つてはいるようである。

「く、久津川くん！ 詫間さんが部屋の中へ……！」

「まあまあ。落ち着いてください」

当人からすれば落ち着いていられる状況ではないだらうが、ここは一先ず抑えてもらつて、俺は携帯電話を取り出すとある番号へと掛けた。

「あ、もしもし警察ですか？」 県 市 のマンションの近くに不審者が彷徨いてるんですけど、すぐに来てくませんか？」

もちろん110番である。ちなみに近くに交番があることは確認済みだ。パトカーに乗つてくるとは思わないが、乗つてきたとしてもさすがにサイレンを鳴らしあしないだらう。

それからは流れるように事が進んだ。公卿先生には引き続き隠れてもらつて、数分後にやつてきた一人組の警察官には俺が一人で説明した。マンションのあの一室に不審者が入つていつたところを見たと説明すると、一階に続く階段と三階に続く階段に警察官が隠れ、詫問が一応の警戒をしながら出てきて扉を閉めたところで警察官が挟むようにして逃げられないようにしてからの職務質問。

そのときの詫問の遠目からでも判るほどの青ざめた表情が傑作だった。もしかしたら下着の一着はくすねているかも知れないな。

というわけで。

「これにてストーカーの件は万事解決ですね」

なんとも呆気ない幕切れである。

「えつ、お、終わりですか……？」

予想していた結末と違っていたのか、公卿先生は肩透かしを食らつたような、納得できない表情をしていた。

「ええ、そうですよ。警察が来て、詫間を不法侵入の現行犯で逮捕。余罪で下着泥棒、それにプライバシーの侵害もありますかね。その他諸々込みで刑期三年以上は確定でしょう。罰金は払えないと思いますし」

警察官と一緒に詫間が出てくる前に、公卿先生との場を離れながら言ひ。

「高校教師が同僚の女性教員の部屋に不法侵入して下着泥棒をした。うん。マスコミ共が好きそうなネタですね。実名が出るかどうかは知りませんけど、少なくとも市内には広まるでしょう。詫間鑑孝が下着泥棒をしたってね」

ストーカー行為だけでは飽き足らず下着泥棒をした犯罪者。

そんな見解を成されるだらうな。

「良かつたぢやないですか公卿先生。先生を困らせていたストーカー野郎は、学校からはクビになり、出所しても就職するのも困難だろうし、頼みの親にも蔑まれる人生を、これから先、送ることになるでしょう」

うん。

丁度良い。

犯罪者には至極妥当な人生だ。

「……で、でも、それでは詫問さんが可哀想じやないですか？」

「…………なに、言つてゐんですか？」

詫問の未来に想いを馳せて同情しているのか、甘いことを抜かす公卿先生に険しい視線を向ける。

「罪には罰。罰には 制裁、が必要なんですよ」

だから、ストーカー規制法という罪が軽い上に三度も待たなければ捕まえることができない回りくどいやり方を則らなかつたんだ。

罪にはそれ相応の罰。

犯罪者には相応しい制裁じやないか。

「それに、だからこそ、この言葉があるんじゃないですか」

公卿先生が息を呑んで俺を見る。

はたして、このとき浮かべた俺の表情は、どんな凄絶な笑みを浮かべていたのだろうか。

「 因果応報、つてな」

備考：

因果応報

意味としては、『善い行いをした人には善い報い、悪い行いをした人には悪い報いがある。過去および前世の因業に応じて果報がある』という意である。

そして因果の道理は大きく三つに分けられる。

善因善果。（善を行えば善い結果が返る）

悪因悪果。（悪を行えば悪い結果が返る）

自因自果。（自分の行いの報いは自分に返る）

の三つである。

だが今の世の中、善を行っては悪が返り、悪を行っても善が返ってくることさえある。

自分が行つた報いだけは当然、自分にしか返つてこない。それはただの自己満足ではあるが。

しかし。

久津川時風は信じていることが一つだけある。

例え、悪い行いには善が返ってきたとしても、いつか必ず、絶対に、報いを受けるときが来ること。

3 10 『恋れぬ恋に興味のない末路』（前書き）

皆さん！

おかげさまで昇格試験の結果は無事に合格…

イヤッ ホウ！

さて、……強制的ヒヤヒヤされたの血口唇発を終わらせてやつ。

夜遅くまで部活に明け暮れていた野球部の胴間声も静かになり、そろそろ学校も施錠を始める時間帯になつていても関わらず、俺は学校のとある一室にてのんびりとパソコンを弄つていた。

カチ、カチ、とマウスをクリックする手を止め、顔を上げて出入りの戸に手を向ける。

じりじり付いてくる足音に気が付いたのだ。公卿先生でなくとも、夜の閑散とした校舎に響く足音ぐらいなら誰でも判る。

そして足音の主が戸を開けると同時に、俺は立ち上がりてこいやかな笑みを浮かべて出迎えた。

「ジーもジーも、お待ちしてましたよ」

すると、中背中肉の見るからにカツラと分かる頭をした四十過ぎの男、吉良吉良よしらよしらが怪訝そうに眉をしかめた。すでに帰り支度は整えていよいよ、いつもの文物のバッグを片手に提げている。

「……待っていた？ 私の記憶が正しければ呼ばれた記憶はないはずだが」

「ははは。そりゃあ、俺も呼んだ記憶がないからその記憶は正しこ

ですよ

「ど」となくバカにしたような聲音に氣付いたのか、吉良は不機嫌そうな表情を浮かべて俺を睨んできた。

「ところでキミは「」でなにをしているのかね。生徒の下校時刻はとにかく過ぎてるわい。さつわと帰れ！」

苛立つた感情を隠しもせぬ語尾を荒げる吉良。今日いきなり学校の施錠係となつたことも不機嫌の要因の一つだ。俺は氣にもせず、にこやかな笑みを崩すことなく応対する。

「まあまあ。そう怒らないでくださいよ。吉良先生に聞きたいことがあつてこつして待つていたわけなんですから」

「……聞きたいこと？」

「はい。この学校の女性教諭と生徒の、盗撮画像、が流出しているみたいなんですが、そのことを吉良先生は知っているのかどうかを、ね」

「…………はて。私は初耳だが」

「白々しいハゲだな。

素つ惚ける吉良に俺は顔には出でず心の内でさう吐き捨てる。盗撮画像を一拍間を空けて強調するように言つたときに、吉良の眉がピクリと上がつたのを俺は見逃していない。

「吉良先生。俺ってさ、犯罪者つてのがマスクの次に大嫌いなん

ですよ。その中でも隠れてこそこそと盗み撮りするような奴は不愉快極まりないんです。まるでゴキブリのようでかなり不快に感じるんですよね」「

普段は田に付かないゴキブリだが、いると判れば途端に嫌悪と不快を催すのと同じだ。

隠れているだけでどこかにいるのかも知れないと思つだけでも不安なのに、実際にいると判つたときの嫌悪。不快。

盗撮されたと知つたときの女性が受けれる嫌悪と不快、そして恐怖は計り知れない。

「だからそんな奴は、一生涯、人目に付くことなく隠れてこそこそとした人生を送るのが相応しいと俺は思うんですけど、先生はどう思います?」

その俺の問い掛けに、吉良は空々しい相槌を打つて肯定した。

「しかも、その盗撮の犯人というのが、どうもこの学校の関係者らしいといつ噂んですよ。吉良先生、なにか心当たりはありませんか?」

「私は知らんぞ」

「本当ですかあ?」

「……なにが、言いたいのかね?」

嫌味たらしの俺の口調に敏感に反応する吉良。俺は笑みを崩さな

「まま、しかし冷ややかな目を向ける。

「いやあ、実は俺、アンタが女子更衣室に入つてぐのを、みちやつたんですよねー」

「…………バカバカしい。なにかの見間違えではないかね」

付き合つていられないと言つように鼻で笑つたが、その表情は若干強張つているように見える。

「見間違え。なるほど。見間違え、ですか。確かに、その可能性も否めないですよね」

俺は腕を組んでうんうんと何度も頷く。

「でも、それは否めない、つてだけで、アンタへの疑いが晴れるわけではないんですよ」

さでさでじたものか、このままだと平行線を辿る一方だ、と困ったような表情を造り、悩む仕草をした後、ぱつと、わざとらしく閃いたような表情を浮かべて手を叩いた。

「ああ、そうだ。アンタが提げてあるそのバッグの中身を見せてくれたら、俺のアンタへの疑いが晴れるかも」

「なつ……、な、なにを言つて……」

「…………」
さうやく見せたハツキリとした動搖。なんの脈絡もなくバッグを話題に出されたため、不意を突かれて焦つたのだろう。

「おや。なにか問題でも？」

「大有りだ！ なぜお前に見せなければならん！」

「見せてくれたならアンタを疑わなくて済むからですよ」

「それはそもそもお前の見間違えだろ？！ なのにどうして私がそんなことをしなければならんのだ！」

「うーん。そんなに嫌なら、警察に連絡して俺の代わりに調べてもどうしてしましょうかね？」

「け、警察ー？」

「はい。その場合、バッグの中身どうか家宅捜査までしてもらいますけど」

「そ、それだけはやめてくれ！」

「どうしてですか？ なにも疚しいことがないのなら別に良いじゃないですか」

「頼む！ 救してくれ！」

「きなり土下座をして懇願してくる吉良。……え、もうっ、折れるのはえーなコイツ。意図して雑な追い詰め方をしたのに意味がないな。

……いや、違うか。

“バッグの中に右手を入れた状態”で床に額を擦り付けるような土下座をしている吉良を見下すように見下ろし、俺はやれやれと肩を竦める。

「……あのさ、俺が赦す赦さないの問題じゃないんだよ。アンタが赦されるか赦されないかの問題だろ。赦しを乞う相手を間違えてんじゃねえよ」

「これは加害者と被害者の間の問題だ。部外者である俺に赦しを乞うのはお門違いにも程がある。

「それに残念ながら、俺には個人的にアンタを赦せない理由があるんでね」

そもそも「コイツが俺に赦しを乞うのはお門違いどころか大間違いなのだ。

俺が、コイツを、絶対に赦すわけがないのだから。

なぜなら、

「　てめえ、よくもあいつを泣かせやがったな

澄香を泣かせた。

ただそれだけの、十分過ぎる理由。

それが俺の怒りに火を灯し、激情となつて燃え盛つてゐるのだ。これまで笑顔を造つてゐた表情は崩れ、怒氣を孕んだ歪んだ表情を浮かべて、吉良の丸まつた背中を睨み付ける。

「いつまで下手な芝居を続けてんだ、てめえ。さつとそのバッグの中に突っ込んだ手を出して、顔を上げろよ」

俺が低く唸るように言つて終ると同時に、ガバッと吉良の顔が上がつた。田は狂氣を表現するようにギラギラと鈍く光り、犬歯を剥き出した形相で俺を睨み返してくる。

そしてバッグの中から出したその右手には、……なにやら黒い塊のようなものが握られていた。

パツと見は電気ショーバーのようにも見える形。しかし、その先端には剃刀ではなく、一つの突起物があるのみ。

「スタンガンか……」

テレビでは何度か見たことがあるが、いつして生で見るのは初めてだった。

「それを出したってことね、……つまり、どうするつもりだ？」

「……それは氣絶した後のお楽しみだ」

これ以上言つたがないとでも言つよつただけを口にして、ニヤリといやりしい笑みを浮かべて、吉良はゆっくりと立ち上がる。

おや、俺が油断して近付いてきたところで使つもりだつたのだろうが、予定が外れたため実力行使に出るといつわけか。単純だな。

溜め息を吐きつつ俺がその後ろの出入口の戸にすりつゝ一警すると、その戸線の先に気付いた吉良が悪役然とした口調で先回りするよ

うに言つてきた。

「言つておぐが、私は学生の頃に柔道を習つていてね。黒帯をも取得している私から逃げられると思つたな」

それを聞いて。

「…………」

俺の目が、すう、と細く据わつていいくのが判る。

「……精力善用、自他共栄の武道をやつていながら、てめえみたいなクズが形成されるなんてな」

尚且つ、それを脅しに使つてへるとは。

「救えねえな……」

俺が言えたもんじやないが、武道家の風上にも置けないクズ野郎だ。

「救えねえよ、アンタ」

俺と吉良の間にある障害物は、パソコンを並べて置いてある長机

だけ。

それを、

「よ、と」

俺自らから乗り越え、前に出る。

そして、長机の上に腰掛け、相手を見据えた。

「…………？」

その俺の行動に、意味が判らないといった表情で訝しく俺を見てくる吉良。まるで余裕な俺の態度に警戒しているのだ。

吉良が動き出す前の今の中に、俺は静かに『詰め』へと移行する。

「……そつこえほ、吉良先生。アンタ、そつそ疑惑に思わなかつたんですか？」

「あ…………？」

突拍子もないこの質問の意図を理解できず、一瞬困惑を見せる吉良。

「俺は言つましたよね？ アンタが、女子更衣室に入つてくれるのをみた、と」

「ここまで言つても気が付かない吉良。

仕方なしに、俺は親切に説明する。

「おかしいでしょ。普通、アンタが女子更衣室に入つて“行く”的を見た、って言うのが正しいですよね？ さっきの言い方だと、まるで俺が女子更衣室にいて、アンタが入つて“来る”的を見た、ってことになるじゃないですか」

そこまで聞いても、吉良はまだ気付かない。

だが嫌な予感はするのか、額にうつすら汗が浮かび上がっている。

「さて。それは俺の言い間違えなんでしょうか？」

勿論、違う。

言い間違えではない。

ただ、言葉じや判りにくいけどな。

「俺はさ、先生。アンタが女子更衣室に入つて来るのを“観た”んですよ。この“ビデオカメラ”的映像でね」

吉良からは死角になつて見えなかつたであるビデオカメラを手に取り、それを吉良に見せる。

「な、なに……？」

狼狽^{わいき}える吉良を心の中で嘲笑いながら先を続ける。

「アンタのやり口と一緒にですよ。その女物のバッグの中に隠したビ

「デオカメラで、ロッカーの上から盗撮していたんだろ？ 勝手に人のバッグの中を見る人なんて、そうそういないですか？」

まあ前準備で、一ヶ月ぐらいは様子を見たかも知れないけど。もしかしたら興味本位で手に取る人もいるだろ？し。ロッカーの上に置いてある日と置いてない日と分けたりとかしたら、他の誰かの荷物だと自ずと勝手に認識してくれる。

「アンタもまさか自分が盗撮されているなんて露ほども気付かなかつただろ。アンタのそのバッグのすぐ隣に置いてあつたのにな」

実は公卿先生にしたお願いは四つ。一つ目は職員室での嘘の話題。二つ目は公卿先生のバッグを貸してもらつこと。三つ目はパソコン部の先生（ ）からビデオカメラを貸してもらつこと。

そして最後の四つ目は、他の女性教諭に女子更衣室で着替えをしないようにお願ひしてもらうことだ。

まあそれは無理だつたので、吉良のバッグを持ち出してから着替えてもらつて、それからバッグを元に戻すことになったのだが。

それから公卿先生のバッグを横に倒し、黒い布でレンズ以外を覆い隠して設置した。吉良が気付かずに意氣揚々と女子更衣室に入つて来た様子と、中のビデオカメラを愛しそうに取り出しているところをバツチリ捉えている。

そして一時間前、吉良が女子更衣室を退室してからこのビデオカメラを回収し、こうしてこの教室……パソコン室に持つてきたわけである。

それから施錠係である吉良がやって来るまで、ここに準備していただのだ。

「ふ、ふん。それがビデオした。そのビデオカメラを処分すれば済む話だらう」

そう言って一歩踏み出してきたところで、俺は右手を突き出して制止する。

「まあまあ待ってくださいよ。……俺がなんでわざわざそんな話をしたのか、まだ判らないんですか?」

「…………」

吉良もそれが気になつてゐるのだろう。この状況下で、わざわざ説明する俺に対して不安を感じてゐるのが見て取れる。

俺はその姿を冷たく眺め……。

『HHS』に入った。

「…………『YouTube』って、知っていますか?」

「…………?」

首を傾げる吉良。俺は答えを聞かず、先を続ける。

「良いですね、あれ。誰もが簡単に動画を投稿できる上に、閲覧できる。それも、全世界規模で」

そこまで言つて、俺はパソコンの画面をくねくね回転させて、吉良に見せた。

「題名は、『激撮！ 女子更衣室に巢食ひゴキブリ』です」

俺は暗く笑い、カチ、とマウスをクリックした。

そして流れる映像。

それを観た吉良の瞳が大きく見開かれていく。

「あ、ああ、ああああああああああああ……！」

愕然と、田の前の現実に押し潰されていく様が、そこにはあった。

……この映像が全世界に流れるということは、当然誰かが観る。そして思つ。これはなんなのかと。

その先からはどうなつていいくのか。

それは、明日になつたら判るだらう。

責め、土氣色へと変わつていいく吉良の顔を無感動に眺めた後、俺は思い出したよつににつこり笑みを造つて、冷酷に告げる。

「泣いて喜べ先生。アンタこれから先、一生ゴキブリみたいな人生を過ごせることになるんだぜ？」

「キサマアアアアー！」

我を忘れて突っ込んでくる吉良。俺は立ち上がりと、吉良の伸ばした手を冷静に見定め、俺の間合いに入つた直後、その手を蹴り上げた。

簡単にすっぽ抜け、上空へと舞うスタンガンに気を取られている間に、吉良の股間を回じく蹴り上げる。

「が……あつ……ー」

そうして股間を抑えて前屈みになつたところで、更に顎へと蹴りを打ち、

「…………」

……込むのをやめて、吉良の顔を避けて頭の上へと伸ばした足を、頭頂部に向かつて踵を落とした。

そして倒れて悶絶している間に、俺はスタンガンを拾い、吉良の首筋に押し当てるた。

「じゃあな、先生。　アンタもせいぜい、絶望の淵で息絶えるんだな」

それだけを言つて、俺はスイッチを押した。

白眼を剥いて氣絶する吉良を見下ろし、俺はゆきくつと息を吐く。

「やれやれ。初段持ちが簡単に冷静さを失うなよ。鍛練が足りねえ
な」

動画を投稿したのはさつきなんだから、すぐに削除すれば事足り
るだろ?」

「……そもそも、投稿すらしていられないわけなんだし」

さつきのはただ映像を流しただけだ。さすがにそこまでするとこ
の学校のイメージが著しくダウンしてしまいうからな。それに気付か
なかつたコイツは本当にバカだと思つ。

「まあ……」

俺は氣絶している吉良の顔を、それこんどゴキブリを見るような目
付きで呟く。

「……このあと色々と工作して、コイツにはゴキブリのような人生
を送りせるけどな」

学校のイメージを損なわせず、コイツのみを苦しめるためのお願
いを、すでに校長には言つてある。向こうは、一応は利害が一致
しているからな。

「さつなれば、コイツが今日いきなり施錠係となつたのも、その一
貫だ。」

「あー、…………始めるか」

これから行つ裏工作を、俺は語るつもりはない。

そのことでコイツがどうなつてこゝのかも、また。

「ヤキブリの末路など、誰も興味はないだろ?」

……
……
……
……
……
……
……
……

夜の十時。

クルルちゃんを寝かせ、俺もそろそろ寝ようと同時に携帯の着信音が鳴り響いた。

誰からだろ?と携帯を見ると、電話番号を表示しているだけ。

「『』のパターンは……

嫌な予感だけしかしなかつたが、仕方なく電話に出ることにする。

「……もしもし」

『あ、久津川くんですか?』

『ん? 『』の声は……。

「ああ、はい。そうですけど……えっと、公卿先生ですか?』

『はい、そうです。夜分遅くに申し訳ありません』

「や、それはいいですけど……あれ？　あの、どうして俺の電話番号を知ってるんです？」

『…………』

な、なんだ？　この電話越しにも感じる重苦しい空氣は？

『……久津川くんに言いたいことがあってついでに電話を掛けたんです』

公卿先生は答えずに先を進めた。

俺も追求するのではなくしてそのまま先を続けてもらひ。

『今日話した工口についての会話で、久津川くん、嘘を言ったですよ』

「へ？」

責めるような聲音ではなく、拗ねたような聲音で言つた公卿先生。俺は嘘を言った覚えがないので首を傾げた。

『ほり、地球温暖化が進むと良い」と呟くじつで言つてたじやないですか』

「ん……ああ、なるほど。そういうことですか」

俺は得心が行つて何度も頷いた。

「つてことはつまり、調べたんですか？」

『そうですよ。気になつて調べてみたら悪いことばっかりで、久津川くんが言つてたことと全然違うこと書いていたからビックリしましたつ』

「……ぐ。ははははつ」

怒つているようだが、なんだかとても可愛らしい聲音なので、失礼ながら堪えきれずに噴き出してしまつた。

『ど、どうして笑つんですつ？』

『いや、ははつ。すみません。まさか調べるとは思つていなくて』

『むう……。笑い事じやないですよ』

「ははははつ」

なんといつか。

なんだらう。

なんか、嬉しいな。

「Jの世の中には、まだまだこういう人がいるのだと感つと。

「あー、へへへ。その、笑つてすみません。でも、俺が言つたこ

とは嘘ではありますよ』

『え？』

『俺のはいわゆる、『否定意見』ですか？』

『否定意見？』

「はー。……俺はですね、この世の中のあらゆる物事にせよ、肯定と否定が出来ると思ってるんですよ」

『はあ……』

『せなりな話に公卿先生が電話の向こうで首を傾げているのが判る。』

「まあ、やつ思つているだけなんですか？」

『え、ええー？』

ガクリと前のめりになる公卿先生を想像し、俺は笑つて『おやすみなさい』と言つて通話を切つた。

これ以上話すと長くなるし。……まあ、また、次の機会があったとしたら話すとしよう。

正直、眠いしな。

そして俺は意気揚々とした気分で床に就いた。

今日は良い夢が見れそうである。

3 10 『忘れるほどに興味のない末路』（後書き）

俺は本当に情けなく、愚かな人間だ。

自分のことばかりを考え、クルルちゃんのことは二の次で……。
彼女の気持ち、想いにまるで気付かなかつたのだから。

次回、新米パパ奮闘記——親子の絆編——第4話。

【家族】

甘えていたのは、俺の方だったのだ。

先刻まで続いていた母親の苦しげな呻き声が静かになり、代わりに誰かの泣き声が聞こえてきたので、父親の背に隠れて目を背けた俺は恐る恐ると顔を覗かせた。

まず最初に見えたのは手術台のような物の上で横たわる母親の顔。さっきまで浮かべていた苦悶の表情とはまるで違い、優しく慈愛に満ちた、安らかな笑みを浮かべている。

その傍らで、助産師の女の人気が赤黒いにかを持ち上げているのが見えた。赤くて猿みたいな生き物。ああ、だから赤ちゃんのかど、なんとなくだが、それがなんなのかすぐに理解できた。

その赤ちゃんの足を助産師の女の人気が片手で持ち、逆さまにぶら下げ、もう片方の手で赤ちゃんの背中辺りを何度も叩いている。

それを見て俺は、痛そうだなあ……あんなことされたら絶対泣いちゃうだろうなあ……、とぼんやりとそんなことを思っていたと思う。

でも、泣いているのは赤ちゃんではなかつた。

泣いていたのは、女の方だった。泣きながら、赤ちゃんを何度も何度も叩いている。

それでも赤ちゃんは泣く」とも、目を開けることもなく、静かに眠つたままだつた。

赤ちゃんがなかなか起きないからか、女人人は次に幸せそうに眠つてゐる母親を起こそうと、必死な表情で呼び掛け始めた。

顔は涙でぐしゃぐしゃで、発する声には力がなく、それはもはや悲痛な叫び声にしか聞こえなかつた。

そんな光景を、俺はただ黙つて見ていた。

なにが起きているのか、幼い俺には理解が及ばず、どんな感情を抱けばいいのか判らなかつたから。

眠つてゐる母親。

眠つてゐる赤ちゃん。

そんな二人を必死になつて起こそうとしている女人。

そして　呆然と立ち尽くしたまま動かない医師。

なにも判らなかつた。

なにも、判りたくなかつた。

だけど。

ふと隣を見上げると、父親が静かに涙を流しているのを見て。あ

あ……母さんは死んでしまったんだな、と、なんだか悲しくなったことを覚えている。

……………

……良い夢、見られると思ったんだけどな。

眠たげに田元を擦り、伸びをする。そして体を起こして首を振ると、……俺は大きく溜め息を吐いた。

ドラマや漫画などで何度か見たことがあつたが、こうして自分が昔見た場面を夢で再び見るのは初めての経験だった。でも、どうせなら良い夢を見てくれたらいいのと思つ。

「これではただの悪夢だ。

「あー……」

朝から気が重くなるのは勘弁なので、なにか楽しいことでも思い出そうとしていると、ふと視界の端に映る携帯に意識が向いてしまい、更に気が重くなってしまった。

昨日、夜遅くに家に帰つてくると、郵便受けに自分の携帯が粗雑に放り込まれているのを見て、澄香がわざわざ持つてきてくれたのかなと思う前にいそいそと受信メールをチェックしたのだが、やはりと言つべきか、澄香のあの画像はメールと共に消去されていた。

だつたら最初から送つてくるなよ！ と憤慨して後悔する自分を思い出し、かなり情けなく感じるものも、自分が正常であることを認識できたので良しとしよう。

……最近、澄香だけではなく荒波先輩にもロリコンと言われているので、自分はもしかしたらロリコンなのではないか？ と、抱かなくてもいい疑惑が少し芽生えてしまっていたので、こうして同年代の女子に対してちゃんと興味がある自分を確認できてホッとしたわけである。

確認する相手が澄香であることに罪悪感と恥ずかしさがあるが。

「はあ……」

しかし。

楽しことを思い出せつとして、母親が死んだときの夢を見た後では土台無理な話だった。

夢の中で見た懐かしき母親の姿をどうしても思い浮かべてしまい、重くなりすぎて滅入り始めた氣を抑えるように額を押さえ、複雑な気持ちで先ほど見た夢の情景を思い返してみる。

俺の母親 久津川星姫は、もともと身体が弱く、俺を産めたことだけでも奇跡的だったのに、親族の反対を押し退け、一人目の子を産もうとした。

俺を『お兄ちゃん』にしてあげたいから、という単純な理由で。

産みたいから産もうとしたのが一番の理由なのだろうが、それを親父から聞かされたときは複雑な気持ちになつた。でも、結局は自分の意思で産むことを決めた母親の意志を俺は尊重している。

その結果が、どうであれだ。

……いや、それは綺麗事か。

その結果としての母親の死に、俺は納得していないのだから。

色々と手を廻したが駄目だった、もしくは、色々と手を廻しても無駄だった、ならまだ納得もしよう。諦めもする。

……でも、もし適切な処置を迅速に行つていたとしたら。

母親は、助かったはずなんだ。

そのとき担当していた医師が、無免許のヤブ医者でさえなれば。

運悪くそんな奴がいたせいで、助かったかも知れない母親は死んでしまつたわけだ。

もちろん、適切な処置を行つても助からなかつたかも知れない。

だけど、もし適切な処置を行つていたら助かつたかも知れない、なんて希望があつたことを考へると、どうにか、遺る瀬無い……。

当然、当時の俺の怒りはそのヤブ医者に向くわけだが、どこからか嗅ぎ付けてきたマスクミ共から連日心無い言葉を浴びせられた身

とじては、今やマスク共に対する憎しみしかない。

それに、あのヤブ医者に対する怒るのも虚しいだけだ。

それ相応の最期 それこそ、絶望の淵で息絶えた奴のことなど、いつまでも根に持つていたって仕方ないのだ。

「…………ふう」

脱力し、重力に身を任せて後ろに倒れ、大の字に横たわる。天井の一点をしばらく見つめた後、皮肉げに口元を歪ませた。

「『お兄ちゃん』……か。少なくとも、俺は良い『お兄ちゃん』には、なれなかつただろうよ」

それは母親に対する皮肉であり、自分に対する皮肉でもあった。

なにせ俺は『お兄ちゃん』にはなれなかつたし、なつたとしても良い『お兄ちゃん』にはなれなかつただろうという自覚があるからだ。それに仕方ないとは言え、今となつては 妹の名前なんぞ、覚えていやしないしな。

『シユウ』だったか『コウ』だったか、そんな感じの名前だった気がするが、確か昔は間違つた覚え方をしていたはずなので、それも違つよつの気もするし、曖昧模糊としている。

親父に聞けば判るのだろうが、そこまでして思い出したいとも思わない。

もう過去の話だ。

」のまま風化していけばいい。

「さて、と……」

そろそろ朝飯の準備に取り掛かる。それからクルルちゃんと買い物に出掛けと……いや、その前に荒波先輩が制服を返しに来るはずだから、それを待つてからの出発か。あ、銀行に行つてお金を卸さないといけないな。それから……。

先のことを頭の中で慌ただしく巡らせ、予定を立てていく思考の途中。

最後の最後に、ふと、安らかな笑みを浮かべた母親の姿が再び浮かんだ。

おそれく、無事に我が子を産めたのだと安心し、心から安堵して浮かべた表情なのだろうと母親の心情を想い。

俺は、

「滑稽、だよなあ……」

そう呟いた。

本心だつた。

備考：

死産した場合

死産は死亡とは違うため出生届が出ない。そのため戒名が付けられないで位牌が作れないことになり、墓に納骨できないのだ。

でも、それは古くからのしきたりに拘る一部のお寺だけで、大体のお寺は位牌を作ってくれるし、納骨もしてくれる。

そして、久津川家の墓は古くからのしきたりに拘るお寺にあったため、納骨はできず、『水子供養』となつた。

そのため、時風の妹の名は刻まれていない。

家族には、なれなかつたのである。

4.2 『引かれてる言葉』（前書き）

今回と次回は話が短いです。元々一つの話だったのですが、長くなつたので分けました。
なので、次回は早く更新できそうです。

クルル・ツェンゼ。

七歳。

超絶お金持ちの娘。

銀髪蒼眼の美少女。

それが、俺が現在預かっている女の子のことだ。

あと、とても“良い子”である。

聰明という意味でも良い子だが、俺の言つことを素直に聞いてくれるし、自分から率先して食器の後片付け等の雑務を手伝ってくれるので、篤実という意味でも良い子だろう。

「…………」

朝食を先に食べ終えた俺は、対面に座るクルルちゃんが箸を上手に扱つてご飯を口に運んでいる様子をなんとも言えない複雑な心境でぼんやり眺めていた。美味しそうに朝食を食べてくれるのは、作つた人間からするとかなり嬉しいものなのだが、今この胸に感じるわだかまりは一体なんなのだろう。

その答えを思索しようとしたそのときにも、来客を告げる呼び鈴が鳴り、中断される。壁に掛けた時計に目を向けると、時刻は七時。少し早いような気がするが、荒波先輩だろうか。確かに朝は早いと聞いたことがあるし、俺もそつだといふことを話した記憶がある。

「お姉さん？」

「みたいだね」

首を傾げるクルルちゃんに頷いて見せ、席を立つ。まだ食器の片付けをしていないが、それは後でするとして先に玄関へ向かうとしよう。

「ちよっと出でるわね」

「うう」

額ぐくるちゃんを横目で見てから玄関へ向かい、覗き窓から来客を視認すると、そこにはやはり荒波先輩の姿があった。

「おお……」

思わず声が漏れる。

……俺が荒波先輩と知り合ったのは去年の十一月初め。この学校に転校してきたその日に生徒会に入会するような奇特な人と出会つて、もう半年になる。今では荒波先輩とは澄香と俺との三人で何度か街中を出掛けたりしている仲だが、こうして私服姿を見るのはこ

れが初めてだつた。

大人びた印象を受ける黒のシフォンチュニックとショートパンツ
といふ格好をした荒波先輩は、普段見慣れない姿もあり、いつもの
五つに束ねた髪を更に気にしなくするぐらに似合つていて、可愛
かつた。

…………そして。

男の性か、ある一点に意識を集中させてゐる。

でかい。

「ねえ、トキちゃん。そもそも視姦するのやめてくれないかな？」

「つまおつー？」

覗き窓の向こうから荒波先輩に声を掛けられ、扉から勢い良く顔
を離す。

そして一つ咳払いすると、すぐには平静を心掛けながらロックを
外し、扉を開けた。

「どうも、荒波先輩。おはよつーぞこます。いやあ、今日は良い天
氣ですね」

「…………」

「…………えつと……」

「…………」

「…………」

「…………」

「すみませんでしたアー。」

笑顔のまま俺を見続ける荒波先輩に根負けし、素晴らしいへ綺麗な十下座を披露する。

しかし、どうして判つたのだろう。

「うんうん。素直に謝れる男子は好感が持てるよ。」

荒波先輩は満足そうに頷き、十下座する俺の脚をぐつぐつと踏んだ。

「踏むなよー。」

ガバシと立ち上がり、十足で踏まれたことも含めて抗議する。

「え、踏んでほしかったんじゃなかつたの……？」

「なんでだよー。踏まれるためにわざわざ十下座するわけないだろー。」

「せうこいつアレイを望んでいるのかなと思つて……」

「アレイとか言つたー。クルルちゃんに聞いたらどうするんです

かー」

「うふ。今のトキちゃんの声で確實に聞こえただろ？ うー」

「……はつー？ しまつたアツー！」

……うーん。

どうして俺は荒波先輩と話してこるといつもペースを乱されるんだろうか。

まあ、本音を語りと楽しいんだがさ。

でも、キャラ崩壊し過ぎである。

「まつたく……。俺の頭脳派キャラのイメージを崩さないでほしいですね」

「黙れ浅知恵野郎」

「これは手厳しい！」

確かに俺のは“浅知恵”だけども。

浅く広くが“悪知恵”的基本だからな。

「私はどうりいかと云ひつて、トキちゃんは『せんとつ』キャラだと思つけどなー」

「戦闘キャラ？ 俺が？」

「ううん、『銭湯』キャラ。友達と銭湯に行つたら真っ先に女風呂を覗いて提案するキャラ」

「最悪なイメージだ！」

しかも最低なキャラだ。

つてか女風呂を覗いて提案するキャラって銭湯キャラって言つんだ。

銭湯好きがそんなキャラになりそっただけど。

「私の勝手な造語だから気にしないで」

「……また心を読んだんですか」

「読んだというか……」

荒波先輩は苦笑を浮かべた。

「トキちゃんつて、思つたことを口にするしがたまにあるから気を付けたほうがいいよ」

「えつー？ 本当ですかー？」

自覚症状がないからやばいな。治すためにこれからは声に出てないか意識するようにして思考しないと。

「さあてど。トキちゃん弄りも一段落ついたことだし、例の物を渡

すとすとすとすとす

そう言つて荒波先輩は、すぐそばに停めていた自転車の籠から紙袋を取り出すと、それを俺に手渡してきた。

「どうもありがとうございます」

受け取り、中を確認する。中には俺の制服が綺麗に折り畳んで入っていた。

……ん?

「これは?」

一緒に入っていたそれを取り出すと、荒波先輩は少し困ったような表情を浮かべた。

「……えーと、携帯のストラップなんだけど、どうかな? センス悪くないかな?」

自分のセンスに対して自信がなかつたようだつた。

「いや全然悪くないですよ。良いんじゃないですか?」

マイクを持った白猫の携帯ストラップで、デザイン的にも中々可愛いと思つ。一組あるのだが、白猫の大きさが違つてゐる。親猫と仔猫だらうか。

「それをトキちゃんとクルルちゃんにと思つたんだけど、気に入らなかつたら付けなくていいからね。というか捨てちゃつてもいい

から

「いやいや、くれるって言つなら付けさせてもらひますよ。俺もこれ気に入つましたし。それにクルルちゃん……」

そういえばクルルちゃんは携帯持つてないんだよな。……うん。今後のために買おうと思つていたしちょうどここにや。今日買いに行くとしよう。猫が好みみたいだし、クルルちゃんもさうと氣に入ることだらう。

「……も氣に入ると思こますよ」

「そつか」

それを聞いて荒波先輩はいつもの笑顔を浮かべた。

そしてその笑顔のまま俺に尋ねてくる。

「最後に一つ、トキちゃんに聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「はあ。いいですけど、なんですか？」

「クルルちゃんと一緒に暮らしているみたいだけど、ビリビリ関係なの？」

「えつと……」

まあ、疑問に思つよな。

しかも『パパ』だなんて呼ばれてるし。

「……それは、ただ単に親父の知り合いから少しの間預かっているだけですよ」

「ふうん……。“預かっている”……ねえ。なるほどなるほど」

何度も頷いて納得する様子を見せる荒波先輩。

そして荒波先輩は、……今まで見たことのない、少し大人びた表情を浮かべ、俺を真っ直ぐに見てきた。

「ねえ、トキちゃん」

備考：

雑談・その1

「ねえ、時風」

「ん？」

「幸せってなんなのかな」

「せりや、生きてこることだら」

「……ふうん。即答ね。ところとま、それがあなたの“答え”なんだ」

「別に俺だけの答えじゃないだろ。全生物共通だと思つが」

「やつら、世の中には、お金があるから幸せだと、家族がいるから幸せだとか言つ人が多いこと思つけど」

「それは幸せを感じているところよつ、ただ有り難く感じているだけじゃないのか」

「でも、それも幸せだつて」とじやないの？」

「まあ、幸せの一つかのは確かだと思つが。……だけど、金がある

から幸せだと、家族がいるから幸せだと、他にも幸せを感じることはあるだろうが、どれもこれも全て、生きているから感じられるものだろ？」

「…………そうね」

「幸せとは、生きて感じられるもののことだと、俺は思ひナビな。…………否定意見はあるか？」

「それがあなたの答えなら、私が否定しても受け付けないでしょ」

「お前が言つなんう受け付けるが」

「バーカ」

「なぜ罵声を……」

「バーカ」

「…………」

「はいはい。俺はバカですよつと。…………でも結局のところ、辞書で調べたら幸せとは『運が良いこと』なんだから」

「それを言つたら

「お仕舞いだな。だけど、それが真理だ」

「…… そうかもね。私達が「うして生きてるのも、考えてみれば運が良いからなんだし」

「その通りだ。…… で、以上が俺の意見なわけだが、澄香にとつての幸せは、なんなんだ？」

「………… 大切な人の、側にいることかしら」

「ほう。家族の側とか？」

「………… ま、それもあるわね

「？」

少しは一人の人間性を垣間見ることができたでしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3327d/>

新米パパ奮闘記！～親子の絆編～

2010年10月9日04時57分発行